

教育実践総合センター年報

滋賀大学教育学部
Faculty of Education

2023年3月 第6号



SHIGA UNIVERSITY

教育実践総合センター一年報 第6号

1 共同研究事業	1
1) 小・中学校における児童生徒一人ひとりの「確かな学力」の向上につながる 組織的・継続的な校内研究	辻 延浩
—児童が理科の見方・考え方を意識的に働かせて問題解決の活動に取り組むために—	
2) 大津市中学校部活動地域移行検討プロジェクト	辻 延浩
3) 理科教育に関する研究	藤岡 達也
探究の過程を通じた学習活動により科学的に探究する力の育成を目指す 高等学校理科における指導改善	
4) 幼児用「運動遊びカード」の開発と実践	奥田 援史
5) 滋賀県における幼児の運動能力に関する調査（2022年度）	奥田 援史
6) 「確かな学力」の向上を目指す，問題発見・解決の過程を重視した 中学校数学科の指導改善	大橋 宏星
—「読み解く力」の視点を踏まえた学習活動と1人1台端末の効果的な活用を通して—	
7) 確かな学力を身に付け，自ら考え学び合う児童の育成をめざして	大橋 宏星
～「読み解く力」の視点をふまえた確かな学力を身に付ける算数科の授業づくり～	
8) 児童・生徒が主体となる「め・じ・と・ま・ふ」の授業展開の工夫	大橋 宏星
～「学び方」を学び，学び続ける子どもの姿を目指して～	
9) 児童・生徒が主体となる「め・じ・と・ま・ふ」の授業展開の工夫	北村 拓也
～「学び方」を学び，学び続ける子どもの姿を目指して～	
10) 思いをもって聴き，自分の思いや考えを発信できる伴谷っこをめざして	北村 拓也
～子どもが主体的に話したり，聞いたりできる授業づくり～	
11) 「読み解く力」の向上を目指して	北村 拓也
～国語科における書く力を高める指導方法～	
12) 幼稚園における事例検討を取り入れた発達障害児への指導力向上研修の実施	山川 直孝
13) 特別支援学級におけるポジティブ行動支援を活用した個別の指導計画 作成研修の実施	山川 直孝
14) アート思考や自己肯定感を高め，互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成	青木 善治
～中規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～	

- 15) アート思考や自己肯定感を高め, 互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成..... 青木 善治
 ～大規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～
- 16) アート思考や自己肯定感を高め, 互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成..... 青木 善治
 ～小規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～
- 17) アート思考や自己肯定感を高め, 互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成..... 青木 善治
 ～大規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～
- 18) 児童生徒が学びを実感することができる授業づくり..... 長岡 由記
 ～「㊦んと考えひとり学び」と「㊦んがえの共有」の工夫～
- 19) 造形活動における「学びの場」と授業改善モデル..... 新関 伸也
- 20) 美術科における題材のルールを生徒が自ら考える授業..... 新関 伸也
- 21) 地域連携型校内研究システム「つながる校内研究」の実証的研究..... 渡邊 慶子
 ～「Lesson Study シート」の開発を通して～
- 22) 主体的に遊ぶ子どもの育ちを支えるための環境づくり(4歳児)..... 塩見 弘子
- 23) 「確かな学力」の向上を目指す, 児童が見通しをもつことに重点を置いた
 指導と評価の一体化..... 加納 圭
 -児童の学習把握に1人1台端末を活用した小学校理科の指導改善-
- 24) 義務教育現場を対象とした【声を鍛えるルーティントレーニング】の作成・実施
 「反復トレーニング」編..... 渡邊 史
- 25) 附属特別支援学校高等部との協働による音楽の授業開発プロジェクト..... 林 睦
- 26) 地域とともにある教育活動の教育実践..... 今井 弘樹
 ～地域でのボランティア活動の達成感で育む生徒の自尊感情～
- 27) 教師力向上を目指したOJT研修..... 今井 弘樹
 -職場の同僚性を高め, 授業改善を図るために-
- 28) 石山っ子わくわく親子で畑体験隊..... 森 太郎
- 29) 地域の在来野菜の栽培を通じた総合的な学習の時間のプログラム開発..... 森 太郎
- 30) 情報活用の実践力を基盤とした中学校社会科の思考・判断・表現力の育成..... 岸本 実
- 31) 地域にねざした学校カリキュラムの開発..... 岸本 実
- 32) 小学校教員の指導力向上を図る校内研究・校内研修..... 岸本 実
- 33) 児童が自らの学習の状況を把握し, 主体的に学習を調整する小学校外国語科
 における言語活動の充実..... 大嶋 秀樹

2	石山プロジェクト	65
3	出前講義	67
4	教職探究講座	77
5	教育臨床研究	79
6	情報教育研究	83
7	教育実習支援(その1)	85
8	教育実習支援(その2)	87
9	キャリア支援の取り組み	89
10	教員志望について「志望の変遷」を追う	91
11	業務報告	102

1 共同研究事業

1) 小・中学校における児童生徒一人ひとりの「確かな学力」の向上につながる組織的・継続的な校内研究 ～自校の課題解決に向けた重点的な取組を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は「小・中学校における児童生徒一人ひとりの「確かな学力」の向上につながる組織的・継続的な校内研究 ～自校の課題解決に向けた重点的な取組を通して～」であり、研究テーマは「小学校における体力向上策を支援する新体力テスト『新・分析支援システム』の作成」である。担当者は次のとおりである。

教育学研究科高度教職実践専攻：辻 延浩，教育学部附属小学校：楠見丹生子副校長

滋賀県総合教育センター：小笹由花研究員，西村 央研究員，菅原 薫研修指導主事

米原市立大原小学校：坂田将至教諭，守山市立河西小学校：竹内良樹教諭，日野町立桜谷小学校：藤澤美奈教諭，長浜市立長浜小学校：清水香奈教諭，野洲市立野洲小学校：角 憲幸教諭，

大津市立皇子山中学校：森林雅斗教諭，長浜市立東中学校：小山智行教諭

2. 事業の目的

本研究では、プロジェクト研究実践校（以下、実践校という）において校内研究主任を務める研究委員が、プロジェクト研究会での研修と実践校での実践の往還を踏まえて、校内研究を管理職との連携のもとで推進することを目的とした。具体的には、校内研究において自校の課題解決に向けた組織的・継続的な「共通理解・共通実践」を図り、その成果を日々の授業に生かすことで、児童生徒一人ひとりの「確かな学力」の向上につながると考え、研究協力校の取り組みをまとめるとともに、成果と課題について検討した。

3. 事業の概要

(1) 質問紙調査からみる校内研究の実態 ～校内研究主任対象質問紙調査より～

県内すべての市町立小，中学校の校内研究主任を対象に質問紙調査を6月に実施した。調査では、県内の315校の小，中学校のうち85%にあたる269校の校内研究主任から回答を得た。調査の結果から、児童生徒の学びについて、主体的な学びに関する質問と対話的な学びに関する質問に比べ、深い学びに関する質問の肯定的な回答の割合が低かった。また校内研究に関しては、校内研究主任の回答と令和3年度の全国学力・学習状況調査[学校質問紙]（滋賀県）への管理職の回答を比較すると、データを基に課題を焦点化していると捉えている校内研究主任の割合が管理職の値に比べて低かった。自校の課題を的確に把握したうえで校内研究に取り組むためには、学校全体の実態をより把握している管理職とさらに連携を強める方策を探る必要がある。組織的・継続的な「共通理解・共通実践」を図るために、各教員が校内研究での学びを日々の授業に生かし、児童生徒の学びの姿から実践の成果と課題の検証を重ねられるよう、教員が日常的に参観し合える仕組みづくりについて明らかにしていく必要があると考えられる。

(2) 校内研究の実際

1) 校内研究会での学びと日々の実践を往還させる校内研究（A中学校の例）

A中学校では、専門教科や担当学年の異なる教員が同じ方向に向かって実践し、「共通理解」を深められるように組織づくりを行った。校内研究主任は、年度初めに、国および県の動向やA中学校の実態を把握している校長からの助言を得ながら（写真1）、今年度の校内研究で目指す授業や生徒の学びの姿として、「A中スタンダード」を活用することにした。さらに、各学年から2名、特別支援学級から1名の校内研究推進委員を選出し、校内研究主任を中心としたチームで校内研究が推進できる体制を整えた。5月には「A中スタンダード」を基に各教員が自己分析を行い、「A中スタンダード」と照らし合わせて自分の強みの強化や課題の克服のために行う実践を「めあての設定」「聴く」「考える」「表す」「振り返りの時間」から選び、授業改善の方向性を定めた。校内研究会では、まず、グループごとに研究テーマを設定し、そのテーマを基に各教員が個人の研究テーマを設定した。設定した研究テーマは「授業アップデートシート」に記載し、常に意識できるようにした。これらのことにより、校内研究会では、専門教科や担当学年の異なる教員が、グループや自分のテーマを軸に互いの実践の成果や課題について積極的に語り合う姿が見られた。



写真1 管理職と校内研究の方向性について話す研究主任

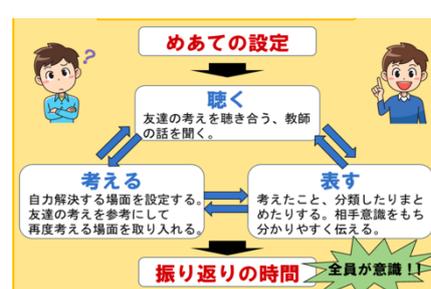


図1 「A中スタンダード」

2) 校内研究の成果と課題を全ての教員で共有しながら進める校内研究（B小学校の例）

B小学校では、自校の課題を焦点化し、学校全体で進める「共通実践」の方向性や内容に一貫性をもたせるため、年度初めに、全国学力・学習状況調査の問題を全ての教員が解く機会を設けた。また、児童の回答を解答類型に着目しながら分析し、児童の強みと課題を把握したうえで、今年度の取組内容について協議した。分析結果や協議内容については、校長が「校長通信」にまとめて発信し、全ての教員の「共通理解」をより確かなものにした。その後、校内研究の具体的な取組内容や方向性を管理職と校内研究主任、各分掌の担当者が検討し、校内研究会で示された。随時発行される「校内研通信」には、各回の校内研究会の位置づけや自校の課題解決のための「共通実践」の方向性等が校内研究主任から示された。2学期には、各教員の取組や各教員が校内研究会で学びたいことを共有する欄が設けられた。また、各教員による自分の実践の自己評価は、印刷室に貼られた「我が校の学ぶ力向上策」に各自が評価別のシールを貼ることで共有された。校内研究主任によるこれらの工夫や各教員による取組の価値は、「校長通信」で示された。このように、管理職との連携のもと実践や思いを共有する機会を設けたことで、授業研究会等の協議の場面において自分事として積極的に参加する教員が多く見られ、自らの強みを生かしたり、課題と向き合ったりしながら授業改善が進められた。

4. 今後に向けて

児童生徒一人ひとりの「確かな学力」の向上を目指し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進していくためには、児童生徒の学びの姿を見取る力量を高め、児童生徒の実態を踏まえた校内研究を推進していく必要がある。一方、働き方改革が求められる中、教員の資質向上を図るためには、校内研究会だけでなく、各教員がニーズやキャリアステージに応じて選択できる研修（学びの場）が求められる。

（辻 延浩）

1 共同研究事業

2) 大津市中学校部活動地域移行検討プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は「大津市中学校部活動地域移行検討プロジェクト」であり、担当者は次のとおりである。

教育学研究科高度教職実践専攻：辻 延浩，立命館大学：長積 仁教授，びわこ成蹊スポーツ大学：大西祐司専任講師，成安造形大学：藤井俊治助教，大津市立粟津中学校：高田和子校長，大津市立石山中学校：山本洋祐校長，大津市スポーツ協会：池田勝三事務局長，大津市市民部：小島拓生スポーツ推進監，足立寿通スポーツ推進課長 他

大津市教育委員会事務局：中野啓一学校教育課長，中川恵実子学校教育課長補佐，奥野雅也学校教育課指導主事，奥田研二主任 他

2. 事業の目的

大津市の中学校部活動の地域移行の在り方について検討することを目的とする。学校の働き方改革に併せて生徒にとって望ましい地域移行になるよう，学校の現状，地域の実情，競技の特性を踏まえた視点で検討を進める。

3. 事業の概要

(1) 中学校部活動の地域移行に関する検討会議提言の概要

○目指す姿

- ・少子化の中でも，将来にわたり我が国の子供たちがスポーツに継続して親しむことができる機会を確保。このことは，学校の働き方改革を推進し，学校教育の質も向上。
- ・スポーツは，自発的な参画を通して「楽しさ」「喜び」を感じることに本質。自己実現，活力ある社会と絆の強い社会創り，部活動の意義の継承・発展，新しい価値の創出。
- ・地域の持続可能で多様なスポーツ環境を一体的に整備し，子供たちの多様な体験機会を確保。

○改革の方向性

- ・休日の運動部活動から段階的に地域移行していくことを基本とする。
- ・目標時間：令和5年度の開始から3年後の令和7年度末を目途。
- ・平日の運動部活動の地域移行は，できるところから取り組むことが考えられ，地域の実情に応じた休日の地域移行の進捗状況等を検証し，更なる改革を推進。
- ・地域におけるスポーツ機会の確保，生徒の多様なニーズに合った活動機会の充実等にも着実に取り組む。
- ・地域のスポーツ団体等（図1）と学校との連携・協働の推進

(2) 大津市の部活動における現状と課題

〈部活動を取り巻く環境の変化〉

①市立中学校生徒数：9,057人（平成29年）→8,867人（令和4年） 190名減少

②設置部活動数：252部（平成29年）→243部（令和4年） 9部減少

③部活動加入率：88.8%（平成29年）
→85.7%（令和4年） 3.1%減少

〈課題〉

①部活動の機会減少

- ・団体種目における部員不足
- ・設置部活動の見直しによる選択肢の減少
- ・専門性のある指導が受けられない

②教員の負担

- ・競技経験のない部活動指導者
- ・休日の指導や大会等への引率

(3) 今後の展望

〈令和4年度〉

- ・部活動地域移行検討懇話会の発足
- ・他都市の事例研究
- ・モデル事業の制度設計（学校の現状、地域の実情、競技の特性）

〈令和5年度〉

- ・部活動地域移行検討懇話会の継続
- ・モデル事業の実施及び検証，兼職兼業の運用開始（下半期）
- （案）①大学との連盟（スポーツ）：滋賀大学・びわこ成蹊スポーツ大学・立命館大学
- ②大学との連携（芸術活動）：成安造形大学
- ③地域との連盟：大津市スポーツ協会・コミュニティスクール
- ④部活動指導員の単独での指導：部活動指導員配置予定校（7校）

- ・別モデル事業の制度設計

〈令和6年度〉

- ・部活動地域移行検討懇話会の継続
- ・モデル事業の実施及び検証
- ・地域移行の開始
- ・推進計画の策定

〈令和7年度〉

- ・部活動地域移行検討懇話会の最終
- ・地域部活動の拡充

4. 今後に向けて

令和4年7月に「大津市部活動地域移行検討懇話会」が発足して4回の会議が開催された。会議では、まず初めに大津市における部活動の現状と課題や地域移行の課題について意見交流が行われた。続いて、部活動のニーズについて子供・学校・保護者に対してアンケート調査を実施し、その結果に対して議論した。進むべき方向性について概ね共通確認ができ、今後は具体的なモデル事業の制度設計とその検証が求められる。指導者の確保や事業実施に係る予算の確保など解決すべき課題は残されているが、持続可能で多様なスポーツ環境を一体的に整備できるよう、引き続きこの懇話会において検討がなされる。

（辻 延浩）

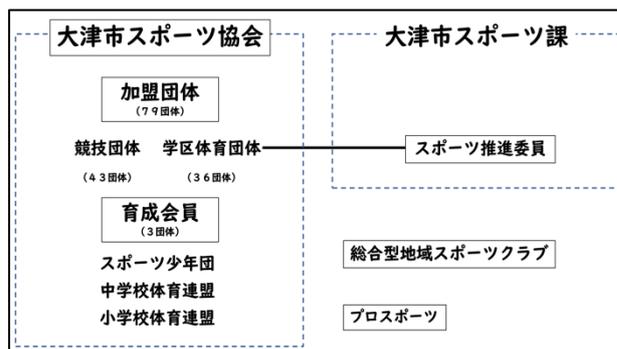


図1 大津市スポーツ団体組織図

1 共同研究事業

3) 理科教育に関する研究

探究の過程を通じた学習活動により科学的に探究する力の育成を目指す高等学校理科における指導改善

1. 事業名および担当者

事業名は、滋賀県の高校理科に関する実践研究であり、担当者は以下のとおりである。

教育学系：藤岡達也（代表・トータルアドバイザー）

滋賀県総合教育センター：澤寿朗（係長），権並渉（研修指導主事），尾田雄祐（研究員）
鵜野和也（研究員）

滋賀県教育委員会事務局高校教育課：河原真（指導主事）

滋賀県立東大津高等学校：小林正幸（教諭），滋賀県立石部高等学校：澤速人（教諭）

2. 事業の目的

これまで、滋賀大学教育学系理科講座と滋賀県総合教育センターとでは、学校と連携して派遣された研究員とともに、県内での新たな理科教育の開発に取り組んできた。今年度は、2校の県立高等学校の協力によって、探究の過程を通じた学習活動により科学的に探究する力の育成を目指す高等学校理科における指導改善の研究を行った。具体的には、1人1台端末を活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることを通しての取組であった。さらに、生徒自身が到達目標を理解できるような探究学習のプロセスの方法として、ルーブリック評価の活用を継続的に実施した。

3. 事業の概要

学習指導要領に示されているように、科学的に探究する力を育成するにあたっては、生徒自身が「自然の事物・現象の中に問題を見出し、見通しをもって観察、実験などを行い、得られた結果を分析して解釈するなどの活動を行うこと」が重要であり、探究の過程を伴った学習活動の構築が求められる。そこで、本研究では、探究の過程を通して学習活動を行い、科学的に探究する力の育成を目指した。また、高等学校理科においても、小学校、中学校で培われてきた「理科の見方・考え方」を働かせながら「知識及び技能」を習得し、思考、判断、表現しながら主体的に学習に取り組む教科である。そのため、生



徒が「理科の見方・考え方」を働かせて取り組めるよう留意し、探究の過程を重視しながら学習活動の指導計画を構想した。ここで、具体的な授業の展開として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させるための学習活動が重要な意味を持つ。

まず、「個別最適な学び」について、生徒は見通しをもって観察・実験を行うため、探究の過程の「仮説の設定」と「検証計画の立案」として個別に学習活動に取り組む。その際、授業での学習活動に加えて授業以外の場での活動を取り入れ、生徒自身のペースで取り組めるようにする。また、学習進度や学習到達度等に応じ、生徒が授業後から次の授業までの間の時間を有効に使い、学習活動における自身の考えを深めたり、新たな視点を得るために自身で調べたりして常に考えながら取り組めるようにする。指導者は、開発したルーブリックによって生徒が考えを深めたり調べたりする手段を示すことで、生徒が主体的に学習に取り組めるように支援する。さらに、指導者が生徒の学習進度や学習到達度等を授業中や授業外に把握することで、指導が個に応じたものになるよう改善を行う。これらの流れの中で単元や毎時間の授業の目標を全ての生徒が達成できることを目指す。

次に「協働的な学び」についても、生徒は、探究の各過程の中で、他者との話合いや情報共有などの学習活動に取り組むことで、自分の考えをメタ認知的に捉え、新たな知を創り出す。指導者は、1人1台端末で生徒の考えを共有できるようにし、共有された考えを、これまでの取組で開発したルーブリックの達成基準と照らし合わせて、生徒が科学的な視点で自身の考えと他者の考えを比較できるように促した。これらの学びのプロセスを繰り返すことによって、生徒自身の考えを整理して再構築する。

本研究は、これまでも総合教育センターにおいて、取り組まれてきた高等学校の「理科教育に関する研究」の一環である。積み重ねられた成果を踏まえながら、探究の過程の「仮説の設定」と「検証計画の立案」の各過程において、生徒自身が仮説や検証計画を考える学習活動を充実させた。その際には、従来指摘されているようなPDCAサイクルだけでなく、OODA ループやサイクルも一連の探究学習の効果的なプロセスとなる。いずれにしても、指導者側の適切な働きかけが重要な意味を持つ。

なお、今年度は総合教育センター内での研究会や県内の高等学校の研究授業だけでなく、3年ぶりに対面形式で、研究発表及び協議会が開催された。研究発表会にはコロナ禍前よりも多くの参加者が見られ、質疑応答や大学教員側の解説にも熱心な姿勢が見られた。

4. 今後に向けて

現学習指導要領において、高等学校では「総合的な探究の時間」が設定され、探究活動が重視されつつある。探究活動を実施するにあたっては、学習者の学びの過程を重視する必要がある。また、今日、重視されている「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させる取組も無視することができない。それらを踏まえ、本県の県立高等学校では、1人1台端末環境の整備とあわせて授業支援アプリやノートスクールの活用も始まっていることはタイミングとしては好適と言える。つまり、これらを生徒は学習の記録や、他者との話合い、情報共有に活用することの可能性が高まっている。また、指導者は学習状況の把握やフィードバックなどに活用する探究の過程を通じた学習活動を更に充実させることができるよう、PDCAサイクルだけでなくOODAサイクル(ループ)によって、探究活動を勧めることができるような取組が必要である。さらに、従来から指摘されているように、「指導と評価の一体化」は不可欠である。学習指導要領に則った観点別の評価研究を進めるとともに、探究活動においてはルーブリックを用いた評価や評価計画についても、今後一層研究することが求められている。本年度はその点でも先駆的な取組であるが、今後の継続的な実践研究も期待したい。

(藤岡 達也)

1 共同研究事業

4) 幼児用「運動遊びカード」の開発と実践

1. 事業名および担当者

事業名：幼児用「運動遊びカード」の開発と実践

担当者：教育学部（学部教員）奥田援史，草津市子ども未来部（副部長）前田典子，他。

2. 事業の目的

本事業の目的は，幼児用「運動遊びカード」を作成・利用することで，幼児の活動量を検討する。

3. 事業の概要

まず，運動遊びカードを作成する。主体的に楽しい活動であり，また多様な動きがあることを念頭に置いて作成した。

次に，草津市立認定こども園の幼児を対象に，幼児用「運動遊びカード」を利用して，どの程度の活動量の増加が見込めるかを検討する。

4. 事業の結果とまとめ

運動遊びカードは「うさぎにへんしん！5かいとぼう」「あかいものをたっちしよう」「にんじやにへんしん！へやをいっしゅうしよう」などイラスト入りのカードを13枚作成した（下左の写真）。

次に，4，5歳児クラスの幼児を対象に，数人のグループごとに運動遊びカードを用いて主体的に活動をしてもらった（下右の写真）。その際，幼児の腰に簡易な万歩計を装着した。その結果，平均で約700歩の活動量であったほか，楽しく活動ができたといった感想を確認した。

現状としては幼児の場合，2000歩/日程度が不足していると考えられるので，主体的に楽しく遊ぶことで身体活動量の増加を期待したい。（奥田 援史）



1 共同研究事業

5) 滋賀県における幼児の運動能力に関する調査（2022年度）

1. 事業名および担当者

事業名は、「滋賀県における幼児の運動能力に関する調査」であり、担当者は次のとおりである。
教育学部：（学部教員）奥田援史，滋賀県教育委員会：（主事）村部謙介。

2. 事業の目的

滋賀県内の幼稚園，保育所，認定こども園の園児（4歳児クラス及び5歳児クラス）を対象として，運動能力について調査する。

3. 事業の概要

1) 実施した内容

・調査実施園及び測定対象者数

滋賀県内の幼稚園，保育所及び認定こども園の126園を測定園とした。測定対象者は4，5歳児クラスの園児である。分析対象とした幼児データは7,489人分である。

・調査内容

幼児運動能力テストを実施した。このテストは，25m 走（秒），立幅跳び（cm），体支持持続時間（秒），テニスボール投げ（m），両足連続跳び越し（秒），捕球（回）の6種目で構成されている。運動能力の測定は，各園で実施した。なお，実施方法に関するDVDを配布し，測定方法の周知を図った。

2) 調査結果

換算表を用いて各テスト項目の測定値を5点～1点までの評定得点に換算する。評定得点の出現確率（括弧内の値）は，5点（7%），4点（24%），3点（38%），2点（24%），1点（7%）となっている。次に各評定得点を単純加算し，合計評定得点を算出して，その後AからEのグループごとの人数とその割合を求めた（下表）。Aは最も運動能力水準の高いグループである。

	男児				女児			
	4歳児		5歳児		4歳児		5歳児	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)
A	83	5%	135	7%	182	10%	170	9%
B	361	22%	525	27%	399	23%	514	28%
C	443	27%	513	27%	500	29%	524	29%
D	478	29%	509	26%	426	24%	430	24%
E	268	16%	248	13%	241	14%	183	10%

4. 今後に向けて

昨年度と比較すると，今年度は女児の運動能力の低下傾向が認められる。引き続き，運動遊びの活性化を意図した取組みが必要である。（奥田 援史）

1 共同研究事業

6) 「確かな学力」の向上を目指す、問題発見・解決の過程を重視した中学校数学科の指導改善 －「読み解く力」の視点を踏まえた学習活動と1人1台端末の効果的な活用を通して－

1. 事業名および担当者

事業名は「確かな学力」の向上を目指す、問題発見・解決の過程を重視した中学校数学科の指導改善－「読み解く力」の視点を踏まえた学習活動と1人1台端末の効果的な活用を通して－であり、担当者は次の通りである。

滋賀県総合教育センター：加藤由紀（主幹），高橋利彰（研修指導主事），北村俊（研究員）

東近江市立湖東中学校：安田浄（校長）

滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課：川口博史（指導主事）

甲賀市立甲南中学校：原裕輝（教諭） 米原市立双葉中学校：速水峰子（教諭）

高島市立マキノ中学校：田中節子（教諭）

教職大学院：大橋宏星

2. 事業の目的

令和3年度全国学力・学習状況調査の調査結果より、中学校数学科において滋賀県は記述式の問題における無解答率は全国平均より高く、知識の定着や数学的に表現することに課題があると考えられる。また、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 数学編において、指導改善を進める際には、数学的な見方・考え方を働かせ、問題発見・解決の過程を遂行するといった数学的活動について、一層充実していくことが求められている。

そこで、本研究では研修と実践の往還により、「読み解く力」の視点を踏まえた学習活動と1人1台端末の効果的な活用を通して、問題発見・解決の過程を重視した中学校数学科の指導改善を進めることで、「確かな学力」の向上を目指す。

3. 事業の概要

本研究では、中学校数学科において、研究委員が中心となって自校の課題を焦点化したうえで、生徒の具体的な姿を想像して指導改善を進めた。また、研修と実践の往還の中で、各校において教科部会を設定した。問題発見・解決の過程を遂行する生徒の各活動において、数学科の指導者全員が「読み解く力」の視点を踏まえた学習活動をするための数学的な思考を促す発問の工夫をしたり、1人1台端末を効果的に活用したりすることで、生徒は主体的に問題発見・解決の過程を遂行することができた。そのことにより、数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動が充実し、「確かな学力」の向上につながった。

3-1 プロジェクト研究会と実践校での取組の往還

本研究の目標を達成するために、研究委員が研修と実践を往還しながら問題発見・解決の過程を重視した中学校数学科の指導改善を進めることができるよう、総合教育センターで実施するプロジェクト研究会と実践校での取組を実施した。

プロジェクト研究会では、課題の改善に向けた取組の重点に基づいた具体的な取組の協議や演習、「単

元構想シート」「授業ナビシート」を用いた授業構想，研究授業の参観を通して問題発見・解決の過程における必要な手立てや工夫について講義・演習を行った。各実践校では，プロジェクト研究会での演習や協議を受け，実践校の数学科教員と「共通理解シート」を用いての課題の焦点化や，授業構想・実践を行い，授業に対する振り返りをするこゝで，研究員の指導改善を行った。

3-2 研究委員，実践校の数学科の指導者，生徒の意識の変容

研究委員にプロジェクト研究会に参加する前と参加してからの数学科の授業構想において，数学的活動に対する意識や生徒の学ぶ姿の変容について交流したところ，「ズレが生じる場面を授業に取り入れ，問いへのつなぎ方を考えるようになった。」「発問や問い返し，追発問を意識するようになった。」「振り返りで，生徒に何を書かせたいかについて，指導目標を踏まえて伝えるようになった。」など，多くの変容が見られた。その中で，生徒が主体的に問題発見・解決の過程を遂行するためには，指導改善において上記の五つの要点があることを見いだした。

- | |
|-----------------------------|
| ① 生徒が問いを見いだす |
| ② 「読み解く力」の視点を踏まえた学習活動を取り入れる |
| ③ 1人1台端末を効果的な場面で用いる |
| ④ 数学的な思考を促す発問をする |
| ⑤ 学びの変容を自覚する振り返りをする |

指導改善における五つの要点

また，問題発見・解決の過程を重視した指導改善を継続的に進めてきたことで，生徒の振り返りの記述が，単なる感想を記述したものではなく，数学的な見方・考え方を働かせたことが分かる振り返りの記述や，数学的活動の楽しさや良さを実感していることがうかがえる振り返りになってきた。

3-3 事業のまとめ

本事業では，総合教育センターにおける研修と各校での実践を往還しながら，本事業の課題である「確かな学力の向上を目指す 問題発見・解決の過程を重視した中学校数学科の指導改善」に取り組んだ。その結果，以下のことが得られた。

- (1) 「読み解く力」の視点を踏まえた学習活動と1人1台端末の効果的な活用を取り入れて，授業を組み立てたことにより，指導者は生徒の数学的な思考を促したり，整理したりする発問や手立てを考えることができ，生徒が主体的に問題発見・解決の過程を遂行することにつながった。
- (2) 数学科の指導者が，学校や学年で統一して授業実践で取り組む具体的な内容を共通理解し，継続的に，問題発見・解決の過程を重視した指導改善を進めたことにより，数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動が充実し，「確かな学力」の向上につながった。

4. 今後に向けて

- (1) 方法や手順等を説明する際，数学的な表現で記述することについて苦手な生徒は多い。そのため「確かな学力」の向上に向けては，「問題を見いだす」と「解決過程を振り返る」の場面に重点を置き，さらなる学習指導の充実を図る必要がある。
- (2) 本研究では，教科部会を通して他の学年に広めていくことを行ったが，主として中学校第1学年での授業実践となった。そのため，数学科の指導者全体で指導改善をさらに進めていくためには，内容の系統性をより意識したうえで，問題発見・解決の過程を重視していく必要がある。

(大橋 宏星)

参考：滋賀県総合教育センター令和4年度中学校数学科指導力向上プロジェクト研究 研究論文

1 共同研究事業

7) 確かな学力を身に付け、自ら考え学び合う児童の育成を目指して －「読み解く力」の視点をふまえた確かな学力を身に付ける算数科の授業づくり－

1. 事業名および担当者

事業名は「確かな学力を身に付け、自ら考え学び合う児童の育成を目指して－「読み解く力」の視点をふまえた確かな学力を身に付ける算数科の授業づくり－であり、担当者は次の通りである。

東近江市立能登川北小学校：北村 定治（校長），榎並 洋貴（研究主任）

教職大学院：大橋 宏星

2. 事業の目的

結果だけでなく、「問題場面を的確に把握する（情報を整理）こと」「解答に向かう道筋を自分の言葉で説明すること」にこだわって授業を展開し続けることは、子どもたちの思考力・表現力を育むことにつながるだろうという研究仮説のもと、授業実践・省察を行う。また、子どもたちの学ぶ力を向上させるとともに、指導案検討や事後研究会での学びを教員自身が自分事として捉え、教員一人一人の指導力向上に努める。

3. 事業の概要

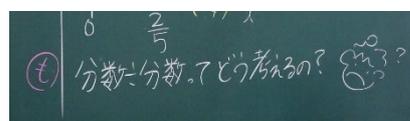
年間を通して、全クラスで研究授業を行い、働かせたい見方・考え方を明確にして、単元計画を立てるとともに、問題解決の際にどのように数学的な見方・考え方を働かせるかを子どもの学びの姿から検証する。大学担当者は、事前の指導案検討および事後研究会の指導助言にあたる。

6月10日(金) 研究授業① 6年 分数のわり算	10月4日(火) 5年指導案検討
6月29日(水) 研究授業② 1年 長さ	10月12日(水) 研究授業④ 5年 面積
8月26日(金) 4年指導案検討	11月4日(金) 3年指導案検討
9月14日(水) 研究授業③ 4年 わり算	11月10日(木) 研究授業⑤ 3年 小数

研究授業① 第6学年 分数のわり算

「除数が分数である場合の除法の計算の仕方について、多面的に考える」ことをねらいに授業を行った。単元を通して、分数の見方や乗法・除法の計算をする際に働かせる見方・考え方を明確にして授業を進めた。前学年までの乗法・除法の計算をする際に働かせた見方・考え方を単元の導入段階で振り返り、学習の足跡として教室に掲示し、問題解決時に考える手立てとした。

本時は「EM菌 $\frac{1}{4}$ dL で $\frac{2}{5}$ m² 効果がある。この EM 菌 1 dL では何 m² 効果があるか。」と、プール掃除で使用した EM 菌を題材に問題を設定した。子どもたちは数直線図を用いて、 $\frac{2}{5} \div \frac{1}{4}$ と立式をした。既習の学習では分数÷整数を学習していたが、「分数で割るっ



てどういうことだろう」「分数÷分数ってどうやって計算するんだろう」と子どもの困り感をもとに課題を設定した。自力解決では、掲示物を参考にしながら既習の見方・考え方を働かせ、『分数を小数に直して考える』『面積図を描いて考える』『通分して考える』など様々な方法で解決をする姿が見られた。子どもたちの授業の振り返りでは、「面積図を使ったら分かりやすく解くことができた」と、既習の見方・考え方を働かせる良さを実感している様子も見られた。

「分数÷分数は逆数をかければよい」と、方法だけ覚えている子どもが多い。しかし、意味も分からずに覚える知識は定着しにくい。このクラスは、次の時間に割り算の意味について面積図を用いて再度考える活動を通して、「割り算は1あたりの量を求めているから逆数をかければいいんだ」と、子どもたち自身で分数の除法の計算方法を導き出した。既習の数学的な見方・考え方を働かせることで、分数の除法の計算方法を見出だすことができた実践であった。

研究授業⑤ 第3学年 小数

「小数の表し方と仕組みに着目し、和が1をこえる小数第一位どうしの加法計算や1から小数をひく減法計算の仕方を考え、説明することができる」ことをねらいに授業を行った。教科書では小数の加法と減法それぞれで1時間ずつ授業を行う計画であったが、働かせる数学的な見方・考え方は同じであることから、加法と減法両方を1時間で扱うこととした。

まず、「ジュースを0.5L飲みました。すぐにまた、0.8L飲みました。あわせて何L飲みましたか」という問題から、 $0.5+0.8$ と立式し、答えの求め方を考える活動を行った。自力解決では、数直線で考える子や、筆算で考える子、液量図を用いて考える子など子どもに応じた様々な方法で解決する姿見られ、クラス12名全員が『1.3L』と正答を導き出すことができていた。しかし、子どもたちの計算方法の記述を見ると、下記のような記述が見られた。

<p>0.5と0.8の小数点をとって$5+8=13$で、$0+0$をしても0だから13に小数点を戻して1.3</p>	<p>筆算をしてその次に小数点をつけて1.3</p> <p>$0+0$は0だけど$5+8=13$だから0.13は違うから、0のところに1を書いて3は一の位に書く。答えは1.3</p>
--	---

そこで、「0.13が違うわけを言える人」「小数を戻すってどういうこと」と、追発問をした。すると、子どもたちは「 $5+8$ の時は13の3はそのままの位だけど、1は繰り上がって1個上の位に行くから」や「一の位に2個数字は入らないから」と、既習の数の見方・考え方を働かせて、数の仕組みに着目して考える姿が見られた。そして、「0.5は0.1が5個で0.8は0.1が8個で、合わせると0.1が13個で1.3」という考えにつなげることができた。0.1がいくつ分かで考えると計算できることを理解できたことで、ひき算も同じ考え方を使えばできるという見通しを持つことができ、その後のひき算の計算に取り組むことができた。答えが出れば良いというわけではなく、数の見方・考え方を丁寧に確認することで、理解が深まり発展的に考えることができた実践であった。



4. 今後に向けて

目の前の1問が解けるかどうかだけでなく、見方・考え方を働かせることで、次の学習や生活場面で生きることにつながっていくことを意識して指導にあたることが大切である。今後も、数学的な見方・考え方を働かせる授業を意識して単元構想をし、授業実践を続けていきたい。(大橋 宏星)

1 共同研究事業

8) 児童・生徒が主体となる「め・じ・と・ま・ふ」の授業展開の工夫（算数科・数学科） －「学び方」を学び、学び続ける子どもの姿を目指して－

1. 事業名および担当者

事業名は児童・生徒が主体となる「め・じ・と・ま・ふ」の授業展開の工夫－「学び方」を学び、学び続ける子どもの姿を目指して－であり、担当者は次の通りである。

東近江市教育研究所：宮居 伝（所長），斎藤 陽（指導主事），
教職大学院：大橋 宏星

2. 事業の目的

東近江市の「三方よし学力向上プラン」で示された学ぶ力向上のための三本柱の視点から本市の課題を解決するための方策を、授業研究を通して明らかにする。また、研究を通して推進委員の指導力向上を図り、研究成果を市内に示すことで、全市教職員の指導力を一層向上させることを目的とする。

3. 事業の概要

本事業は、東近江市の学力向上検討会議の中の授業改善推進委員会において、本市の課題である点について小学校国語科部会・算数科部会，中学校国語科部会・数学科部会で取り組み，成果等を市内に発信・普及している。各部会は，市内の教員3～5名の推進委員と部会長（校長・教頭）で構成されており，本学教員は算数科・数学科部会のアドバイザーとして，授業研究会や単元計画・指導案の検討時の指導助言を行った。

事業の日程については以下のとおりである。（下線は参加した会議等）

5月10日	第1回全体会	今年度の組織・年間計画	研究テーマの検討
5月30日	算数科部会	授業構想検討会	5月24日 数学科部会 授業構想検討会
6月24日	算数科部会	指導案検討会	6月7日 数学科部会 指導案検討会
7月8日	算数科部会	第1回授業研究会	6月21日 数学科部会 第1回授業研究会
8月	第2回全体会	研究発表の内容検討	
8月19日	東近江市教育研究所	研究発表大会	
8月19日	算数科部会	授業構想検討会	9月26日 数学科部会 授業構想検討会
10月11日	算数科部会	指導案検討会	10月18日 数学科部会 指導案検討会
10月28日	算数科部会	第2回授業研究会	11月4日 数学科部会 第2回授業研究会
11月	第3回全体会	成果と課題	
2月	第4回全体会	研究のまとめ	

3-1 研究の内容

児童・生徒の「自ら学びに向かい続けられる力」を高めるために下記の3つのステップで授業を構想する。

①教科・単元・授業で育成する資質・能力を明確にする

教科の特質に応じた「見方・考え方」をもとに，学習する単元・授業において「学ぶ」ことの本質的な意義を指導者が明確にし，児童・生徒の学びにつなげる。

②児童・生徒が学びの主体となるような授業展開を考える

子ども自らが学習問題を発見する導入と、学びの良さや自己の変容を実感できるような振り返りの充実に焦点を当てて研究を進める。

③授業展開や掲示物、支援の工夫など、具体的な手立てを考える

ICT の活用や、学び方を意識するような掲示物など、子ども自ら学びに向かい続けられる力を高めるための具体的な手立てを考える。

3-2 小学校算数科部会の実践

第6学年「比」 『数学的な見方・考え方を働かせる授業』

「比の意味と表し方について理解し、比で表すことの良さに気付くことができる」ことをねらいに授業を行った。同じ味のハンバーグソースを作るにはウスターソースとケチャップをどんな割合で作ればよいかという、子どもの身近な話題から学習場面を設定した。まず、1人分のソースを作る割合から大人数の分のソースに必要な量を考えた。子どもたちは人数が増えるにつれて必要な分量も増えることから既習の比例の考え方を働かせ、100人分のソースづくりの分量を求めることができた。また、既習の割合の学習に帰着し、ウスターソースとケチャップの割合は40%と60%の割合だと導き出すことができた。しかし、ウスターソースとケチャップの割合は求められたものの、実際ソースを作る時にはこの割合の表し方では分量が分かりにくいなあという、子どもの困り感が出てきた。子どもの困り感から新しい割合の表し方への必要感が生み出されたことから、比で表す方法を知るとともに比で表す良さを実感する姿が見られた。

課題解決的学習では、既習の見方・考え方を働かせて解決を進めていく。その中で、既習の見方・考え方では解決できないという子どもの困り感や必要感が、『よさ』を実感させる授業につながると感じた実践であった。

3-3 中学校数学科部会の実践

第2学年「連立方程式」 『ズレから問いが生まれる授業展開』

「 $A=B=C$ の形をした方程式を、既習内容を利用して解く方法を考え、解くことができる」ことをねらいに授業を行った。本時までの学習で連立方程式の意味や解き方を学習しており、本時は $A=B=C$ の式から連立方程式に帰着して考え解決する学習である。導入段階で、 $6x+5y$ と $-3x+2y$ をカードで示し、「この2つの値は等しいです。式で表せる?」「この2つの式の値が9の時、どのような式で表せる?」と既習事項を確認しつつ、スモールステップで新しい問題との出会いの場へとつなげた。生徒は $6x+5y = -3x+2y=9$ という式を導き出したが、「こんな式どうやって解くのだろう?」と既習とのズレから問いが生まれ、本時のめあてを設定することができた。導入段階の問題提示の工夫や解決への見通しより、連立方程式で表すことができることに気づき、自力解決に取り組むことができた。全体交流では、複数の考え方が出てきたことで、自分の方法とのズレから式の意味を再考し、他の方法でもできそうだと考えを深めることができた。さらに、どの組み合わせの式で考えたら楽に計算ができるかと、考えを統合・発展して考えることにもつながった。

4. 今後に向けて

本研究では、授業実践の中で子ども自身が問いを見出し、解決をしていく主体的な学びの姿が見られた。学習指導要領の算数・数学科の目標で「数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して…」と示されているように、数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を工夫して授業を展開したことがこのような姿につながったと考える。市内の学校に数学的な見方・考え方を働かせる授業や数学的活動の工夫の具体的な手立て等を提示できたことは大きな成果である。今後も引き続き、子どもが主役になる授業改善を続けていきたい。

(大橋 宏星)

1 共同研究事業

9) 児童・生徒が主体となる「め・じ・と・ま・ふ」の授業展開の工夫（国語科） ～「学び方」を学び、学び続ける子どもの姿を目指して～

1. 事業名および担当者

本事業名は、「児童・生徒が主体となる『め・じ・と・ま・ふ』の授業展開の工夫～『学び方』を学び、学び続ける子どもの姿を目指して～」である。担当者は以下のとおりである。

東近江市教育研究所：宮居 伝(所長)，斎藤 陽(指導主事)，中村 和貴(研究員)

教職大学院：北村 拓也

2. 事業の目的

本事業の目的は、児童・生徒が「学び方」を身に付け、主体的に問題発見・問題解決に取り組む力を高めることである。このことに向け、国語科の授業における授業展開や掲示物、支援の工夫などの具体的な手立てを講じ、児童・生徒の「自ら学びに向かい続けられる力」を高め、「なぜだろう」、「わかった」、「またやりたい」という子どもの姿を実現できる授業を構想し、授業改善につなげることを目指す。

3. 事業の概要

東近江市では、目指す子どもたちの姿の実現と教員の教科指導力の向上に向け、令和4年度の研究主題を「児童・生徒が主体となる『め・じ・と・ま・ふ』の授業展開の工夫」に設定された。この主題に沿って、授業改善推進委員会(小学校国語科部会・算数科部会，中学校国語科部会・数学科部会)において指導案検討と授業研究会を行い、実証授業の成果や課題を分析し、本市で行われる教育研究所研究発表大会での報告，指導案の公開等を通して、市内への発信・普及を行っている。

本学教員は小学校及び中学校の国語科部会のアドバイザーとして、指導案検討や授業研究会での指導助言・講義を行った。事業の日程は以下のとおりである。

- 6月9日(木) 第1回中学校国語科部会(指導案検討1) 第2回小学校国語科部会(指導案検討1)
- 6月24日(金) 第3回小学校国語科部会(授業研究会1)
- 7月7日(木) 第2回中学校国語科部会(授業研究会1)
- 8月19日(金) 東近江市教育研究所研究発表大会・教育講演会 出席
- 10月6日(木) 第3回中学校国語科部会(指導案検討2)
- 11月10日(木) 第4回中学校国語科部会(授業研究会2)
- 11月14日(月) 第4回小学校国語科部会(指導案検討2)
- 1月17日(火) 第5回小学校国語科部会(指導案検討3)
- 2月3日(金) 第6回小学校国語科部会(授業研究会2)

(1) 小学校国語科部会の実践より

ア 単元名：「ふしぎ！気になる！調べたい！『野菜のふしぎレポート』で2年生につたえよう」

教材名：「調べて書こう，わたしのレポート」(東京書籍「新しい国語三上」)

第3学年を対象として、「書く内容の中心を明確にし，内容のまとまりで段落をつくったり，段落相互

の関係に注目したりして、文章の構成を考えること」ができるようになることを重点のねらいとした授業を実践された。公開授業では、レポートに書く内容を他教科との学習内容と関連付け、子どもたちが設定できるようにしたことで、すべての子どもが学びに向かうことができていた。また、授業者が育成する資質・能力の趣旨を踏まえ、学習課題のグッドモデルとバッドモデルを作成し、それを比較する学習活動を設定したことにより、学習のねらいを達成することができた授業であった。

イ 単元名：どうぶつはかせになろう！

教材名：「子どもをまもるどうぶつたち」(東京書籍「新しい国語一下」)

第1学年を対象として、「共通、相違など情報と情報の関係について理解すること」、「文章を読んで感じたことや分かったことを共有すること」ができるようになることを重点のねらいとした授業を実践された。子どもたち自身に学習課題を選べるようにしたことで、子どもが学びの主体となる授業にすることができていた。また、学んだことを想起し活用できる単元の展開にしたことも効果的であった。学習のゴールに向け、子どもたちの思考やつまづきを授業者が具体的に予想し、その手立てを講じていくことで、自ら学び続ける子どもの姿につながることを実感した実践であった。

(2) 中学校国語科部会の実践より

ア 単元名：短歌のよさを紹介しよう

教材名：「短歌の世界」「短歌十首」(三省堂「現代の国語2」)

第2学年を対象として、「文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること」ができるようになることを重点のねらいとした授業を実践された。公開授業では、最後まで粘り強く学習に取り組む子どもの姿が印象的であった。学習の手立てとして、子どもが単元や本時の学習の見通しをもつことができるようにしたことと、学習の進め方を子どもに委ねるようにしたことが、とても有効であったと考える。

イ 単元名：単語の分類について説明しよう

教材名：「単語の類別・品詞」(三省堂「現代の国語1」)

第1学年を対象として、「単語の類別・品詞の種類について理解を深めること」ができるようになることを重点のねらいとした授業を実践された。授業者から知識を得るのではなく、子どもが問題解決することを通して知識を獲得できる学習展開にしたことで、子どもが主体的に、そして協働的に学ぶことができ、深い学びにつなげることができていた。学習の振り返りを1人1台端末で行ったことも、学びの共有、蓄積という点において効果的であった。

4. 今後に向けて

「『学び方』を学び、学び続ける子どもの姿」の実現に向けて、「子ども一人ひとりが、学習の目的を理解すること」、「どのように問題を解決すればよいのかを考え、必要に応じて調整していくこと」が重要である。そのために、授業者は「学習の目的やゴールを明確にする」、「子どもたちが学習課題や方法を選択できるようにする」、「これまで学習したことを想起させ活用できるようにする」、「子どもの思考の過程を具体的にイメージする」、「子どものつまづきを予想し手立てを講じる」といったことを意識しながら授業づくりを行うことが求められる。これらのことを踏まえて、さらなる授業改善を進めていきたい。

(齋藤 陽, 北村 拓也)

1 共同研究事業

10) 思いをもって聴き、自分の思いや考えを発信できる伴谷っこをめざして ～子どもが主体的に話したり、聞いたりできる授業づくり～

1. 事業名および担当者

事業名は、「思いをもって聴き、自分の思いや考えを発信できる伴谷っこをめざして～子どもが主体的に話したり、聞いたりできる授業づくり～」であり、担当者は以下のとおりである。

甲賀市立伴谷小学校：中嶋 政二(校長)，摺本 志保(校内研究主任)

教職大学院：北村 拓也

2. 事業の目的

本研究の目的は、「話を主体的に聞くことができ、聞いた内容を生かして自分の思いを発信することができる子どもの育成」である。国語科の授業を窓口に、育成する資質・能力を明確にし、子どもたちの「聴きたい」、「話したい」という思いを引き出し、子どもの実態に合った学習活動を意識した授業づくりに取り組み、授業改善の視点を見いだす。

3. 事業の概要

伴谷小学校では、令和3年度より「話すこと・聞くこと」の資質・能力の向上を目指し、校内研究に取り組まれている。昨年度の研究を通して、「相手の話に関心をもって話を聞こうとする子どもの姿」、「相手を意識して話すことができる子どもの姿」、「最後まで話を聞くことができる子どもの姿」につなげることができた。一方、「自分の思いをもって話を聞いたり、比較して聞いたりすること」、「聞いた話から得た情報を自分の考えとつなげたり、それを生かしてまとめること、自分の言葉で発信すること」に課題が見られた。そこで、令和4年度は「思いをもって聴き、自分の思いや考えを発信できる子どもの育成」を研究主題とし、校内研究に取り組まれた。

本学教員は、5月18日、6月29日、10月19日の授業研究会において、授業を参観し、指導助言を行った。各授業研究会の概要は以下のとおりである。

(1) 第6学年の授業実践(単元名：「友だちの話を聞いて、自分の考えを深めよう」、教材名：「聞いて、考えを深めよう」(光村図書「国語6創造」))

「話すこと・聞くこと」の領域における指導事項「話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること」ができるようになることを重点のねらいとした単元であった。本時は「話し合いをして、意見を聞くときのポイントをまとめよう」を学習のめあてに設定されていた。単元のゴール、本時で目指す子どもの姿、めあての達成に向けて活用したい既習事項が明確に提示されており、子どもが見通しをもって学習に取り組むことができていた。また、4人グループでの実際の話合いを通して意見を聞くときのポイントをまとめるという学習活動を設定したため、子どもたちは実感をもって学ぶことができていた。さらなる授業改善に向け、次のことを助言した。



-
- ・目標とする資質・能力の育成に向け、「話し合いを通して自分の考えを深める」とはどういうことなのかを、子どもが具体的にイメージできるようにすることが重要である。
 - ・話し合いの前と後の自分の考えを比べ、「どのような変容があったのか」、「なぜ変容が生まれたのか」を自分で言語化することで、今後の話し合いに生かすことができる力となる。

(2) 第3学年の授業実践(単元名:「「まいごのかぎ」が現れた なぞにせまれ!」、教材名:「まいごのかぎ」(光村図書 「国語3上わかば」))

「読むこと」の領域における指導事項「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりや結び付けて具体的に想像すること」ができるようになることを重点のねらいとした単元であった。本時は、これまで物語を読む中で理解したことを生かし、登場人物の行った行動のなぞについて自分の解釈を交流することを、学習のねらいに設定されていた。事前に、交流の目的や交流する内容を具体的に示したことで、子どもたちは、交流を通して自分の考えを広げたり深めたりすることができていた。また、ホワイトボードやネームプレートを用いて、立場や考えを視覚化したことも有効な手立てであった。さらなる授業改善に向け、次のことを助言した。



- ・本単元の目標である資質・能力の育成に向けて、複数の場面の叙述を結び付けて解釈することで、具体的に想像することができたり、読みが広がったりすることを、子どもが体験的に学ぶことが求められる。そのために、叙述の結び付きを視覚的に捉えることができるようにする学習活動が必要となる。

(3) 第1学年の授業実践(単元名「1ねん2くみ「ともだちニュース」をつくろう!」、教材名「ともだちのこと、しらせよう」(光村図書 「国語1下ともだち」))

「話すこと・聞くこと」の領域における指導事項「話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもつこと」ができるようになることを重点のねらいとした単元であった。本時は、実際にペアでインタビューをすることを通して、学習のねらいに迫る時間であった。「ともだちニュースをつくる」という子どもにとって魅力的で実態に即した学習活動を設定したことで、主体的に学習に取り組む子どもの姿が見られた。また、授業者が実際のインタビューを実演して見せることで、子どもたちは目指すゴールの姿を理解することができており、有効な手立てであると感じた。さらなる授業改善に向け、次のことを助言した。



- ・インタビューを手段として、本単元でねらいとする資質・能力を育成することが重要である。話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように聞くために、どのようなことを意識しないといけないのかを子どもたちが事前に考え、それを実行し、どうであったのか振り返るといった学習展開が求められる。

4. 今後に向けて

「令和の日本型学校教育」では「協働的な学び」が求められている。学習の中で、子どもたちが、他者と話し合ったり交流したりすることを通して、自分の考えを広げたり深めたりすることは重要な学習活動であり、その実現に向けて国語科での資質・能力の育成は必要不可欠である。共に授業研究を進める中で、「協働的な学び」を実現する視点を見いだすことができた。この視点を今後の授業改善に生かすとともに、さらに発展させることができるように研究を進めていきたい。

(北村 拓也)

1 共同研究事業

11) 「読み解く力」の向上を目指して ～国語科における書く力を高める指導方法～

1. 事業名および担当者

事業名は、「読み解く力」の向上を目指して～国語科における書く力を高める指導方法～」であり、担当者は以下のとおりである。

守山市立物部小学校：水野 恵(校長)，岡田 伊津子(教頭)

教職大学院：北村 拓也

2. 事業の目的

本研究は、「自分の言葉で思いや考えを表現できる子どもの育成」を目的としている。校内研究において、滋賀県で取組を進めている「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりを目指し、国語科の授業を通して、「自分の意見を明確にもつための書く場の設定」，「自分の考えを書くことができるための指導方法や手立て」について研究を進め、授業改善の視点を見いだす。

3. 事業の概要

物部小学校では、令和3年度より「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりの研究に取り組まれている。本年度は、国語科において「書く活動」を効果的に取り入れることを共通の実践に設定された。書くことによって自分の考えを明確にし、その後の交流活動を活性化させ、再構築につなげることがねらいである。本学教員は、継続的に校内研究に関わり、校内研修会での講義や指導案検討、公開授業に対する指導助言を行った。日程や内容の概要は以下のとおりである。

(1) 事業の日程

- ・ 7月26日(火) 校内夏季研修会にて講義
- ・ 9月7日(水) 指導案検討会にて助言
- ・ 9月28日(水) 校内授業研究会にて授業参観，指導助言
- ・ 10月21日(金) 第2学年の授業を参観，指導助言
- ・ 1月23日(月) 第1学年の授業を参観，指導助言

(2) 校内夏季研修会の内容

研修会では、「読み解く力」の向上を目指して～国語科における書く力を高める指導方法～」と題して講義を行った。以下、講義の主な内容を挙げる。

- ・ 国語科の授業づくりでは、年間指導計画や子どもの実態に合わせ、単元で育成を目指す資質・能力を明確にし、単元を通して取り組む言語活動と関連付け、学びを達成した子どもの姿を具体的にすることが重要である。
 - ・ 言語活動を設定する場合は、子どもにとっての学習のゴールとなるように、伝える相手や内容、手段などを明確にすることが求められる。
-

- ・「読み解く力」の視点を踏まえて授業づくりを行う際には、子どもが「どのような再構築ができるか」と「よいのか」を具体的に描き、それに向かって「何から、何を、どのように発見・蓄積できたらよいのか」、「何を、どのように分析・整理できたらよいのか」を想定するとよい。
- ・最初の自分の考えと最後の自分の考えを比較することを通して、何が再構築できたのかを、子どもが自覚できる学習展開にする。
- ・子どもたちが他者とのやりとりを行うときには、「何のために」、「何について」、「どのように」を明確にすることで、考えを広げたり深めたりすることができる交流となる。

(3) 校内授業研究会の内容

公開授業は、第3学年にて、「ちいちゃんのかげおくり」を教材に、「読むこと」の指導事項「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること」、「文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと」ができるようになることを重点のねらいとした単元であった。本時は「最後の場面で、ちいちゃんが家族に会えたことは幸せなのだろうか」を学習課題に、「友だちの意見を聞いて、自分の考えを深めよう」を学習のめあてに行われた。



「書く活動」を効果的に取り入れる授業づくりに向け、ワークシートに「自分の考え」、「注目した叙述」、「考えたわけ」を記述できるように工夫されており、子どもたちは自分の考えを明確にもつことができていた。また、他者と交流する学習活動において、同じ考えの友達と交流できるようにしたことで、共通点から自分の考えを深めることができている子どもの姿、注目した叙述や想像した内容の違いから考えをさらに広げることができている子どもの姿が見られ、効果的な手立てであると感じた。さらなる授業改善に向け、次のことを助言した。



- ・複数の場面の叙述を結び付けて解釈することで具体的に想像することができることを、子どもたちが強く実感できるように、注目した叙述を複数記入し、自分の考えをまとめることができるワークシートにするとよい。
- ・自分の言葉で思いや考えを表現できるように、表現するための材料(情報)をたくさん集め、子どもが選べるようにすることが重要となる。そのために「内容と構造の把握」の指導事項の育成を図り、発見・蓄積の力を伸ばしていくことが必要である。
- ・再構築につながる他者とのやりとりに向けて、他者から得た情報を整理する多様な方法を子どもが学び、それを選択しながら活用できるようにすることが求められる。



4. 今後に向けて

滋賀県では、本県の子どもたちにみられる課題の改善に向け、「読み解く力」の育成に取り組み始めて4年である。本研究に関わらせていただく中で、「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりを、校内研究と関連付けて継続的に進めることで、授業改善が進んでいくことを実感することができた。また、授業づくりにおいて先生方が困っておられること、授業構想での今後の課題を見いだすことができた。それを改善できるように、引き続き研究に取り組んでいきたい。

(北村 拓也)

1 共同研究事業

12) 幼稚園における事例検討を取り入れた発達障害児への指導力向上研修の実施

1. 事業名および担当者

事業名は「幼稚園における事例検討を取り入れた発達障害児への指導力向上研修の実施」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：山川直孝

守山市立物部幼稚園：新庄真依子

2. 事業の目的

発達障害のある幼児に対して、一人ひとりの教育的ニーズにあわせた支援の充実が課題となっている。そこで幼稚園教員を対象に、特別支援教育についての理解を深め、指導力の向上を目的とした研修会を実施した。研修の内容は、教員からの事前の聞き取りを参考に、幼稚園での困り感の強い事例をテーマに挙げ、心理検査結果の解釈や観察で明らかとなった行動の分析、集団の中での適切な支援方法等について、グループで検討する。実践的な研修となるように事例を取り上げたり、グループ協議を取り入れたりと工夫することで、教員同士の連携のもと、個に応じた支援が円滑かつ適切に、充実したものとなるように目指す。

3. 事業の概要

(1) 研究実践校の概要

研究実践校である守山市立物部幼稚園は、1990年4月に開園し、「心豊かでたくましい子～自分が好き、友達が好き、地域が好き～」という教育目標のもと3歳児、4歳児、5歳児の受け入れを行っている。今年度（令和4年5月1日現在）の幼児数は102名（3歳児36名、4歳児30名、5歳児36名）となっている。

(2) 実施内容

事前打ち合わせとして7月1日に教職大学院担当者が園に訪問し、幼児の観察や園の課題等の聞き取りを行った。さらに、予備調査として全教員を対象に「特別な教育的支援を必要とする幼児の課題」や「支援の状況」についてGoogleフォームによるアンケートを実施した。その結果、特別な教育的支援を必要とする幼児の課題として、「刺激が入りやすく、視界に入ることに反応し続けて、行動調整ができない」「気持ちが落ち着かないと大きな声をあげる」「集中の持続が困難で衝動的に動く」「一斉指示を聞いたり、同じペースで活動することが難しい」「わからなかったり、困ったりすると泣いて表出」といった回答が寄せられた。園で行っている支援としては「気が逸れた時は状況を見つつ、すべきことを思い出させる声かけをする」「できるだけ刺激が入らない環境にする」「奇声を発したくなる気持ちにまず寄り添い、できるだけ原因を排除する」「指示や説明は端的にする」「見てわかる環境づくりの工夫、安心できる場所や空間の確保など、個々の実態に合わせた段階的なステップアップをめざした支援に心がける」などの回答が寄せられた。

これらのことから、研究実践校における特別な教育的支援を必要とする幼児の課題として、行動面やコミュニケーションに関する課題が多く寄せられていることが明らかとなった。個々の課題や具体的な状況に応じた支援に取り組まれているが、特に集団生活の中での効果的な支援について模索している様子がうかがえた。

これらの課題の解決をめざした研修プログラムを開発し、8月1日に研修会（2時間）をオンライン（Zoom）により実施した。研修終了後、参加者にGoogleフォームによる事後アンケートを行い、評価分析を行うこととした。

(3) 研修プログラムの概要

8月1日に実施した研修プログラムを表に示した。研修会は全教員を対象とし、11名の参加があった。当日は、発達検査の概要を説明し、チェックリスト方式で個々の幼児の発達状況がわかる検査（KIDS 乳幼児発達スケール）の実施について体験してもらった。幼児の実態について、多角的多面的にできるだけ客観的に把握することの必要性を伝えた。具体的な支援として、先行研究で発達障害児者の支援に有用性が示めされているポジティブ行動支援（PBS：Positive Behavior Support）の説明を行った。ポジティブ行動支援とは、望ましい行動を子どもに効果的に教え、その行動ができた場合にほめたり、認めたりすることで、子どもが主体的に適切な行動を学ぶ教育方法である。この理論をもとに、グループごとに事例検討を通じて効果的な支援について協議する時間を設定した。



表 研修プログラム

時間・研修項目	内容
導入 10分：自己紹介，事前アンケートの結果報告	・事前アンケートで明らかとなった幼児の姿や教員が取り組んでいる支援について紹介するとともに，園の課題について明らかとした。
講義 20分：集団における個に応じた支援	・「すべての幼児の教育を充実させていくことがユニバーサルな支援につながる」「できないことの改善よりも，手持ちの力でいまできることを認める」など，集団における特別支援教育の考え方について説明する。
講義・演習 30分：発達検査を活用した実態把握	・実態把握で活用できる発達検査の紹介 ・発達検査（KIDS 乳幼児発達スケール）の模擬実施
講義・演習 25分：ポジティブ行動支援	・気になる行動が起きる背景を知り，望ましい行動への変容をめざす支援方法を学ぶ。
演習 30分：事例検討	・2つのグループになり，2名の幼児について行動観察や発達検査の結果などから，支援目標，支援方法について協議をし，支援計画を立案する。
まとめ 5分：ふりかえり，質疑応答	・研修のふりかえり

参加者への事後アンケートからは、研修の内容、主体的に参加できたかに関して、いずれも参加者全員が肯定的に評価した。事後アンケートの自由記述からは「全体の支援が個の支援につながるということを念頭におきながら、良いところを伸ばす支援をしていきたい」「小学校を目前にしていろいろなことができるようになってほしいと、一度に多くのことを求めすぎていたと反省した」「園の職員みんなで支援計画を都度見直ししながら、目標を明確にして保育に臨みたい」「子どもの目指したい具体的な行動や姿を書き出し、そこから工夫することを考えたことで、普段もこのようにして適切な行動を支援することが大切だとわかった」など、研修への肯定的なコメントが寄せられた。

4. 今後に向けて

事後アンケートで「特別支援に関する研修を園内の職員で受けられたことがとてもよかった」「研修で教えていただいた子どもの見取り方や支援方法の考え方を今後の保育で活かしていきたい」とのコメントが寄せられた。このように職員のニーズに即した研修ができたのは、発達検査や支援方法といった理論的な講義だけでなく、事例検討を取り入れて職員同士で課題解決のために話し合うなど演習に研修時間の約半分を充てたことで研修の満足度の高さから実践につながる研修になったと考える。今後の課題として、本研修プログラムを発展させ、各園で教員が主体的かつ自律的に運営できる研修プログラムの開発を検討していきたい。

(山川直孝)

1 共同研究事業

13) 特別支援学級におけるポジティブ行動支援を活用した個別の指導計画作成研修の実施

1. 事業名および担当者

事業名は「特別支援学級におけるポジティブ行動支援を活用した個別の指導計画作成研修の実施」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：山川直孝

滋賀県内公立中学校：X 教諭（本報告では連携先学校名、担当者名の公表を控える）

2. 事業の目的

特別支援学級の児童生徒の増加が課題となっており、特別支援学級担任には多様な教育的ニーズを必要とする児童生徒への支援の充実が求められている。児童生徒に効果的な支援を行うためには、個別の指導計画の妥当性等が影響すると考える。そこで、児童生徒への支援の充実を目的に、個々の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための指導領域である自立活動の充実に着目し、個別の指導計画の作成に関する研修を行う。研修では、担任している生徒1名をケースに取り上げ、関係情報（心理検査結果、行動観察等）を整理して実態把握を行い、具体の目標設定や支援方法を検討し、個別の指導計画を作成する。生徒の困難なことだけではなく、長所や得意なことも作成の際には重視する。この考えはポジティブ行動支援となじみやすい。ポジティブ行動支援とは、当事者のポジティブな行動（本人のQOL向上や本人が価値のあると考える成果に直結する行動）をポジティブに（罰的ではない肯定的、教育的、予防的な方法で）支援するための枠組みのことで、先行研究では知的障害や発達障害児の有用性について報告されている。この研修では、ポジティブ行動支援の知見を活用したい。

3. 事業の概要

（1）研究実践校の概要

本研究では研究実践校として県内の公立中学校1校を指定した。研究実践校には今年度約400名の生徒が学んでいる。特別支援学級は複数の障害種別の学級が設置されている。

（2）実施内容

8月に担当者間での打合せを行った。研究実践校の課題として、特別支援学級には多様な特別の教育的ニーズを有する生徒が在籍していることや、支援を必要とする生徒への具体的な手立てについて特別支援学級の担任が悩んでいることなどを中学校担当者より聞き取った。このことから、特別支援学級の担任が、生徒のよさを生かす支援方法について学ぶとともに、それらをふまえた具体的な個別の指導計画を立案し、今後の支援に生かしていくための研修を行うこととした。特別支援学級の担任は、担任している生徒の個別の指導計画を作成している。本研修でめざすのは、これまで作成してきた個別の指導計画の内容よりもさらに踏み込んだもので、特に課題となっている事柄を抽出し、自立活動の区分項目と照らし合わせて支援を検討し、より具体的な個別の指導計画を作成することをめざすものである。このことで個に応じた指導の充実につながるのではないだろうか。日々の実践に生かす、より具体的な個別の指導計画の作成に関わる研修プログラムを筆者が立案し、その内容について9月に担当者間での検討会を行い、11月に研修を実施した。

（3）研修プログラムの概要

研修プログラムを表に示した。プログラムの内容は、ポジティブ行動支援に関する講義と、個別の指導計画の作成の2つを柱とした。研修は90分でそのうち約50分を、個別の指導計画を作成する演習として設定した。研修で学んだことが生徒の支援に生かせるように工夫した。研修当日、対象者（特別支援学級の担任）は3名の出席であった。

表 研修プログラム

時間・研修項目	内容
導入 10分：自己紹介，研修の目的	・この研修では，生徒のよさを生かす支援方法について学ぶとともに，それをふまえた個別の指導計画を立案し，今後の支援に生かすことを確認する。
講義 20分：ポジティブ行動支援	・ポジティブ行動支援の内容や機能的アセスメント(ABC分析:行動の前後に着目し，行動の機能について分析すること。先行条件，行動，結果の3つに分けて行動を分析する。)について説明を行う。 ・望ましい行動を増やしていくために，機能的アセスメントを個別の指導計画に活用し，わかりやすい場面や環境の工夫，結果が見えるような工夫などについて説明する。
演習 30分：個別の指導計画の立案	・実態把握で活用できる心理検査の紹介 ・生徒の課題を一つ取り上げる。その課題に対する支援について自立活動の6区分27項目のどれに該当するか考え，個別の指導計画に記入する。ポジティブ行動支援を参考に，生徒の望ましい具体的な行動を一つ目標に設定する。目標が達成しやすくなるように具体的な支援や，結果が生徒自身わかるような工夫を考え，個別の指導計画に記入する。
演習 20分：グループワーク	・各教員が作成した個別の指導計画を発表し合う。その内容について，よい点や改善点，今後支援を進める際に教員間で留意すべき点などを話し合う。
まとめ 10分：ふりかえり	・研修のふりかえりと事後アンケートの記入

研修で対象者が作成した個別の指導計画を図に示した。「1 実態把握」の「課題」では日々生徒と関わる中で担任が特に重視する課題を一つ抽出した。「状況」では，その課題が起きる時間や場面等を明記することとした。「2 自立活動の内容」は特別支援学校学習指導要領解説自立活動編を参考に，自立活動の内容（6区分27項目）のうち該当する「区分」「項目」を記入することとした。「3 指導計画」では，課題と関わっての「指導場面」や，「行動」の欄には生徒の具体的な目標を記入することとした。目標設定にあたっては，達成可能な目標（ハードルを上げすぎない）であることや長所や得意なことを生かすこととした。「先行条件」として，その目標を達成しやすくするための「教員の支援」を設定することとした。あわせて，「結果」には「目標達成後の生徒の姿」と，目標となる姿を強化し，望ましい姿が定着するように，目標達成後の「教員の支援」について記入することとした。個別の指導計画作成後，対象者同士で意見交換等を行った。

4. 今後に向けて

事後アンケートで「研修の満足度」「主体的な参加」「支援をどう改善すればよいかわかったか」「今後の役に立ちそうか」について4件法で実施したところ対象者はいずれも肯定的に評価した。自由記述では「研修を続けて成果が現れるかどうかやってみよう」「定期的な確認の場があると続けやすい」「通常の学級の担任が立てている（通常の学級の生徒の）個別の指導計画にも役に立つと思う」といったコメントが寄せられた。今後は，研修の手法をマニュアル化し，特別支援学級の担任による主体的かつ自律的に研修が運営できるようにめざしたり，通常の学級の教員を対象に本研究の知見を生かした研修を実施したりすることを検討していきたい。

(山川 直孝)

個別の指導計画		
生徒名(アルファベット等可)	生徒名	教員名 教員名
1 実態把握 課題(気になる姿) 生徒の課題を一つ抽出し取り上げる		
状況(気になる姿が見られる時間、回数、場面) 課題が起きる時間や場面		
その他の情報 課題と関わって参考となる情報があれば記入		
2 自立活動の内容 区分 項目 自立活動の区分と項目		
3 指導計画 指導場面 指導をする時間や場面		
A 先行条件 (1)場面-いつどこで 場面・時間 など	B 行動 生徒の具体的な目標 生徒の具体的な目標を 記載 (望ましい姿)	C 結果 (1)目標達成後の生徒の姿 目標達成後の生徒の姿 (2)教員の支援 目標を達成後の 教員の支援

図 個別の指導計画

1 共同研究事業

14) アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成～中規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成～中規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木善治

彦根市立平田小学校：宮崎良雄（校長），教職員・学級担任等

2. 事業の目的

朝学習時における朝鑑賞（対話型朝鑑賞）の2年目の効果を検証する。小学校には「朝読書」「朝学習」など、朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、学級担任が美術作品を使用し、「対話型鑑賞」を昨年度2学期より実施している。2年目の効果を明らかにする。

3. 事業の概要

（1）研究の目的

小学校には「朝読書」「朝学習」など、朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、月1～2回程度、学級担任が美術作品を使用し、朝鑑賞「対話型鑑賞」を実施する。特定の美術についての知識を介さずに作品を楽しむ体験を他者と共有することを通して、アート思考や、想像力や自分で考える力を育てること、自分の考えを話す力や他者の話を聴く力といったコミュニケーションの能力や新しい意味や見方や感じ方並びに自己肯定感を育むことが可能となる。筆者の前任校および、埼玉県所沢市立三ヶ島中学校において効果のあった朝鑑賞を共同研究依頼のあった彦根市立平田小学校において昨年度9月より実施し優れた効果が表れている。今年度はアート思考や教師の変容にも着目しながら、その効果や課題を更に明らかにしていく。

（2）成果と課題

朝鑑賞を実施された担任の先生方が記した任意のアンケートにその成果が端的に記されているので、その一部を紹介する。（・は7月、○は11月に記載された）

朝鑑賞を行ってみて、子どもたちの様子や自分自身のことなどで、何かプラスに感じられることがございましたらご記入ください。

・普段の授業で挙手しない子がしているので驚いています。

○1年生も、だいぶ朝鑑賞に慣れてきました。この時間は、ほとんどの意見をクラスの友だちが受け入れてくれるので、授業中にあまり発言しない子が発表することがあり、意外な面を発見することができました。

（1年a先生）

・絵をじっくりみることを通して、気付いたことを友達に話すことにどんどん慣れることができてきた。子どもたちは月1回の朝鑑賞を楽しみにしています。

○学習がしんどい子も取り組みやすい。（国・算などの授業とは違う子が活躍できている）（2年b先生）

・ふだんの授業であまり発言しない子も、自分の考えを発表することができた。子どもたちは明るい表情で、朝鑑賞を楽しみにしています。

○今日朝鑑賞だよと言うと、子どもたちは喜んでいます。（3年c先生）

・子どもたちがいろいろな発想をするので面白い。それを聞いてうなづく子やあいずちを打つ子もいて、温かい

気持ちになった。発表をしない子もいるが、発表する子の意見を聞いているので、それはそれでよいかなと思う。

○答えはないことで自由に発言できる練習ができた。（4年 d 先生）

・発言を否定されることがないので、教科の授業ではあまり発言しない子でもこの活動では少し積極的になれている。

○子どもの発言を常に意識するように心がけている。（6年 g 先生）

・感じたことを自由に表現することができるようになってきたと思います。

○子どもたちは頭に浮かんだイメージを伝えることが上手になってきたように感じる。教師側はどのような発問で、子どもにイメージを持たせるのか、考える訓練になる。（わかくさ h 先生）

・いろいろな気持ち、考え方に共感できる力、あまり触れてこなかった絵の鑑賞、絵の知識が得られた。（わかくさ i 先生）

・多様な考え、思いを引き出す場として素晴らしい時間だと思いました。発表後に「あーなるほど」「確かに～」という言葉は、安心できる学級風土の醸成につながるなど考えました。

○幅広いものの見方ができるようになること、そのことを安心して言うことができる雰囲気づくり、受け入れてもらえたという安心感、学級の素地づくりに大変プラスになるなど感じています。（j 先生）

また、平田小学校の先生方から随時次のような質問や悩みをいただいている。「発問のレパトリーがいつも同じになってしまいます。」「もっと作品例がほしいです。」「提示する作品について『去年これ見た』というものが多くなってきた。作品を選ぶ際にみていないものの中から選ぶのが難しい。」「これでいいのかなと不安に思う日々です。」

これらの貴重な質問や悩みに対して、筆者は「平田小学校朝鑑賞参観レポート」を随時発行させていただき、その中で Q&A として先生方お一人一人のご質問や悩み事に対して少しでも一助になればと思います、以下のような内容のものを発行させていただいてきた。

Q3：イメージが膨らみすぎて、絵とは話がずれていってしまうことがある。それでも話が活性化しているから良いのか。・どのようにすると思考、雰囲気、絵のとらえが広がっていくのかなと難しさを感じました。答えがあり、それを最後に伝えるというのではないですね。

A3：シンプルに朝鑑賞ではファシリテーターに徹してみてもいいでしょうか。「何が見えますか？」の投げかけに対して、子どもから意見が出た際に、先生がすぐに解釈してまとめたりしないで「どこからそう思ったの？」と返し、その根拠をとことん、追究していきます。要するに、少し物わがりの悪い人を演じます。すると、その子がそのように考えた根拠を言語化し、それを聞いた子どもたちは、学級全体で共有することにつながります。些細な違いに気付くきっかけをつくっていきます。ですから、意見を出させるというよりも、その根拠を豊かに表現させるために先生ではなくファシリテーターに徹します。すなわち、教えない人に徹します。

対話型鑑賞には、正解も不正解もありませんので、終末に他教科のようにまとめる必要はありません。様々な言葉で終わられていいと思われませんが、私が実践していた際には次のような感じてお開きにしていました。「皆さんと一緒に作品をみると、私が考えもつかないような、いろいろな見方や感じ方や考え方を知ることができてとても楽しかったです。本当に皆さんはすごいですね。また次回も楽しみにしています。」

4 今後に向けて

子どもたち一人ひとりが皆違っているように、先生方もそれぞれ違っているのは当然のことである。したがって、その場で直接ご質問や悩みなどに答える方法もあるが、筆者が参観レポートに表せば、先生方のご質問や悩みに対する私なりの解決策を共有させていただくことができるので、非常に効果的だと感じている。今後も、先生方お一人お一人にも寄り添いながら、共同研究を継続していきたい。平田小学校は昨年度以上に、どの学級も朝から明瞭でありながら、子どもたち一人一人がつながっていて、とてもしつとりとした雰囲気がある。朝鑑賞の効果や課題を引き続き追究していきたい。（青木 善治）

1 共同研究事業

15) アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成～大規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して 1～

1. 事業名および担当者

事業名は、「アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成～大規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木善治

米原市立米原小学校：有川博延（校長），教職員・学級担任等

2. 事業の目的

小学校には「朝読書」「朝学習」など、朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、学級担任が美術作品を使用し、「対話型鑑賞」を実施する。すなわち「朝鑑賞」を月1回程度実施し、米原市内の大規模校におけるその成果や可能性を明らかにする。

3. 事業の概要

(1) 研究の目的

「朝鑑賞」とは、朝学活の前に朝読書や朝学習に充てた10分～15分間を使い、担当の教師が絵画等の作品を各教室に持参し、全校で対話型芸術朝鑑賞を行うという取組である。昨年度の彦根市立平田小学校の朝鑑賞の取り組みを新聞記事(2021年11月20日しが彦根新聞)等より知ることとなった校長先生より、昨年度末に朝鑑賞に関する共同研究の依頼を受けていた。そこで、5月に朝鑑賞に関する職員研修会を実施させていただき、6月より月に1回というペースで全校による朝鑑賞が実施された。

米原小学校は学年3学級以上の大規模校である。滋賀県内には大規模校も多くあるため、大規模校における朝鑑賞の成果や課題等を明らかにしていく。

(2) 成果と課題

朝鑑賞を実施された学級担任の先生方が記した11月のアンケートにその成果が端的に記されているので、その一部を紹介させていただく。

朝鑑賞を行ってみて、子どもたちの様子や自分自身のことなどで、何かプラスに感じられることがございましたらご記入ください。

- ・「今日はどんな絵かな？」と、楽しみにしている様子が見られています。自由に想像して話すのが楽しく、にぎやかな雰囲気を取り組んでいます。（1年a先生）
- ・自由に感じたことを話せる時間なので、どの子も想像したことを伸び伸びと伝え合う姿が見られました。友だちの気付きを聞くことで自分とは違う友だちの感性に触れられ、毎回楽しそうに過ごしていました。（1年b先生）
- ・子どもたちは何を話してもいいという気持ちをもっているので自分から手をあげる子が増えました。（1年c先生）
- ・子どもたちなり、絵を見ながら豊かに発想できているように思えます。（2年d先生）
- ・朝鑑賞の時間に発表できる子が増えてきました。どういうことを言えばいいのかわかってきたんだと思います。（2年e先生）
- ・まだそこまで感じませんが、普段なかなか発表できてない子が手を挙げてくれます。（3年f先生）
- ・子どもたちは朝鑑賞を楽しみにしている子が多く、次はいつするのか聞いてくる子もいました。朝のつかれた様子を活動を通して活気がでることがありました。見て感じたことや気付いたことに対して、まわりの子が「たしかに!」「ほんまや!」と自然と出る声クラスをよい雰囲気にさせてくれました。（3年g先生）

- ・「次も早くしたい」「もうちょっとしたい」と声が上がリ、毎回楽しみにしています。発表できる人も増えてきました。（4年h先生）
- ・子どもたちは楽しみにしている。しかし、自尊感情を高めることにつながっているかどうかということは判断しがたい。月に一回である為。（4年i先生）
- ・最初はどうつなげたらよいかはわからなかったが、やっているうちに少しわかってきた。題名を子どもたちに決めてもらおうと、想像のつかない題名がたくさんでくるのでおもしろい。（5年j先生）
- ・絵を鑑賞して分かることや思ったこと、想像したことを自由に、積極的に発表し合えるようになってきました。（5年k先生）
- ・子どもたちのものの見方・感じ方・考え方から自分も学ぶことができた。（6年l先生）
- ・子ども達は非常に楽しんでやっている。「次はこの絵にしたい！」など意欲的な声もあがっている。（なかよし4組m先生）

米原小学校の先生方から次のような質問や悩みをいただき、筆者は「米原小学校朝鑑賞レポート」を発行させていただき、その中でQ&Aとして先生方の悩み事に対して少しでも一助になればと思い、以下のような内容のものを発行してきている。「発言をしている子が限られていて、発言していない子まで、豊かな発想をできているかわかりません。」「意図的に指名をするべきでしょうか。」「この絵を見てどう思いますか。どこからそう思いますか。以外に話題を広げるのが難しいです。」「作品の題名を聞かれることがあるのですが、教えた方がいいのでしょうか。」これらの貴重な全ての質問や悩みに対して、筆者は「米原小学校朝鑑賞参観レポート」を随時発行させていただき、その中でQ&Aとして表し、少しでも一助になればと思い、発行させていただいてきた。その内容の一例を示す。

Q3：子どものどういう姿を引き出すのが正解？なのかわからない。これでいいのか、、、？という思いです。また、ねらいが難しいです。

A3：率直にお書きいただきまして、誠にありがとうございました。私たちは、日ごろ教師をしていますので、無理もないと思います。どうしても、私たちは教える人になってしまうのです。ご質問の子どもたちのどういう姿を引き出すのが正解」なのかについて、それは、朝鑑賞中でも授業中でも、ズバリ「思考し続ける子どもの姿」だと考えています。実は、授業中教師が熱心に教えれば教えるほど、「お客さん」が大勢生み出されていきます。自ら思考しなくても、先生の説明を聞いて板書を書き写していけば、学んでいると勘違いしてしまいます。そして、「主体的・対話的で深い学び」ではなく、受動的な学びになります。これは、学校内の名称をまずは改めるべきだとも思っています。例えば、「学校」の中に「教室」があります。そして、「教師」がいます。大学でいえば、「講義室」です。私はこの名称は次のように改めるべきだと考えています。「学校」の中に「教室」ではなく「学室（アクティブ・ラーニングルーム）」。そして、「教師」ではなく「学師」「コーディネーター」「ファシリテーター」もしくは、子どもたちと知識や学び、子どもと子ども、子どもと地域などをつなぐボンドのようなひと、ボンダーです。このような存在になることがとても重要と考えています。

4 今後に向けて

子どもたちは朝鑑賞中、「みる→考える→話す→聴く」を繰り返していく。そこには正解もなければ不正解もない。この様な活動を繰り返す中で、同じ作品を見ていても、多様な見方や感じ方があり、互いのよさや個性を発揮しやすく、同時に認めやすい環境もつくられ、アート思考も高めていくことが米原小学校においても確認することができた。作品を見て、考えて、確かにそうだと肯定する、受け入れるといった活動を繰り返していく中で、子どもたちは、自他の多様な見方や感じ方、考え方を朝鑑賞を通して培っていきやすいという有効性が大規模校においても明らかになった。引き続き、アート思考を高め、子どもたちが互いのよさや個性を認め尊重し合うことのできる環境や朝鑑賞をはじめとした教育実践を連携しながら今後も追究していきたい。

(青木 善治)

1 共同研究事業

16) アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成～小規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成～小規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木善治

彦根市立亀山小学校：勝間 治（校長），教職員・学級担任等

2. 事業の目的

小学校には「朝読書」「朝学習」など、朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、学級担任が美術作品を使用し、「対話型鑑賞」を実施する。すなわち「朝鑑賞」を月1回程度実施し、小規模校におけるその効果や課題を明らかにする。

3. 事業の概要

（1）研究の目的

筆者は6月1日に彦根市教育委員会において毎月開催されている定例校長会において、1時間、アート思考や自己肯定感を高めることのできる朝鑑賞に関する研修会講師をさせていただいた。その内容を受けて、翌週に彦根市亀山小学校より朝鑑賞の共同研究に関する依頼を受け、職員研修会を7月に実施予定となっていたが、急遽コロナ禍の影響により、9月下旬に延期となった。学級で実施されたのは10月以降となった。

彦根市亀山小学校は学年1学級の小規模校である。滋賀県内には大・中・小規模校がある。したがって、朝鑑賞を滋賀県内に普及していくうえでも、小規模校における朝鑑賞の効果や課題、適切な題材等を明らかにしていくことは重要と考えている。学校規模や学級の人数に応じた、適切な題材等を明らかにしていきたい。

（2）対話型鑑賞研修会の特徴・留意点について

対話型鑑賞（朝鑑賞）中、子どもたちは「みる→考える→話す→聴く」を繰り返していく。そこには正解もなければ不正解もない。実は、学校教育の中で、教師がファシリテーターになり、正解や同質性を求めない学習活動は筆者の考える限り、殆どないように思われる。正解、不正解がないので、間違いを気にする必要もないのである。そして、是非、ファシリテーター役は子どもたちに任せずに、すべて先生がすることが重要である。ファシリテーターを教師自らが行うことによって、実は、他の授業にも生かされ、教師力をより一層高めることにもつながる。なぜなら、子どもたちからの多くの意見や考えを適切に整理しながらつなげていくことは、考えている以上に難しいことなのである。

しかし、回を重ねていく中で、そのコツを体感することができ、他教科の授業においてもその力が生かされるようになる。そして、子どもたちは受動的ではなく、より一層、能動的な学習者へと変容していく。このような活動を繰り返す中で、同じ作品を見ている、多様な見方や感じ方があり、互いのよさや個性を発揮しやすく、同時に認めやすい環境もつくられていく。意欲的に発言する子どもが増えると同時に、お互いの話をしっかりと聞く姿勢も培われていく。作品を見て、考えて、確かにそうだ肯定する、受け入れるといった活動を繰り返していく中で、子どもたちは、自己肯定感と共

に、自他の多様な見方や感じ方、考え方を朝鑑賞を通して培っていきやすい特徴がある。自分のよさや可能性を認められ、尊重された子どもは、多様な価値を認める柔軟な発想をもち、他者と協働していくことができるようになりやすいと考えている。

(3) 成果と課題

亀山小学校はコロナ禍の影響もあり、学級において実施されたのは10月以降となる。朝鑑賞を実施された学級担任の先生方が記した11月のアンケートにその成果が端的に記されているのでそのまま紹介させていただく。

朝鑑賞を行ってみて、子どもたちの様子や自分自身のことなどで、何かプラスに感じられることがございましたらご記入ください。

- ・ 普段挙手しづらい児童も発言できていた。相手の想いを聞いて、「ああ〜。」「ほんまや。」と素直なうなづきが多く見られた。朝？昼？夜？ときいて、どれかを選ぶ子が多かったが、全部(朝、昼、夜)と一枚の絵に一日の流れを感じる子がいて、いろんな見方ができるし、感じているんだと私が学びました。(1年a先生)
- ・ 自分が感じたこと、見えたことやものを話す時間となり、答えがないことに安心しているように思う。友達が話したことに「なるほど」とうなずいたり、自分が言ったことに「なるほど」と言ってもらったりして、楽しんでいる。子どもがどのようにイメージしているのか、その子の感性にもふれることができ、子どもを理解する一助となっている。(2年b先生)
- ・ 話題となることが話しやすいので、授業であまり発言しない子も手を挙げて発言する姿が見られた。学級で話し合う雰囲気ができればいいと思っている。(3年c先生)
- ・ いろんな視点で絵をみることで、見方が広がると思う。普段活躍することが少ない子も発言したり、みんなに「確かに！」と反応してもらったりできる。(4年d先生)
- ・ 絵を見て、気付いたことを自由に話していいということで、いろんな意見や人によって見方がこんなに違うのだということ子どもたちは、実感できたと思います。どんな意見も受け入れられる安心できる学級になるのではないかと思います。(5年f先生)
- ・ 6年生の子どもたちは「間違っはいけない」やイメージや思いなど答えがないものに対して発言しない傾向にある。そのため、1回目はあまり手が挙がらず意見を言わなかった。続けて行くことで、効果をみていきたい。(6年g先生)

また、亀山小学校の先生方から次のような質問や悩みをいただいていた。「どの絵画を選ぶとよいのか迷う」「終わり方がよくわからない」「手が挙がらず、意見が出ないときに、切り返しの質問を考えておくこと、どのようなきり返しがよいのか。それとも、意見が出るまで待っている方がよいのか」「意見をださせる質問が難しい」等、これらの貴重な質問や悩みに対して、亀山小学校朝鑑賞参観レポートを発行させていただき、全ての学級において大きな成果を得ることができた。

4. 今後に向けて

コロナ禍の影響があり、朝鑑賞の実施回数は他校に比べ少ないが、同じ作品を見ている、多様な見方や感じ方があり、互いのよさや個性を發揮しやすく、同時に認めやすい環境もつくられていることが小規模校の亀山小学校においても確認することができた。

より一層、子どもたちが互いのよさや個性を認め尊重し合うことのできる環境や朝鑑賞をはじめとした教育実践を連携推進を図りながら更に追究していきたい。

(青木 善治)

1 共同研究事業

17) アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成～大規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して 2 ～

1. 事業名および担当者

事業名は、「アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成～大規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木善治

彦根市立高宮小学校：久保田篤（校長），教職員・学級担任等

2. 事業の目的

小学校には「朝読書」「朝学習」など、朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、学級担任が美術作品を使用し、「対話型鑑賞」を実施する。すなわち「朝鑑賞」を月1回程度実施し、彦根市内の大規模校における朝鑑賞（対話型朝鑑賞）の効果や課題を明らかにする。

3. 事業の概要

（1）研究の目的

筆者は6月1日に彦根市教育委員会において毎月開催されている定例校長会において、1時間、アート思考や自己肯定感を高めることのできる朝鑑賞に関する研修会講師をさせていただいた。その内容を受けて、7月に彦根市高宮小学校より朝鑑賞の共同研究に関する依頼を受け、職員研修会を7月下旬に実施し、2学期より朝鑑賞が実施されることとなった。彦根市高宮小学校は学年3学級以上の大規模校である。滋賀県内には大規模校が多くある。したがって、大規模校における朝鑑賞の効果や課題、適切な題材等を明らかにしていく。

（2）成果と課題

朝鑑賞を実施された学級担任の先生方が記した11月のアンケートにその成果が端的に記されているのでそのまま紹介させていただく。

朝鑑賞を行ってみて、子どもたちの様子や自分自身のことなどで、何かプラスに感じられることがございましたらご記入ください。

- ・10分があっという間に感じるくらい、児童は楽しんでいました。朝の始まりがすがすがしいスタートをきれることはとてもよいことだな、と思いました。（1年a先生）
- ・子どもたちの様々な感じ方を知れて楽しい。（1年b先生）
- ・違う意見や見方があって良いという考え方が子ども達の中であたりまえになってきたことがよかった。（1年c先生）
- ・普段、挙手をしない児童が挙手をして発表したり、「この児童から、こんな発言が！！」など、発見と驚きの朝鑑賞の時間でした。また、私自身も、児童の発言を聞いて、とても勉強になりました。（2年d先生）
- ・とても意欲的に意見を発表することができた。「どんなことを考えているのでしょうか？」などの問いは、相手の表情から気持ちを考えるすごく大切なことなのでまたやってみたいです。（2年e先生）
- ・自由に発言できるので、楽しそうに参加する様子が見られます。あまり授業に参加できない児童からの発言もあり、全員の視線がテレビ画面に向いています。（2年f先生）
- ・子どもたちが意欲的に発表していました。自分の意見が周りに認められる心地よさを味わえました。とてもおもしろいです。（3年g先生）
- ・普段、発表が苦手でかたまっている児童もいきいきとしている。間違いがないので発表したい！と意欲的である。月1回と知ると残念がっていた。1日の始まりが気分よくスタートできる。（3年h先生）
- ・友達の新しい見方を知り、「なるほど」と納得している様子でした。どの意見も「そうかもしれないよね」

と肯定できるのでとても良い雰囲気です。(4年 i 先生)

- ・「考える人」は何を考えていると思うかを聞いたが、色々な答えが出て和やかな雰囲気になりよかった。(4年 j 先生)
- ・自分の考えや意見を自由に言う子が増えた。他教科でも「間違ってるかもしれないけど」「たぶん」というふうには自信はなくてもとにかく発言してみようという雰囲気が広がっている。(5年 k 先生)
- ・11月11日の朝鑑賞は、最初と比べて、たくさんの意見が出てきました。楽しそうに「～に見える！」や「～してるところ」と言っていました。(5年 l 先生)
- ・「自由に発言していいんだ」という雰囲気がとてもつくりやすく、毎回ほんわかとした空気がクラスを囲みます。私自身、とても好きな実践です。(6年 m 先生)
- ・初めて観る「絵」に興味をもった子たちがたくさんいました。中でも、ラッセンの絵では、「これ写真？」「え～絵なん！！」と驚く姿が見られ、そこからみんなで深く鑑賞させてもらいました。水の中や泡をどのように描いているのか、子どもたちと新たな発見をさせてもらいました。(6年 n 先生)
- ・特別支援学級なので、話をするのが苦手な子も多いですが、自由に話せる雰囲気なので、思いついたことを楽しそうに話しています。(まこと o 先生)
- ・とにかく子ども達の表情が生き生きしています。想像を膨らませて話す様子やそれを「うんうん」「ほんまや」と聞いて、それを受けて「〇〇にも見えるね」と返すなど会話のキャッチボールができています。何より、子どもの発想がおもしろい！(まこと p 先生)

また、高宮小学校の先生方から次のような質問や悩みをいただき、筆者は「高宮小学校朝鑑賞レポート」を発行させていただき、その中で Q&A として先生方の悩み事に対して少しでも一助になればと思います、以下のような内容のものを発行してきている。

Q5：発表する子が偏っています。一度も発言しない子に対して声かけをした方がいいのでしょうか。

A5：そのことがとても気になるようでしたら、ファシリテーターは先生がされているので、挙手してなくても子どもの表情を読み取って指名されてはいかがでしょうか。「何が見えますか」に対してなら、作品にもよりますが、見えていることを述べるので発言しやすいと思われます。ただし、一番大切なことは子どもが「発言する」ことではなく、子どもが「思考する」ことです。友達の発言を聞いているようであれば、それを受けて発言していない子も思考しているはずで、子どもたちの発言などの表面的なことではなく、表情などから子どもたちの内面（思考）を先生は常に捉えるようにしていきましょう。友達の発言をしっかりと聞ける（傾聴）ことの方が実はとてもとても難しいことだと感じています。そんな姿勢でいていただけると幸いです。

ちなみに、一クラスの数が多いと発言できないお子さんもいらっしゃると思います。本来、美術館において、ギャラリートークは10名ぐらいが一番行いやすい人数です。したがって、学級で行う際、私は朝鑑賞の際に、ポストイット等の付箋をあらかじめ配布しておき、子どもたちが考えた題名と氏名を書いてもらい、廊下などに掲示しておきました。すると、発言できなかった友達の考えやアイデアを共有することができました。また、もちろん不正解もないので、挙手してなくても先生が指名されてもいいのではないのでしょうか。その際、答えられなかったら、「また後で考えがまとまったら教えてくださいね。」と伝えてみてはいかがでしょうか。多様な見方や感じ方があることを学ばれることの意義は大きいと考えています。

4. 今後に向けて

実は、対話型鑑賞・ギャラリートークを美術館において実施する際には、10人程度の人数だと一番実施しやすい。ところが大規模校の高宮小学校においては、殆どの教室においては、40人近くの子どもたちがいるので、全員が10分間程度の時間内で発言することはそもそも難しいことである。つい教師は全員の子どもたちからの発言を求めがちになるが、一番大切なことは、子どもたちが「思考する」「傾聴する」と考える。発言以上に、思考しながら人の話を聴くことは難しいことなのである。ところが、その聴くことが、しっかりとできている学級の実態がみられてきている。大変素晴らしいことである。引き続き、高宮小学校の先生方との共同研究を進めながら、その効果や可能性を追究していきたい。

(青木 善治)

1 共同研究事業

18) 児童生徒が学びを実感することができる授業づくり ～「㊦んと考えひとり学び」と「㊧んがえの共有」の工夫～

1. 事業名および担当者

事業名は、「児童生徒が学びを実感することができる授業づくり～「㊦んと考えひとり学び」と「㊧んがえの共有」の工夫～」である。

【担当者】 甲賀市教育研究所：福永 佐栄子（所長），山本 真由美（研究員）
教育学部：長岡 由記（学部教員）

2. 事業の目的

本研究では、付けたい力を明確化・焦点化し、「学びを実感する姿」を具現化した上で「㊦んと考えひとり学び」と「㊧んがえの共有」を学習過程に組み込んだ授業を実施し、その授業分析を通して学びを深める授業展開にするための手立てと効果を明らかにすることを目的とする。

甲賀市では、子どもが考え、挑戦し学ぶための授業スタイルとして「こうか授業術『5箇条』」を作成し、従前より「㊦んと考えひとり学び」と「㊧んがえの共有」の一体化について取り組んでいる。しかしながら、質的に学びが深まる授業展開の一体的な充実に課題が見られる。本研究では、付けたい力を明確化・焦点化し、学習のゴールから逆向きに単元・授業を構想する基本の授業づくりの中で、児童生徒の「学びを実感する姿」を具現化し、「㊦んと考えひとり学び」と「㊧んがえの共有」でより学びを深めるための手立ての工夫を行うことで、学びを実感することができる授業を目指す。なお、本事業は、甲賀市と大学の連携によって同市の授業研究体制を構築するための取り組みとしても位置付けている。そのため、本共同研究事業の授業研究会と市の授業力向上養成研修（No.2・No.3）を合同で開催している。また、第2回目の授業研究会には、大学院生2名が参加し、児童理解と授業研究について実践的に学ぶ機会とした。

3. 事業の概要

研究授業会は、9月22日（研究授業Ⅰ）と9月29日（研究授業Ⅱ）に行った。以下、概要を記す。

研究授業Ⅰ：聞いて！わたしのお気に入りのきつねの話【「ごんぎつね」（光村図書4年下）】

本単元の主な目標は、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりや結び付けて具体的に想像することと、「ごんぎつね」の物語を読んで自分の感想をもつことである。単元の後半では、「ごんぎつね」の学習を通して身に付けた知識や技能を活用して、登場人物がきつねの物語を読み、「わたしのお気に入りのきつね」を他者に伝えることを目的とした授業が行われている。

研究テーマについては、それぞれ次のような手立てが学習過程に盛り込まれている（一部抜粋）。

「㊦んと考えひとり学び」…じっくり考え、悩める時間と手立てを準備する。言葉の意味が理解できるようにする（説明、挿絵、動作化）。これまでの学習を振り返ることができる全文掲示を行う。自分の考えを書き記すことができる全文が一目で見えるワークシートを用いる。ポイントとなる言葉の探し方を示す。どのような考えも認めていけるような学級の雰囲気を作る。

「㊧んがえの共有」…学習計画を共有したうえで、友達の考えを聞く目的や自分の考えを伝える理由について児童自身が考えて授業に臨めるようにする。学習者の意見を整理、焦点化して共有しやすくする。

研究授業Ⅰでは、主に4・5場面を取り上げて、「加助と兵十のやりとりや情景を読み取り、前後の文章や前の段落と結び付けながら、登場人物の気持ちを想像することができる」ようになることを目的として学習が行われた。児童は、ごんの気持ちが分かる叙述を見付け、関連する場面と結び付けながら、ごんの気持ちを考えて発表していた。場面と場面とをつないで解釈する際には、「びっくりシリーズ」、「かくれるシリーズ」、「ピカピカシリーズ」などの名前を付けて、叙述の特徴ごとに分類しながら登場人物の気持ちとその移り変わりについて考えていた。指導者が児童一人一人の意見をコーディネートしてつないでいくことで、より「ひとり学び」と考えの共有が実現できるように意図された授業が行われていた。4・5場面の登場人物の言動と気持ちについて、学習者一人一人が自身の考えをまとめる機会を設定すると、さらに本時の「㊦んと考えひとり学び」の詳細が見えてきたのではないかと考えられる。



研究授業Ⅱ：いきものすごいところをつたえよう【「うみのかくれんぼ」(光村図書1年上)】

本単元の主な学習活動は、事柄の順序などを考えながら教材文の内容の大体を捉えた上で、自分が選んだ生きものすごいところを調べて紹介カードに書いて伝え合うことである。研究授業Ⅱでは、「『はまぐり』のすごいところとそのわけについて、本文の中から重要な語や文を選んで説明することができる」ようになることを目的とした授業が行われた。

研究テーマについては、それぞれ次のような手立てが学習過程に盛り込まれている(一部抜粋)。

「㊦んと考えひとり学び」…言葉の意味を一人一人がイメージするために、それぞれの生活体験を想起する場面を設定する。写真と文章を照応させながら、それぞれの生き物の「隠れる場所」「体の特徴」「隠れ方」を見付け、動作化を取り入れながら考えられるようにする。

「㊦んがえの共有」…ペアで対話する活動を毎時間設定し、対話をする中で考えを広めたり深めたりできるようにする。質問したり、共感したりしている姿をクラス全体に広め、対話するよさに気付かせるようにする。ICT機器の活用では、電子黒板を使って教材への書き込みをし、どの語や文から考えたのか分かるようにする。

授業では、生活体験と結び付けて考えるための声掛けや、動画を視聴することで本文の内容を視覚的に捉えられるようにするなどの手立てが取り入れられていた。学習者は、「はまぐり」についてすごいと思ったところとその理由について、自分と比較しながら考えていた。手立てがあることによって、言葉にこだわりながら、具体的にイメージすることができていた。ただし、動画を見て分かることと本文から読み取れることに差異が生じる場合もあり、動画の選択と視聴をする目的を見直すとともに、その効果についての検証が必要であることも今回の授業から見えてきた。



4. 今後に向けて

本年度の研究で取り入れた学びを深める授業展開にするための手立てと、その効果についての検討結果を、次年度の研究改善に生かしていくことが課題である。(長岡 由記, 山本 真由美)

1 共同研究事業

19) 造形活動における「学びの場」と授業改善モデル

1. 事業名および担当者

事業名は、造形活動における「学びの場」と授業改善モデルであり、担当者は次のとおりである。

学部教員：新関 伸也

滋賀県美術教育研究会会長：大和 高成（豊日中学校校長）

滋賀県美術教育研究会研究推進部長：堤 祥晃（安曇川中学校教諭）

2. 事業の目的

令和6年度開催予定の全国造形教育研究大会（滋賀大会）に向けて、滋賀県美術教育研究会の研究テーマに沿った実践を行い、実践報告としてまとめる。

3. 事業の概要

【主な取組内容】

- ・研究テーマ『子どもも先生も楽しむ「学びの場」の創造 ～「それいいね」が生まれる時間～』に沿った実践を県内各校種で実践する。
- ・モデルとなるような授業実践を実践報告にまとめ、県内の美育会会員に配布する。
- ・授業の内容を交流する、作品審査会で他の校種を審査するなど、校種間の交流を推進する。
- ・他府県での研究大会や研修会に参加し、見識を広げる。

（1）研究の背景

本会では、子どもたちの行う表現活動を、作品として形にすることを目的に行われるのではなく、活動の中で発見し、感じたことから様々なことを考えたり技術を習得したりする「学びの場」と捉えている。これは学習指導要領で図画工作科・美術科の授業が造形的な視点をもとにして感性を育み豊かな情操を培うことが目的であると示されていることをふまえた重要な視点である。しかし、現場では展覧会に向けて作品を作らせることに注力する中で、いつの間にか授業が「作品づくりの場」になってしまっていることも多い。そこで、研究テーマを『先生も子どもも楽しむ「学びの場」の創造』に設定し、授業を、子ども達が様々な体験から豊かに学ぶことができる「学びの場」にするためにどのような指導方法や題材の工夫が必要かを考えることにした。今年度はサブテーマとして『「それいいね」が生まれる時間』を設定し、特に対話的な学びや他者受容など児童・生徒の交流の中から生まれる学びや気づきを大切にして研究を進めている。

（2）県内の教員によるモデル実践例

今回の研究では、県内の小中学校の教員を対象に、モデルとなる授業実践を募集した。ここでは、長浜市立塩津小学校の松波和樹教諭の実践を紹介する。

《 題材名 》 『暗闇に出現！きらきらきらめくクリスタル〇〇』

《 実施学年 》 小学校3年生

《題材の概要》

本題材は、透明容器、ラップ、ビニル袋、梱包用緩衝材などの透明素材を使用し、光（自然光やライト）と組み合わせて造形する活動である。材料から何かに見立てたり、材料の特徴を活かしたりしながら発想を広げる活動に加えて、児童同士が交流する中で新たな発見があったり、友達の作品の良さに気づいたりする活動も大切にしている。これらの学びを保障するために、以下の6点を工夫している。

- ①材料に親しむ十分な時間の保障と活動の切り替わるタイミングの見極め。
- ②児童の材料に対する新たな見方や捉え方におけるつぶやき、行為等の取り上げ方、及び、それらを言語化し整理すること。
- ③万能はさみやプラスチック用接着剤との出会いや使用法指導の工夫。
- ④児童同士の鑑賞及び学び合い（真似ることも含む）等の交流が生まれるきっかけづくり。
- ⑤活動場所や材料の設置場所、保管方法などの環境設定。

《事後考察》

実際にもの（材料や道具、作品）に触れながら表現活動を進める姿に、「対象や事象を捉える造形な視点について自分の感覚や行為を通して分かる」ことの大切さを改めて認識した。透明な容器やその形から表したいものをイメージし、実際に組み立て、上手くいかないことに向かい合い試行錯誤する。この様な、自分の見方や感じ方を広げる活動は図画工作科ならではの学びであると考え。

（3）全国造形教育研究大会（長野大会）視察

令和4年8月26日（金）27日（土）に長野市立城山小学校で開催された全国造形教育研究大会（長野大会）に滋賀県から教員10名と新関の計11名が参加した。（写真1）オンラインとのハイブリッド開催ではあったが、約270名の参加があり大盛況であった。滋賀大会の開催に向けて、授業研究会の運営、分科会の運営、全体会の運営、スポンサー企業との連携など、大変参考になる大会であった。さらに、参加メンバーが滋賀の造形教育の良さや課題に気づくことができる貴重な機会となった。今回の視察をもとに、令和6年度実施の全国造形教育研究大会（滋賀大会）に向けての準備・研究を進めていきたい。



写真1：全国造形教育研究大会（長野大会）の様子

4. 今後に向けて

令和6年度開催予定の全国造形教育研究大会（滋賀大会）にむけて、図画工作科や美術科における作品作りの授業から脱し、造形的な視点をもとにして児童・生徒の感性を育み、豊かな情操を培う必要がある。この理念に向けて、指導方法や題材の工夫をするために、モデル実践校においてテーマに即して研修を深めたり、長野県で開催された全国造形教育研究大会での研究や実践を視察したりした。それらの結果、これまで積みかさねてきた滋賀県の造形教育のよさを再認識するとともに、全国大会に向けて実践の質の向上をめざしながら、チームで研究を推進していく必要がある。

（新関 伸也）

1 共同研究事業

20) 美術科における題材のルールを生徒が自ら考える授業

1. 事業名および担当者

事業名は、美術科における題材のルールを生徒が自ら考える授業であり、担当者は次のとおりである。

学部教員：新関 伸也

高島市立安曇川中学校：川島 浩之(校長)，堤 祥晃(教諭)

2. 事業の目的

本事業は、中学校美術科において、生徒の主体性や能動性を高めるための研究の一環であり、その研究成果を学生や現場教員に還元することを目的としている。今回の実践研究では、従来は教師が設定していた題材のルールを、題材の学習目標を示しながら生徒自身に考えさせることで、生徒がより学習目標を意識して取り組めるようになるのではないかとという仮説を実証する。また、主体性を育むという視点でも、その効果を検証する。

3. 事業の概要

(1) 研究の目的

中学校美術科の授業では、題材の内容を担当教員が考える事が一般的であり、教科書に掲載されている題材であっても、素材やテーマ設定、時間設定など授業の詳細は教員の裁量に委ねられている。また、題材（授業）のルールに関しても生徒の実態や教員の指導観により担当教員が独自に設定していることが通例である。「学習のルール」は「学習目標」と密接な関係があり、「学習のルール」には学ばせたい内容を効果的に学ばせるためのガイド的な役割もある。そこで、美術科の授業において「学習のルール」（題材のルール）を生徒自身に考えさせることにより、生徒の学習目標に対する意識を高められるのではないかと考えた。本研究はこの仮説を基に、中学校美術科の授業において題材のルールを生徒と一緒に考える活動を取り入れ、その効果と課題を検証する。

(2) 研究の基本的な考え方

今回の研究は、生徒の学習目標に対する意識を高めるための方策を探ることを目的としている。従って、生徒に考えさせる題材のルールは学習目標に沿っていることが大前提である。そこで、まず生徒に題材の学習目標をわかりやすく伝えることが重要だと考え、「題材ループリック」（図1）という形で学習目標を提示した。また、一からルールを考えることはハードルが高いと考え、選択式でルールを考えさせることにした。

「私の考えた〇〇絵の具」の学習目標

評価	取り組みの内容
A	自分なりの面白い「絵の具セット」の設定を考え、試したり周りに相談したりしながら、伝わりやすくなるための工夫を考えて表現する。
B	「こんな絵の具セットがあったら…」をきっかけにして、実際には色がないものから色をイメージし、工夫して表現する。
C	自分の興味があるものや好きなものをテーマにし、なんとなく思いついた色を塗る。

図1：生徒に提示した題材ループリック

(3) 実践事例

《 題材名 》 『私の考えた〇〇絵の具』

《 実施学年 》 中学校1年生

1 共同研究事業

21) 地域連携型校内研究システム「つながる校内研究」の実証的研究 ～「Lesson Study シート」の開発を通して～

1. 事業名および担当者

本事業は、「地域連携型校内研究システム『つながる校内研究』の実証的研究—『Lesson Studyシート』の開発を通して—」であり、次の担当者によって遂行された：[学部教員] 渡邊慶子（教育学部准教授・数学教育学）、[連携先機関] 甲賀市教育研究所、甲賀市立水口小学校、甲賀市立土山小学校、甲賀市立雲井小学校、[連携先担当者] 西村栄樹（甲賀市教育研究所・課長補佐）

2. 事業の目的と方法

本事業の目的は、甲賀市内の複数校で連携して校内研究を実現するシステムを開発してそれを実証することである。この事業において、次の2点を研究課題とした（甲賀市教育研究所、印刷中）。

- ① 校内研究(特に授業研究-Lesson Study-)を先導して実施できる教員(いわゆる校内研究主任教諭)を育成するための組織づくりをし、具体的な活動を計画してその成果を明らかにすること。
- ② 甲賀市の校内研究のプロセスや成果を共有するために校内研究(特にLesson Study)用ワークシート(図1, 以下, LSシート)を開発し、そのシートを実証しながらよりよいものにしていくこと。

本年度は、学校規模や地域性の異なる3校（大規模校1校，小規模校2校）の校内研究主任が各校内研究の計画・実行・振り返りを共有し、各自校の校内研究の仕方を客観視するとともに、より良い自校の校内研究会へと年間を通してアップデートするための具体的な方法を得ることを目的とした。

本事業では「つながる」という言葉をキーワードとしており、それは主に3つの観点で捉えられる(図2)。1つ目は、「学校と教員」つまり、校内研究のテーマと校内教員の日々の教育実践(教育活動)、2つ目は各学校で年間を通して複数回行われる「校内研究会どうし」のテーマや方法、そして3つ目は、「学校間」が校内研究を通して「つながる」ことである。甲賀市内の小中学校は規模もその特色も多種多様で、3つの協力校もそれぞれ異なる規模・特色をもつ学校とした。その研究主任らが相互に学び切磋琢磨することができれば、今後の市内の校内研究が更に充実すると考えた。

本事業では、上記の3つの「つながる」視点で各校の校内研究のプロセスや成果を逐一共有できる「LSシート」を開発し、その有効性を検証した。「LSシート」は、プレゼンテーション用のアプリケーションを用いたため、研究会の記録や写真などをその場で可視化したり、協力校全体で共有したりできた。結果として、各校の校内研究会の経緯を教員が振り返って共有することもでき、各々の校内研究会のよりよい運営にも寄与した。

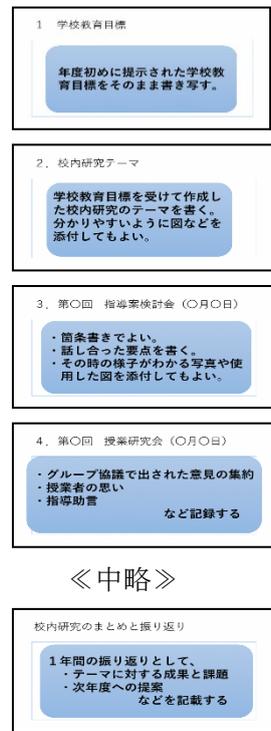


図1 LSシート例



図2 「つながる」構想のイメージ

3. 事業の概要

(1) 「LS シート」の作成・実証・改良

図1の通り、LSシートの最初のページに学校教育目標や校内研究のテーマを載せ、逆思想的に教材や展開を工夫した。これらを意識的につなげることで、各学校の校内研究の方向性・テーマがより明確になり、同校教員の授業研究に反映されやすくなった。さらに、LSシートは、学校間での情報共有や議論においても、各学校の研究主題の背景や具体的な主題への取り組みを相互に理解しやすくした。

また、校内で何度も授業研究会を重ねると、研究主題や取り組みが少しずつ更新されるが、その経過をLSシートで明示したことにより、「校内研究の成果」や「教員の授業研究における力の向上」などが可視化され、校内主任や教職員を鼓舞し、持続可能な校内研究計画の策定へつなげられた。特にLSシートは、授業実施前の教材開発や授業計画、授業後の協議会などの校内授業研究会の一連の成果、教員の発言や板書計画案等をポートフォリオとして残すツールとなった。文字や写真で校内研究の経緯・成果を可視化して蓄積することは、通常見えにくい教職員の授業研究に対する努力の跡を残し、それを若手教員に伝承するという学校教育の根底にある「教員の学びの文化」の構築に寄与すると考えられる。

(2) 教育研究所・研究推進委員会の役割の明確化

研究推進委員会では校内研究主任を通して「学校間のつながり」をつくることができた(図3)。基本的に各校1名が担う校内研究主任は、抱える悩みや思い・信念を校内で簡単に吐露できない立場にある。したがって、異なる学校で同じ立場にある教員同士が交流できる研究推進委員会は、校内研究主任が自信をつけたり反省したりできる共同体ともなった。特に、他校の校内研究を観察して他校の教員たちと交流したことは、校内研究主任たちに自校の校内研究の現状を客観的に評価させた。本事業では、このような「学校間のつながり」が校内研究主任を大きく成長させる場となったと考えている。さらに、大学の学部教員や市内中学校校長、教育委員会の視点が加わったことで、授業研究・校内研究の国内/国際的な観点も加わった。本事業によって、校内研究主任が自校を越えて学び合う「つながりのある研修の場」に身を置いたことにより、協力校の校内研究会はより一層充実したものとなり、ひいては協力校の教職員により高い教育目標を掲げて学び続ける校内研究会に参加させられたと考える。



図3 研究推進委員会議

4. 今後に向けて

第一に、どの学校でも活用できるようにするためにLSシートを改良することである。各学校の多種多様な特色・事情を考慮したり個人情報流出を防ぐガイドラインを踏まえたりして、甲賀市内の学校でLSシートを共有・比較できる「地域連携型校内研究システム」の構築を進めていきたい。

第二に、学校組織のいわゆる「ミドルリーダー」の育成への寄与も今後の課題である。校内研究主任は、自校の授業研究に関わる課題を見抜いて焦点化し、「協働的な教師同士の学び合い」を学校組織全体で奨励して、その成果を全員で共有するという難役である。そのような困難に一人で立ち向かうのではなく、甲賀市内のミドルリーダーたちで協力的に行っていくための組織づくりが必要である。

多忙極める学校現場の働き方改革と同時に校内研究の在り方が問われている昨今、「つながる校内研究」事業には業務の効率化を実現する要素が含まれる。もっとも効率化が難しい「授業研究」において、教職員がより一層主体的に臨めるように、本事業で今後もよりよい研究を積み上げていきたい。

【引用・参考文献】甲賀市教育研究所(印刷中)「令和4年度研究紀要」第18号. 甲賀市教育研究所。
(西村栄樹・渡邊慶子)

1 共同研究事業

22) 主体的に遊ぶ子どもの育ちを支えるための環境づくり（4歳児）

1. 事業名および担当者

事業名は、「主体的に遊ぶ子どもの育ちを支えるための環境づくり（4歳児）」であり、担当者は次のとおりである。

草津市立老上こども園：中島昭子（園長）， 杵田昌恵（副園長）， 力石さやか（研究主任）
教育学部：塩見弘子

2. 事業の目的

草津市立老上こども園において、昨年度「3歳児の遊びを豊かにし、育ちを支える環境づくり」として3歳児の発達特性を考え、「モノ（素材、材料等）との出会い」に視点を持ち、遊びが生まれるふさわしい環境を省察し、指導計画の見直しに活かしていった。今年度は、昨年度の成果を踏まえて「モノと向き合う」4歳児の保育の中での環境づくりを進めていきたい。

3. 事業の概要

学期ごとに研究保育を行い、4歳児のそれぞれの時期と幼児の発達の姿に応じた環境を検証し改善につなげ、材料用具などの教材と場の構成の両面から考えていく。モノと向き合う4歳児の環境づくりと共に、援助としての教師の在り方にも迫り、教育課程及び指導計画の再編につなげていく。

(1) 4歳児実践事例①「水遊び（水鉄砲）」7月8日

鉄棒に的をぶら下げてそばに水の入ったバケツを準備しておいた。しばらくすると水鉄砲を上に向けて水を飛ばしたり、地面のアスファルトに水で線を描いて遊び出した。



保育者はその様子を捉えて、アスファルトの方へ大きな的を立てかけたり、バケツを移動して環境を再構成した。そうしたことで他の幼児が集まってきて遊びが広がっていった。



(2)4歳児実践事例②「自分たちの場で（バーベキューごっこ）」11月28日

友達と一緒にバーベキューごっこをしようと、自分たちで場を選び、テラスにシートを敷いて必要な物を運んで遊び出した。自分たちの場ができると、みんながやりたいことは、バーベキューのイメージでトングをもって食材を焼くことのようなのだ。4人でコンロに向き合い思い思いに食材をひっくり返して楽しんでいた。時折ぶつかることもあり「やめてー」の声があつたりするが、それ以上のトラブルになることはなく、ひとしきりこの遊びを楽しんでいた。

その後、他の遊びの場に行っていたが、この場がそのままになっていたのだから、遊んだまま放つたらかしくなっていることを告げられると、また4人が集まってきて手際よく片付けを始めた。



(3)考察

事例①は7月で「いろいろな遊びに興味をもち、繰り返し楽しむ時期」と捉える。保育者が予想していなかった遊びが広がった。幼児の気付きから新たな遊び方が生まれた。水の跡がつきやすいアスファルトの地面が近くにあったことが遊びが生まれる一つのきっかけになったと考えられる。幼児の気付きの姿を捉え、声をかけたり、より楽しくなるよう場の再構成を行ったことで遊びが充実したと言えるのではないかと考えられる。

事例②は11月で「友達と一緒に簡単な目的をもち遊ぶ時期」と捉える。4歳児もこの頃になると、自分たちの甲斐性で遊びの場を作って遊べるようになってきている。いろいろな遊びの経験を重ねてきており、自分たちの力量で使いこなせる教材用具や場があれば、自発的に遊べる姿があると感じた。4人が同じ遊びのイメージ（ここではバーベキューごっこ）を持っていることで、言葉のやり取りも豊かにあり、遊びの世界観を楽しんでいるようである。遊びの準備から片付けまで自分たちで思いを持ち取り組んでいる。自分事になっている姿が感じ取れた。自分たちで考えたり遊べたりすることが自信につながり、今後の遊びへの意欲や思考・想像につながる姿が育っていると捉えられるのではないかと考えられる。

4. 今後に向けて

4歳児前半期と後半期の研究保育を通して、それぞれの時期での育ちの姿やその育ちを支えるために必要な環境援助を共有することができた。特に4歳児では個々の遊びからみんなで楽しむ遊びに向けて相互が充実し高まっている様子を確認することができた。今後は3, 4歳児での育ちを5歳児では児童期との架け橋期の保育についての検証につなげていきたい。

(塩見弘子)

1 共同研究事業

23) 「確かな学力」の向上を目指す、児童が見通しをもつことに重点を置いた指導と評価の一体化 ー児童の学習把握に1人1台端末を活用した小学校理科の指導改善ー

1. 事業名および担当者

事業名：研究員派遣による学校支援に関する研究（理科）

「児童の予想や仮説を基にした、問題解決の力の育成を目指す小学校理科の指導改善」
ー見通しをもって観察，実験を行うことを通してー

担当者：滋賀県総合教育センター研究員 鶴野 和也，滋賀大学教育学部教授 加納 圭

2. 事業の目的

小学校学習指導要領(平成29年告示)において、小学校理科の教科の目標は、自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察，実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を育成することとされている。

児童が見通しをもって観察，実験を行うことの意義について、小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 理科編(以下、学習指導要領解説という。)には、観察，実験が児童自らの主体的な問題解決の活動になることや、児童が様々な視点から自らの考えを柔軟に見直し、その妥当性を検討する態度を身に付けるようになることが示されている。

以上のことから、本研究では、児童が「見通しをもつ」ことに重点を置いて指導することにより、児童が主体的に問題解決の活動に取り組めるようにして、問題解決の力の育成を目指す。

3. 事業の概要

(1) 児童が「見通しをもつ」ことについて

学習指導要領解説において、問題解決の過程の例として、「自然の事物・現象に対する気付き」「問題の設定」「予想や仮説の設定」「検証計画の立案」「観察・実験の実施」「結果の処理」「考察」「結論の導出」といった過程が挙げられている。この中で、問題に対して児童が「予想や仮説の設定」を行うことと「検証計画の立案」を行うことを指して、「見通しをもつ」こととする。

児童が「見通しをもつ」ことの意義は、次の二つと考え指導を行う。一つは、既習の内容や生活経験を活用して、新たな問題の解決に取り組めるようになることである。もう一つは、児童が多様な意見を出し合うことで、自然の事物・現象を様々な視点から考えられるようになることである。

(2) 児童が「見通しをもつ」ために必要な四つの手立て

児童が「見通しをもつ」場面を授業に取り入れた際、単元を終えるまでに多くの時間を費やした。その要因は、検証計画における条件制御が不完全であったり、目的が不明瞭のまま観察，実験を行っていたりすることであると分析した。このような状況を改善するために、問題解決の過程の「予想や仮説の設定」から「観察・実験の実施」までの間に、「表現の整理」「基準の設定」「妥当性の検討」「結果の見通し」という四つの手立てが重要なのではないかと考えた。これら四つの手立ては、これまでも指導者によっては無意識の内に実践されてきたものであるが、これらを明確にして、

意図的に指導に取り入れることで、全ての指導者の指導改善に資するものになると考える。

ア 児童が着目したことをまとめる「表現の整理」

児童が予想や仮説の設定を行った後、指導者は様々な視点から問題解決の活動に取り組めるように、児童が発表した考えを板書した。しかし、他の児童の考えと自分の考えとの共通点や相違点を見つけ、考察に活用しようとする児童は少なかった。そこで、「予想や仮説の設定」の際、児童の考えを交流する時間を設けるだけでなく、何に着目して検証計画を立案するのかを整理するようにした。これにより、実験の目的を明確にし、様々な視点から考えられるようにすることができた。

イ 変えない条件を考えやすくする「基準の設定」

条件を制御しながら結果を比較する観察、実験を行う場合、変える条件と変えない条件を整理する必要がある。児童にとって、変える条件は自分の予想を基にするため設定しやすいが、変えない条件は、児童が観察、実験をイメージできず、設定が難しかった。そこで、児童の予想や検証計画を基にして、基準となる条件を設定することにした。これにより、予想した条件を変え条件に設定し、それ以外の条件を変えない条件にすればよいことが明確になり、条件を制御した計画を立案できるようになった。

ウ 検証計画を様々な視点から見直す「妥当性の検討」

個人が立案した検証計画を基にした場合、観察、実験の方法が不完全であることがあった。そこで、図のような手順で「妥当性の検討」の手立てを講じた。これにより、異なる視点から検証計画を見直すことができた。さらに、他の班の計画を見直したことを踏まえて、自分たちが条件を制御できているかを見直している班も見られた。

エ 予想が確かめられた場合に得られる「結果の見通し」

実験を伴う学習を行う際、児童が実験を行うことに夢中になり、「自分の予想を確かめるための実験」という目的を忘れてしまうことがあった。そこで、実際に予想が正しかった場合の結果を、図や写真を活用して記述するよう児童に促すという「結果の見通し」の手立てを講じた。これにより、「予想は間違っていた」などの記述が見られるようになり、自分の予想を確かめるという目的をもちながら観察、実験を行うことができた。

①変える条件と変えない条件を整理した表と観察、実験の手順を個人で作成する。
②予想や検証計画が似ている児童同士で班をつくる。
③個人が考えた検証計画を基にして、班で変える条件と変えない条件を整理した表と観察、実験の手順を改めて立案する。(少数意見を大切にするために、検証計画は複数になってもよいことを伝える。)
④班ごとに立案した検証計画の妥当性を学級で検討する。

図 妥当性の検討を行うための手順

4. 今後に向けて

「見通しをもつ」場面に、「表現の整理」「基準の設定」「妥当性の検討」「結果の見通し」という四つの手立てを取り入れた。そのことで、児童が主体的に問題解決の活動に取り組んだり、様々な視点から検証計画を立案したりする活動となり、問題解決の力の育成につながった。

一方、児童が考察の記述内容に納得できていないと思われる場面が何度も見られた。「見通しをもつ」場面を取り入れるだけでなく、考察の場面における手立てを講じる必要があると考える。

(鵜野 和也, 加納 圭)

1 共同研究事業

24) 義務教育現場を対象とした【声を鍛えるルーティントレーニング】の作成・実施「反復トレーニング」編

1. 事業名および担当者

事業名は、『義務教育現場を対象とした【声を鍛えるルーティントレーニング】の作成・実施「反復トレーニング」編』、担当者は 渡邊 史と、教育学部附属小学校教諭の矢吹雄介である。

2. 事業の目的

本事業は以下を目的としたものである。

- 発達期にある児童生徒を対象として「表現ツール」としての「声」の構築，汎用の動機づけを行う。
- 児童生徒が「自身の声」と向き合うことで「自分自身」と客観的に対峙，すなわち「客観的視点」を獲得していくためのきっかけとなることを期待し，トレーニングを実施する。
- 「声表現」の具体的スキル構築に取り組むことで，「声」を構築するために必要な身体各部の働きを意識させることで心身の健やかさを保つための様々な「気づき」「自己確認」のきっかけを提供する。

3. 事業の概要

一昨年および昨年度に，同助成を得て取り組んだものの発展および拡充研究として企画した。

【声を鍛えるルーティントレーニング】の作成・動画配信を経て，昨年度は動画1本をより短く(5分程度)したものを作成・配信した結果，主たる対象である児童生徒はもちろん，教育学部の学生，および教職大学院在籍の現職教員らにもトレーニング教材として広く伝播し，想定以上の効果を上げることができた。その他，本学部の卒業生たち，また，知己を得ている小学校教員にも動画配信 URL を共有し，数多くの現場にて「音楽」の時間等で活用された。本年も引き続き，附属小合唱団に所属する4年生～6年生を主たる対象として想定しつつ，動画のブラッシュアップを行った。

本研究の発案動機であり，主たるトレーニング対象である本学部附属小学校合唱団は，日本最大規模の合唱コンクールである「NHK 全国学校音楽コンクール」に毎年参加している。本年も挑戦したが，” COVID- 19 ” の影響によって非常に厳しい条件・環境下での練習・予選参加となり，思うような結果に結びつかなかった。筆者はここ数年，当該事業研究内容のひとつとして，合唱団のメンバーに対しトレーニングを実地に行うため，練習場に直接赴いて指導をしていたのだが，本年はそれが叶わず，非常に不本意なものとなってしまった。

そもそも「声を出す」という行為は自己表現において大きな役割を担うものであり，我々はコミュニケーションツールとしてそれを汎用している。「発声」「発音」のためには，身体各部分を意識的に用いる必要があるが，現代日本においてそれらの知識・技術を意識的に取得し，さらに個々が意志的に技術向上させるような機会は，ほぼ無い。さらには COVID- 19 の影響により，「発声・発音」という「表現」方法それ自体の発現が，危機に瀕していると言わざるをえない状況に陥っている。附属小合唱団の指導者であり，筆者の共同研究者である矢吹雄介教諭も，ここ数年の「マスク生活」および教育現場での「発語・発話の自粛」により，児童生徒たちの「声」「言葉」などの表現力が後退していることに大きな危機感を抱いている。そもそも，児童の「声や言葉」を始めとする表現力は，幼少期における周囲

環境からの「模倣」に拠るところが大きい。附属小学校合唱団は4年生から6年生で構成されているが、そこでは常に、下級生が「身近な上級生」たちの発声や発語を目の当たりにし、それらに憧れつつ真似をする…という「良い影響」が脈々と続いていた。その連鎖が、この3年で断ち切られてしまったのである。矢吹教諭の情報からは、「声を出すとは?」「良い声とは?」「力ある声とは?」といった、あまりにも基礎的な部分から、その価値観を児童生徒たちが有していないようにすら思える。筆者が直接小学校に赴き、実地に「声を出して」共にトレーニングしている時、声による空間の鳴らし方、反響した音の耳での捉え方、などを目前間近に見聞きすることで、合唱団メンバーが「声とは…」の価値観を構築していたことは間違いない。本年はその機会が持てなかったことが痛恨である。

4. 今後に向けて

筆者は、『オンライン教材【声トレ道場】の作成と配信～音声学,呼吸,身体ストレッチ…基礎から取り組む歌唱トレーニング』の題目にて、「2022年度放送大学教育振興会助成」を得ることができている。これは当該事業による、滋賀大学における附属小との共同研究をベースにして行っているものである。現在手掛けている「トレーニング動画」に対しては、矢吹教諭はじめ学部生、卒業生たちからの評価・意見を募り、それを取り入れつつ、プロトタイプに手を加えている最中である。放送大学の助成により予算を組み、発声・発音のシステムを分かりやすく解説するための「人体図イラスト」をプロイラストレーターに発注、入手した。これらを盛り込みつつ、先のものよりもより「使い勝手の良いトレーニング動画」を作成している。具体的な改善点としては以下である。

- ・動画は1本5分以内に収める
- ・トレーニング種目ごとに、「視聴者とトレーナー（筆者）とが“一緒に”取り組める」ものとする
- ・精細かつ分かりやすい「資料図」の提示
- ・解説に用いるオリジナルキャラクターマスコットの採用
- ・録音、録画環境のブラッシュアップ

これらを経てトレーニング動画は、当初から目指していることを達成し、「より取り組みやすい」ものにする事ができた。

先述したように、プロトタイプ動画は筆者が担当する教育学部での講義にも積極的に用いたが、大学生たちに対しても効果が認められている。また、発達期にある児童生徒だけでなく、高齢者のデイリートレーニングとしても好意的に受容されており、非常に幅広い年齢層への効果が実証された。

文中頻回に繰り返すが、「声を出す」という行為それ自体が、自己表現において大きな役割を担うものであり、コミュニケーションツールとしての汎用性は非常に高い。この「トレーニング動画」は児童生徒の発達を優位に導くだけでなく、成人がその成長のうちに獲得したスキルを安定的に（老化等による筋力低下や発言機会の衰微を鑑みた上で）継続させることにも一役買うことは間違いない。「生涯学習」の視点からも、社会的に注目すべき研究課題であると考えている。

折しも、数年続いた「ウィルス騒動」…令和5年3月からは開放傾向が期待されている。成長期にある児童生徒たちにとって、この数年はあまりに重い影響があった。詳細なデータが出揃うには、数年を待たなくてはいけないだろうが、恐らく「声表現」スキルの獲得・発達に弊害が生じているだろう。だからこそ、この「トレーニング動画」を、出来得る限り有効に活用して行きたい。筆者自身が、職業歌手として、また音訳者（社福 京都ライトハウス認定・初級）として技術を高め、さらなる効果的なメソッド、教材を教育現場に提供する機会を積極的に提供していきたいと考え、またその場を切望している。

（渡邊 史）

1 共同研究事業

25) 附属特別支援学校高等部との協働による音楽の授業開発プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名：附属特別支援学校高等部との協働による音楽の授業開発プロジェクト

担当者：林 睦，山本知香(学部教員)，

連携先担当者：成田 豊，巻幡知栄（附属特別支援学校高等部教諭）

研究協力者：ロビン・ロイド（民族音楽演奏家・音楽療法家），教職大学院院生1名，学部学生9名

2. 事業の目的

事業の目的は，附属特別支援学校高等部と音楽の授業開発プロジェクトを実施し，その成果を今後の特別支援学校の音楽の授業支援に活かすことを目的とする。

3. 事業の概要

附属特別支援学校高等部の音楽の授業に，民族音楽演奏家で音楽療法家のロビン・ロイド氏と附属音楽教育支援センター専任教員の山本知香(音楽療法)が入り，高等部の音楽教員と協働して授業を実施した(令和4年1月1日)。また，高等部の教員と生徒，教育学部の林と音楽専修専攻の学生9名で箏の授業を実施し，交流を通して互いに学び合う機会を設定した(令和5年1月26日)。それぞれの授業後に参加者全員で，授業の振り返りと考察を行った。

・ロビンさんとおんがく

午前のユメグループも，午後のキボウグループも「今日はどんなことをするのだろうか？」と，期待感をもって生徒が集まった。日頃から音楽で始まる自然な授業を心掛けているが，ロビン氏が柔和な表情や動きで入室されると，生徒は初めての出会いにも関わらず，すーっと緊張や警戒心を緩め，むしろロビン氏の一举手一投足に吸い寄せられるように，視線をロビン氏のもとに寄せていくのがわかった。

ロビン氏が発せられる鈴や笛の心地よい音や発声，身振りや表情での語りかけが，生徒全員に順番に届けられる。そこに言葉はないが，自分のところにも来ることが自然に予測され，それは緊張感ではなく，次第に期待に変わっていく様子が，表情や身体の緩む具合，軽く前のめりになる様子，それらが重なり合って教室内に程よく心地よい一体感が生まれていったことなどから感じられた。

生徒の反応は一人ひとり違う。しかしその一つ一つの動きや反応を捉えてロビン氏が程よく応答される。生徒は，「よかった」とか「うれしい」というような感情を得たように見えた。正解や上手さを求められて応じるようなものではなく，何かいいことが始まるぞというような，応答の心地よさとその後の展開への期待感が空間に広がっていった。全員に音が届けられ，それぞれの音楽的な出会いが繋がって，みんなで音楽を楽しめそうだという実感が持てたのではないだろうか。

後半に取り組んだ，マリンバを間に挟んでロビン氏と即興演奏する活動では，いわゆるドレミではない，微妙な音階の並びが，何をやっても失敗のない，そのときに生まれる一期一会の音のやり取りを可能にしていた。模倣が続いたかと思えば，ロ



ビン氏の新たな誘いの音や間合いが生徒の感情や動きに変化をもたらす。それを受けて、自分の発想で音やリズムを変化させる生徒もいた。音で呼応する感覚が楽しめたのに違いない。

2 グループとも基本的には同じプログラムであるが、生徒の反応に応じて展開されるので、表現内容やその広がり方、深まり方は自ずと変化した。誰もが等身大の自分の音楽の感覚に何かがプラスされたことを感じられたこと、それがすなわち、この時間の音楽の学びであったと考える。日頃のびのびと音楽表現するのが苦手な生徒が、授業後の感想に「いろいろな楽器に触れて楽しかったです。マリンバをロビンさんと一緒にやれて楽しかったです。この学校に来てくれてありがとうございます。」と振り返れたのは、活動を通して自分が何か変化したのを感じたからに他ならない。(文責：成田 豊)

・ 箏の交流授業

このグループでは、一緒に音を奏でる楽しさを実感させたいと様々な楽器に取り組んできた。今回の箏の学習では、学生による箏の生演奏に、生徒たちは箏をやってみたい気持ちを抱いていた。その後、箏についての説明を聞き、生徒2名と学生1～2名がチームを組み、全7グループにわかれて箏の練習をした。始めはお互い緊張していた様子であったが、次第に打ち解け合い会話も弾んでいった。生徒たちからは、「もう一回やってみたい。」「最後まで弾きたかった。」という感想が多くあったため、その後の音楽の授業でも箏をお借りし、学習を続けた。



1年生のAは、音楽に対しての苦手意識を持っている一人である。授業終わりの感想には、毎回「難しい」「嫌だ」という内容が書かれていた。Aは今回の授業で初めて箏に触れた。楽譜が読めないAにとって、文字で書かれた箏の楽譜は非常にわかりやすいものだった。回数を重ねると「これならできそう」という自信のある感想が聞かれ、最後の授業では、「さくらさくら」をピアノに合わせて演奏できるまでに上達をした。Aは最後の授業後「箏、結構楽しかった。」と初めて音楽を「楽しい」と表現していた。Aにとって箏との出会いは音楽に対する苦手さを軽減でき、みんなと一緒に楽しめる教材であった。他にも学生に教えてもらったことを忠実に守り、弦を丁寧にはじく生徒や学生がしてくれたことと同じようにペアの子に声をかける生徒など、学生の影響は大きく生徒たちにとってこの学習が実りの多い内容であったことがうかがえた。しかし、LD傾向のある生徒にとっては文字の楽譜は難しく、演奏するのに苦労していた。また左利きで演奏することにこだわり、難しさを感じる生徒もいた。誰もが楽しく演奏するためには、楽譜を色で表したり調弦の仕方を逆にしたりするなど、まだまだ工夫できることがあったかもしれないと反省する点が多くある。誰もが楽しく・わかりやすく、を目指すためにはまだまだ教材研究していく必要があることを考えさせられた授業であった。(文責：巻幡 知栄)

4. 今後に向けて

ふたつの授業を通して、我々担当教員4名と生徒はもちろんのこと、学生9名にもそれぞれの学びがあった。附属音楽教育支援センターを介して、附属特別支援学校と音楽の授業開発プロジェクトを試みたのは、これが1年目であるが、充実した取り組みとなったように思う。今後も、附属特別支援学校とのプロジェクトを続けていきたいと考えている。(文責：林 睦)

(林 睦，山本知香，成田 豊，巻幡知栄)

1 共同研究事業

26) 地域とともにある教育活動の教育実践 ～地域でのボランティア活動の達成感で育む生徒の自尊感情～

1. 事業名および担当者

【事業名】地域とともにある教育活動の教育実践

【担当者】〔滋賀大学〕今井 弘樹（教職大学院教授・学校経営力開発コース）

〔連携機関〕大津市立田上中学校（担当者：教頭 荒川 拓也・教諭 手島 剛也）

2. 事業の目的

コミュニティ・スクールの設置準備期間であり、地域と学校は、人と人とのつながりを大切にしながら地域を担える人材を育てることが重要であると考えている。本校の生徒は、自ら何かを成し遂げるといった経験や成功の体験などが乏しいため、自信が持てず、挑戦する気持ちや意欲が持続できないなどの課題がある。そこで、本校では本年度、これまで息づいてきた地域への貢献活動を「起こせ！ボランティア・トルネード」と題して、地域に依頼されたボランティアや自発的に発案したボランティアを地域の方と共に取り組んできた。そのような中で、滋賀大学との共同研究の一年目として、生徒が地域とのつながりの中で「成功体験」や「達成感」を感じることで、自己肯定感や自尊感情の育成できるように活動を進めることとした。

また、総合的な学習の時間には、地域の歴史や魅力をさらに知ることのできる活動として、地域学習を進め「地域にはどんないいところがあるか」「どんな課題があるか」などを学び、生徒が自ら主体的に「何ができるか」を考え、実行する力を養い、地域で活躍できる生徒の育成を目指している。

コロナ禍で地域とのつながりが薄まりつつあるこの時期、もう一度、地域との連携を密にすることで、地域で子どもたちを育てていくという気運を醸成していきたい。

3. 事業の概要

(1) 研究のすすめかた

コミュニティ・スクールの設置するにあたって、今井教授（滋賀大）から指導や助言を受け、地域と学校内の意識改革に努めた。当初の「田上中をよりよくする会」（学校協力者会議）において、田上中学校に息づく地域ボランティアを「起こせ！ボランティア・トルネード」と題した活動をさらに推し進め、依頼を学校で受け付け、生徒に募集をかけることを伝えた。ボランティアの募集については、生徒昇降口前にボランティア募集のホワイトボードを設置し、生徒自身が募集の内容を確かめ、自分の意思で申し込むようにすることで、主体的な取組となるようにした。地域からのボランティアの依頼については、青少年学区民会議の会長や児童館など、地域のさまざまな団体から依頼があり、その内容についても多岐に渡り、地域の方とのつながりを生徒が感じられる機会となった。

地域学習では、テーマと課題を決めて、インターネットを利用したり地域の識者に教えてもらうことで情報を集め、発表する場を設定した。自ら情報を収集・分析・表現することで汎用的な力をつけることを目的とし、地域の方と共に学んでいく姿勢を学ばせることを重視した。



(2) 今年度の研究の内容

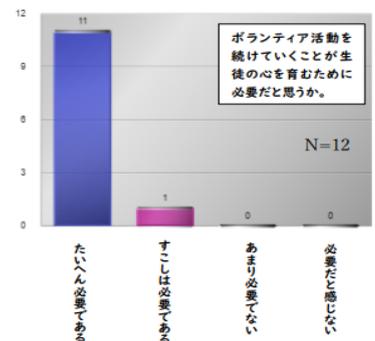
月	活動	活動内容	参加者
4月	田上中をよりよくする会	来年度のコミュニティ・スクールに向けて	地域代表者・学校代表
6月	1年総合	地域学習	1年生徒・地域の識者
7月	全校集会	地域ボランティアのスタートアップ集会	全校生徒・地域代表者
7月～12月	ボランティア活動	地域でのボランティア活動の推進	依頼者・ボランティア
11月	研修・1年総合	「コミュニティ・スクールに向けて」助言	今井教授・教頭
12月	地域防災	かまどベンチを使った炊き出し	地域住民・ボランティア
2月	田上中をよりよくする会	成果の検証と発表	地域代表者・学校代表

※「田上中をよりよくする会」とは、田上地域における学校協力者会議の名称

※ ボランティア活動については、全15回（参加のべ生徒数124名）となった。

(3) 今年度の研究の成果

新型コロナ感染症のため、地域の方々に中学生の姿を見ていただく機会も減っており、生徒の様子を見ていただく良い機会となり、生徒の積極的な取組について感心されていた。生徒についても、募集段階では不安な姿が見られたが、活動の場では生き生きとしたようすが見られ、自主的に行ったことによる高揚感、いろいろな方とのつながりによって達成できたことの自信の獲得が見られた。また、1年生の地域学習でも、地域のさまざまなところに目を向けることや、地域の方の協力も得られることがつながりになり、田上中学校の生徒のよさを伝えることもできた。



<ボランティアに参加した生徒のアンケートより>

☆ 自分で何かひとつのことを達成することが楽しいということに気づきました。また、自然に囲まれた環境で頑張ると、疲れも一気にどこかに行くような気がしました。

<ボランティアを依頼した方の感想より>

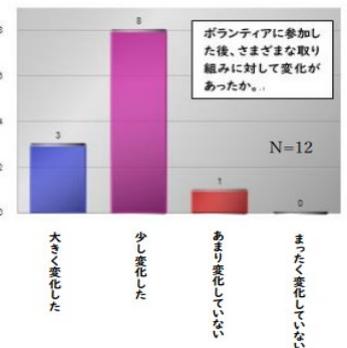
☆ 「中学生はこんなにしっかりとできるんですね。」「災害のときに、中学生ができることはたくさんあるね。」

<教員の感想より>

☆ 生徒一人ひとりが自分の役割を感じて動くことができていた。人のために行っているという思いが積極性や意欲を高めることがよく分かった。

❖ 全国学力学習状況調査（質問紙調査）の結果（※当てはまる・ほぼ当てはまると回答した生徒の割合）

アンケート項目	田上中学校	全国
人の役に立つ人間になりたいと思いますか	98.5%	95.0%
友達と協力するのは楽しいと思いますか	97.1%	93.7%



4. 今後に向けて

今年度の活動を継続し、さらに地域でどのようなことができるかを地域と共に検討し、地域とのつながりをより強くしたい。コミュニティ・スクールの設置に向け、生徒たちのボランティア活動による達成感で自尊感情を高め、生徒を地域とともに育てていけるように進めていく。

（田上中：荒川 拓也，手島 剛也，教職大学院：今井 弘樹）

1 共同研究事業

27) 教師力向上を目指した OJT 研修

～職場の同僚性を高め、授業改善を図るために～

1. 事業名および担当者

【事業名】 教師力向上を目指した OJT 研修 ～職場の同僚性を高め、授業改善を図るために～

【担当者】 [滋賀大学] 今井 弘樹 (教職大学院教授・学校経営開発コース)

[連携機関] 大津市立瀬田中学校 (担当者: 校長 人見 和宏 教諭 渡邊 博三)

2. 事業の目的

本校では 20～30 代の教員が半数以上を占めるようになり、教師力の向上が喫緊の課題となっている。昨年度は、多忙な中で職員会議後の研修時間を確保し、研修の効果を高めていくことが成果であった。一方で、研修時間以外に若手教員が気軽に相談できる環境を整えることが課題であった。

昨年度は各研修後、職員室では日常的に授業改善に関する会話があちらこちらで聞かれるようになった。学年間、年齢差の壁を超えた会話も進み、以前より自らの思いや考え、悩みなどをダイレクトに出しやすくなり、支え合う体制の強化につながった。今年度はさらに研修の時間を計画的に確保するとともに、教員同士が打ち解け合い、相互のコミュニケーションを図れるように研修の持ち方を工夫する。若手教員が互いの課題や悩みを気軽に相談できる関係性を構築することをさらに進めていき、職場の同僚性をさらに高め、授業改善につなげていく。教職員全員を対象とする OJT 研修は、下記の内容を職員会議後に実施し、また週に一度、新規採用 3 年目までの教員を対象とする若(わか)OJT 研修を実施し、互いに話す場を作る。今年度も滋賀大学教職大学院の今井弘樹教授に数回にわたる指導助言を受け、成果と課題を探りながら進めた。

3. 事業の概要

(1) OJT 研修 対象：全教職員、職員会議後に実施

月	研修内容	研修形態
4	○生徒指導について 講師 生徒指導主事	ロールプレイング
5	○教室掲示、ICT について 講師 メンターリーダー	グループワーク
6	○学級経営、評価について 講師 メンターリーダー、教務主任	グループワーク
10	○学校徴収金について 講師 事務職員	講義
1	○道徳教育について 講師 道徳推進教師	グループワーク

(2) 若 OJT 研修 対象：新規採用 3 年目までの教員

毎週の取組 毎週 1 コマ(40 分)

前期：月曜 1 時間目、後期：月曜 3 校時

今年度より実施し、毎週テーマに沿って自由に話をする場を作った。前期は時間割の都合上全員集まることが少なかったが、後期は開始時間を改善し、話す時間を 40 分程度確保した。テーマは、その時期に沿った内容や仕事の優先順位、生徒との関わり方、保護者対応等が内容となった。成功談や失敗談を互いに話したり、分からないところを聞いて解決しようとしたりして、少しでもたくさん話をする場をつくることができた。職員室では話



お互いの気づきをホワイトボードで整理

せないが、この研修を通して一人で抱えず、共有することで前向きに仕事に取り組もうとする場面も多く見られた。

(3) 今年度の研究の成果

OJT は、同僚との日々の会話でも行われたが、日々の生徒指導や事務仕事等がたいへん多く、時間を作ってゆっくりと話をする時間が少なかった。しかしながら、今年度より若 OJT を時間割の一コマとして位置づけることで、毎週 40 分間は自由に話をする場を作り、そこで、若手教員の悩みや考えを共有することができたのは大きな成果であった。

○職員アンケートの結果 (※「強く思う」, 「思う」の割合) 対象：5 年目までの教員 15 名

アンケート項目	令和 4 年度
①OJT 研修(若 OJT 含)を受けて良かったと思う。	100%
②OJT 研修を受けた後、働くことへの意識が変わった。	93.3%
③OJT 研修は時間を作って行うことが必要だと思う。	100%

○職員の感想 (自由記述)

<OJT 研修を受講して>

・各担任の教室掲示を学ぶ研修では、自分の教室掲示について見直す良い機会となりました。研修後こまめに教室掲示を見直すようにしています。【職員 A】



職員会議後の OJT (事務職員による学校徴収金についての研修)

・生徒指導の研修を受けて、指導よりも先に「どうしたの?」「なんでこうなったの?」という声掛けができるように日々意識して取り組むようにしています。【職員 B】

<若 OJT 研修を受講して>

・自由に話ができる空間を作ってくださったため、ほっとできる時間でした。改めて自分の意見を伝える時間が普段の生活の中で取れないので、毎週この時間を大切にしています。【職員 C】

・初任、2 年次の教員の悩みを聞いて、自分なりの考えが思いついたときに成長を感じられます。また、自分の言動を他と比較して振り返ることができたことも良かったです。【職員 D】

4. 今後に向けて

今年度は共同研究 2 年目として、研修の時間をさらに確保し、受講者の考えや思いをホワイトボードにまとめ可視化し、それらを職員全体で共有することで、一人ひとりが働き方について振り返ることができた。同僚との日々の会話を増やすためには、研修の時間をたくさん確保することや、若 OJT 研修を継続させ「働きやすい職場」となるように、年間計画を見直していく。次年度は確実に研修する時間を確保するために、職員会議の OJT 研修は別の日に変更し、勤務時間内に余裕をもって話をする時間を確保する。若 OJT は継続するが、生徒や保護者対応の多い月曜日ではなく、週の半ばに実施し、毎時間全員が必ず参加できるように計画していく。また、メンターリーダーと常に連携を取ってその場に必要研修を行うような運営に努めていく。



週 1 回の若 OJT (意見交流の様子)

(瀬田中:渡邊 博三, 教職大学院: 今井 弘樹)

1 共同研究事業

28) 石山っ子わくわく親子で畑体験隊

1. 事業名および担当者

事業名は、「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」であり、担当者は次のとおりである。

学部教員：森 太郎（代表者），與倉弘子，久保加織，石川俊之

地域ボランティア：内藤京子，石橋克也，奥田由紀

大津市石山公民館専門委員：清水琴野

2. 事業の目的

農作物の栽培や観察など実体験を重視して農と食の大切さを理解し、食の安全・安心について考えるような「食・農・環境教育」が求められている。しかし学校現場において、このニーズに対応できるプログラムの確立、対応できる教員の確保は不十分である。そこで、地域の住民と連携して、小学生の親子を対象に畑体験活動を実施し、「食・農・環境教育」の地域連携プログラムを開発する。さらに、教育学部の学生がスタッフとして主体的に参加し、教育現場において「食・農・環境教育」に対応できる人材を育成する。

3. 事業の概要

1) 活動の概要

本プロジェクトは、石山公民館・地域ボランティアスタッフ・滋賀大学教育学部の3者の共同企画である。公民館は参加者の募集業務、地域ボランティアスタッフが畑体験の具体的指導、滋賀大学教育学部教員および教育学部の学生（主として環境教育専攻）が体験活動内容の計画立案、指導を行っている。本活動は、平成14年4月から始まり、3月に石山公民館を通じて石山および南郷学区の幼稚園、小学校の児童と保護者を対象に、「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」への参加申込書を配布している。4月上旬から滋賀大学自然環境教育施設の農場にて、毎週水曜日の15時から17時まで食農体験活動を実施し、2月まで約38回の活動を行っている。

本年度は、9家族26名が参加し、新型コロナウイルス感染拡大防止の対策をとりながら実施した。滋賀大学自然環境教育施設の農場での活動に加え、日常の管理、農場の収穫物を使った食体験活動や蚕の飼育など自宅での活動の様子について、コミュニケーションアプリLINEを用いて交流を行った。

2) 本年度の活動内容

本年度の月ごとの実施内容を以下に示す。

実施月	主な活動内容
4月	開始式、自己紹介、農場見学、堆肥散布、野菜・花の播種（トウモロコシ、キュウリ、エダマメ、ラッカセイ、オクラ、ヒマワリなど）、野菜の観察・スケッチ、タケノコ掘り
5月	夏野菜（4月に播種した作物、トマト、ナス、トウガラシ類など）の定植・管理（支柱立て、誘引、わき芽取り）、ジャガイモ土寄せ、稲のモミ消毒・播種
6月	タマネギ収穫、サツマイモ挿苗、梅の収穫・梅ジュース・梅干し作り、蚕の飼育を開始、ジャガイモ収穫、夏野菜の管理、キュウリ・トマト収穫・試食、田植え、ジャガイモ試食

7月	七夕飾り, 田んぼの生き物 (ミジンコ, カブトエビなど) 観察, 夏野菜の管理・収穫・試食 (トウモロコシ, トマト, ピーマン, オクラ, エダマメなど), 焼きトウモロコシ
8月	夏休みであるが, 当番制で畑の管理, 水やりを実施
9月	秋冬野菜 (ハクサイ, ブロッコリー, キャベツ, ネギ, ニンジン, ダイコン, ミズナ, ホウレンソウ, ビーツ, カブなど) の播種
10月	秋冬野菜苗の定植, 秋冬野菜の間引き・草取り, オクラ, モロヘイヤなどの収穫, 稲刈り・稲架がけ・脱穀, サツマイモ掘り, 梅ジュース試飲
11月	チューリップなどの球根植え, 干し柿作り, タマネギ定植, 秋冬野菜の間引き・草取り・収穫, リース作り
12月	干し柿試食, 焼き芋, 餅つき, しめ縄作り, 秋冬野菜収穫, チューリップの埋め込み, マリーゴールド染め
1月	秋冬野菜収穫, 七草粥・豚汁作り・試食, スナックエンドウ定植, 紙漉き
2月	秋冬野菜収穫, 紙漉き, 米・梅干し試食
3月	秋冬野菜収穫, 繭で雛人形づくり, 漉いた紙で修了証づくり, ジャガイモ埋め, 閉校式

昨年, 一昨年と新型コロナウイルスの感染拡大により, 自然環境教育施設の農場に集まって活動することができない時期があったが, 本年度は, 年間を通して農場で活動することができた (図1)。また, 新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から, 農場での食体験活動を控えてきたが, 本年度は対策を講じながら可能な限り実施することができた。農場での活動が制限されていた時に行ったコミュニケーションアプリを活用した交流を本年度も行い, 家庭などの農場以外の場での活動についての交流を活発に行うことができた (図2)。今後, 体験型の社会教育活動では, 実体験に加えてオンラインでもコミュニケーションを行うことで参加者同士の深い繋がりや高い教育効果が期待されると考える。



図1. 田植え (左) と芋掘り (右) の様子



図2. コミュニケーションアプリを用いた蚕の飼育の交流

4. 今後に向けて

本事業は2002年にスタートし, 大学・地域・家庭が連携して, 本年度まで21年間継続して実施することができている。本事業は貴重な「食・農・環境教育」を行う場であり, 今後も地域・家庭と連携して実施していきたいと考えている。また, 例年多くの学生が主体的に本活動に参加しており (本年度は9名), 将来教育現場で「食・農・環境教育」の体験活動をリードできる人材育成の場としての役割も担っている。今後も, 地域の子供への教育, 学生への教育の両面から, 新しい活動プログラムの開発と実践を行っていきたい。

(森 太郎)

1 共同研究事業

29) 地域の在来野菜の栽培を通した総合的な学習の時間のプログラム開発

1. 事業名および担当者

事業名は、「地域の在来野菜の栽培を通した総合的な学習の時間のプログラム開発」であり、担当者は次のとおりである。

学部教員：森 太郎（代表者）

甲南第二小学校：池田修一（校長），菰田智恵（教務主任），深田航希（教諭）

2. 事業の目的

子供の「生きる力」の育成のための体験活動の充実，伝統と文化の尊重の観点から，在来野菜を教材とした栽培学習の充実が求められている。このような学習は，小学校の総合的な学習の時間で行われることが多い。しかし，子供たちが在来野菜を栽培するという活動だけに終わっていることが多く，体験活動を様々な学びに繋げる授業づくりが必要であると考え。本研究では，在来野菜の栽培を通した総合的な学習の時間の学習において，①振り返りによる学びの充実，②遠隔交流を取り入れた学習による学びの広がり観点から学習プログラムを開発する。

3. 事業の概要

① 振り返りによる学びの充実

探究的な学習の過程では，体験したことや収集した情報を言語化することが，自らの学びを意味付けたり価値付けたりして自己変容を自覚し，次の学びへと向かうために大切だとされている。このことから，体験活動だけで終わらず，体験活動で得られた感情や知識を「振り返る」活動が必要であると考え。本研究では，栽培活動を核とした総合的な学習の時間において，体験活動の終了後に振り返り，表現する活動（振り返り活動）を行い，その効果を児童と教師の観点から考察した。

第三学年（18名）において，地域の在来野菜を題材とした総合的な学習の時間に，体験活動の振り返り活動を取り入れた。授業の最後に各自で振り返り，4色の付箋紙に嬉しかったこと（本時の正の感情），大変だったこと（本時の負の感情），次やりたいこと（今後に向けた正の感情），心配なこと・不安なこと（今後に向けた負の感情）について文章で表現させた。付箋紙を観点毎に画用紙に貼り，クラス全体で共有した。1月に児童への選択・自由記述式の質問紙調査，担任へのインタビュー調査を行った。

質問紙調査から，多くの児童が4つの観点をういた付箋紙を使った振り返りを行うことを肯定的に捉えていた。その理由として，「色ごと，観点別に分けるから分かりやすい」「みんなの考えが知れて良かった」などが挙げられた。また，ほとんどの児童が付箋紙に振り返りを書くことで体験を通して分かったこと，疑問に感じたことを整理することができたと感じていた。さらに，ほとんどの児童が観点別に付箋紙を1枚の画用紙に貼って共有することで，友達の思いを知ることができたと感じていた。これらより，本研究での振り返り活動は，児童にとって考えを整理すること・共有することに役立つことが考えられた。探究的な学習では課題を発見し，解決策を考えることが重要であるが，小学校第三学年の発達段階では自分の力で考えることが難しい児童も多い。本研究のような振り返り活動を行うことで，思いを整理する，友達の思いから考えることができ，自らの学びを自覚化したり，視野を広げたりして，新しい課題や気づきに出会うことができると考える。また，担任へのインタビュー調査において，「次

やりたいこと」「心配なこと・不安なこと」の2つの観点は次時の授業構想を行う上で役立つと述べられた。これらの観点に書かれた言葉は児童が抱えている課題を示すため、この課題を次の活動の構成に取り入れることで児童主体、興味・関心に沿った活動を行うことができると考えられる。これは、児童が課題を自分ごととして捉え活動に臨むことを促し、探究的な学びの充実に寄与すると示唆される。

② 遠隔交流を取り入れた学習による学びの広がり

総合的な学習の時間では、多様な他者と協働することの重要性を実感しながら理解することが求められている。近年、オンラインツールが普及し、学校同士で学習の成果について発表し合う交流が見られはじめた。このような遠隔交流をより充実させるためには、「知」と「体験」を共有することが重要であると考えられる。栽培学習では、学習の成果として得られる収穫物を交流に用いることで、このような共有が促進され、学習に対する意欲が高まることが考えられる。そこで本研究では、総合的な学習の時間における栽培学習で、収穫物の交流を取り入れた遠隔学習を考案・実践・評価した。

地域の在来野菜を題材とした総合的な学習の時間において、共に地域の在来作物の栽培学習を行っているA小学校（第三学年18名）とB小学校（第三学年11名）との遠隔交流を行った。7月にこれまでの学習内容についてオンライン発表会、10月および12月に、栽培した在来作物を送り合う活動を行った。3月に1年間の学習についてオンライン発表会を行う予定である。A小学校での遠隔交流の学習効果を授業参観、授業内で児童が作成した活動を振り返るカレンダー（10月作成）、遠隔交流に関する選択・自由記述式の質問紙調査（1月実施）、担任教師へのインタビュー調査（1月実施）から評価した。

オンライン発表会: A小学校は在来作物の栽培について、B小学校は在来作物の歴史や特性について発表した。振り返りのカレンダーからは、「杉谷野菜を教えられてよかった」という記述が見られた。また、質問紙調査からは、B小学校の発表を見て良かった・参考にしたいと肯定的に答える児童が多かった。さらに発表会を通して、「B小学校の人が頑張っているから自分も頑張らなくちゃと思った」と学習に対する意欲が向上した記述が見られた。インタビュー調査で担任教師は、顔を合わせての交流を行ったことで、児童は知り合いが増えたことに喜びを感じていると述べていた。

在来作物を送り合う活動: A小学校の児童は、自分たちで育てた在来作物の食体験を行い、その良さを知ることによって在来作物を伝えたいという思いが生まれ、在来作物をB小学校に送った。そして、B小学校からお礼に送られてきた在来作物の食体験活動を行った。振り返りのカレンダーからは、「在来作物をあげられてうれしかった」という記述が見られた。質問紙調査から、年間を通じた交流に対して全児童が肯定的に捉えており、その中でも野菜を送り合う活動に対して、「在来作物を食べてもらってうれしかった」「B小学校が作った在来作物のおいしさを知れた」という記述が見られた。インタビュー調査で担任教師は、野菜を送り合うことで、それぞれの地域への愛着につながることを述べていた。

また質問紙調査（今後の交流について）から、「B小学校が育てている在来作物のことをもっと知りたい」「ズームでまた伝え合いたい」「一緒に野菜を育ててアドバイスを言い合いたい」というようなB小学校との交流や協働による学習意欲も見られた。

以上の結果より、本研究で実施したオンライン発表会と在来作物を送り合う交流活動は、学習内容や視野の広がりとともに学習意欲の向上に対して有効であったと考えられる。このことから、収穫物の交流のような「知」と「体験」の共有は、協働的な学びの充実の一助となることが示唆される。

4. 今後に向けて

地域の在来野菜の栽培学習プログラムにおいて、振り返りと遠隔交流の観点から学習プログラムを考案・実践・評価した。本事業の成果をもとに、改善した学習プログラムを考案して実践していきたい。

（森 太郎）

1 共同研究事業

30) 情報活用の実践力を基盤とした中学校社会科の思考・判断・表現力の育成

1. 事業名および担当者

事業名は、「情報活用の実践力を基盤とした中学校社会科の思考・判断・表現力の育成」である。担当者は、教育学部の岸本実と守山市教育研究所研究員折木公美である。

2. 事業の目的

平成 29 年告示の学習指導要領では、すべての教科の基盤としての情報活用能力と社会科で育成すべき「公民としての資質・能力」が整理された。本研究では、特に情報活用能力の中の情報活用の実践力を基盤として、社会科の思考・判断・表現の目標である社会について「考察・構想する力」「考察・構想したことを説明・議論する力」を、どのような単元・授業で育成することができるかを明らかにする。

3. 事業の概要

小林高章・田中章仁「児童の情報活用の実践力を高める授業づくりのあり方ー蓄積した振り返りシートの分析を通してー」滋賀県総合教育センター「平成 30 年度(2018 年度) 研究員派遣による学校支援に関する研究」では、情報活用の実践力育成の観点として、「集める」「まとめる」「つたえる」の3つの観点到焦点化し、「振り返りシート」を活用することにより、児童の情報活用の実践力育成する授業を提案し、「児童の情報活用の実践力育成ガイドマップ」を作成している。また、辻庸介・村田俊宏「小・中学校における児童生徒の情報活用能力を育成する授業づくりのあり方ー児童生徒が ICT を適切に活用する学習活動の充実を図る校内研修を通してー」滋賀県総合教育センター「令和 2 年度(2020 年度) ICT 活用授業づくりプロジェクト研究」では、「授業プランシート」を用いて、ICT 活用の3つの学習場面（一斉学習・個別学習・協働学習）と情報活用の実践力育成の三つの観点「集める」「まとめる」「伝える」を組み合わせて、児童生徒が ICT を適切に活用する学習活動を取り入れた授業を構想し、「授業振り返りシート」を用いて指導者が授業の検証を行えるようにした。これらの研究を通して、教師は、情報活用の実践力育成を「集める」「まとめる」「伝える」の3つの観点到焦点化することにより ICT 活用についての共通理解・共通実践を行えることを明らかにした。そこで、本研究においてもこの3つの観点をまず手掛かりに、中学校の社会科の授業を構想することとした。

また、文部科学省「次世代の教育情報化推進事業（情報教育の推進等に関する調査研究）成果報告書」（2019）では、思考・判断・表現の観点到位置付けられる目標として次の4つの情報活用実践力を整理している。すなわち、①必要な情報を収集、整理、分析、表現する力、②受け手の状況を踏まえて発信する力、③新たな意味や価値を創造する力、④自らの情報活用を評価・改善する力である。そこで、本研究においてもこれら4つの目標を、中学校社会科で追求すべき目標と関連付けながら達成するような授業をデザインした。

例えば、中学校 2 年歴史的分野「南蛮文化と現代のつながりを考えよう」の授業では、「南蛮人渡来図屏風」から当時の南蛮貿易についてのイメージを持ったうえで、この時期の南蛮貿易により日本に伝わったものをまず調べた。さらに調べてでてきたものについて、「聞いている人がへーと思うようなエピソードを調べる」という学習課題に生徒は取り組んだ。この課題設定によって、生徒は、南蛮貿易で

伝わった文化や物に関する情報を単に収集するだけでなく、受け手の状況を踏まえて発信できるように情報を収集することが求められた。また、相手にそれを伝える中で、今も日本にある文化やものの中に新しい意味や価値や見出した。さらに、受け手の反応をふまえて、自らの情報活用について自己評価を行う姿が見られた。そこで、この授業から、中学社会では生徒に対して、情報を「集める」という観点を一歩進めて、情報の意味や価値を「味わって集める」という観点が設定できるのではないかと考えた。

また、中学校3年公民的分野「若者の投票率向上の手立てを考えよう」という授業では、若者の投票率に関係しそうなポイントとして、投票所、選挙公報、有権者の意識の3点から、現状と課題を分析し、その結果をまとめることで、若者の投票率を向上させる政策を構想するという学習がデザインされた。ここでは、3点についての分析結果を整理することが、自分の考える政策について選択・判断するという目的意識をもって取り組まれるように仕組みされた。そこで、この授業から、中学社会では生徒に対して、情報を「まとめる」というだけでなく、社会に見られる課題の解決に向けて、政策を選択・判断するという目的を意識して情報を整理・分析すること、すなわち、「まとめて、決める」という観点が設定できるのではないかと考えた。

さらに、中学校3年公民的分野「道路拡張計画について考えよう」の授業では、生徒は、道路拡張計画について議論する住民会議に、賛成派と反対派の立場で参加することが求められる。その会議では、教師があらかじめスライドにまとめて提示しておいた関連資料を活用して、賛成または反対の主張を行い、相手の主張に反論したり、相手からの反論に回答や再反論したりする議論が展開される。ここでは、自分の選択・判断した考えを主張するだけでなく、相手からの反論を受けて、自らの主張を振り返り、弱いところや課題に気づき、その課題を克服するように主張を再構築する姿が見られた。すなわち、中学社会では生徒に対して、単に「伝える」という観点から一歩進めて、「伝え合い、振り返る」という観点の設定が可能であると考えた。

以上より、中学校社会科において情報活用実践力を育成する観点として、「味わって集める」「まとめて決める」「伝え合い、振り返る」という3点が設定できるのではないかと考えられる。小学校高学年においても、一定程度この観点は設定可能ではないかと考えられるので、本研究の成果として次の表をまとめとしておきたい。これらの観点を共通理解・共通実践を行うことにより、上記の4つの情報活用実践力を育成する授業実践を学校で推進することができると考える。

なお、授業実践の詳細な記録や、その実践を通して社会科の学習指導要領の目標と情報活用実践力との関連についても本研究では考察したが、本概要では紙幅の都合もあり割愛する。

児童生徒の情報活用実践力を育成する観点

小学校中学年	高学年	中学校
集める	→	味わって集める
まとめる	→	まとめて決める
伝える	→	伝え合い、振り返る

4. 今後に向けて

中学校においては、協働学習におけるICT活用が課題として残されている。授業のデザイン自体が学習者を主体としたものへ転換していくことと協働的な学習でICT活用を進めていくことは、同時に進めなければ、現場は変わらないと考えられるが、ICTの協働的な活用を進めることが一つの弾みとなって、授業デザインが転換させていく方向を今後模索していきたい。(岸本 実)

1 共同研究事業

31) 地域にねざした学校カリキュラムの開発

1. 事業名および担当者

事業名は、「地域にねざした学校カリキュラムの開発」である。担当者は、教育学部の岸本実と甲賀市立伴谷小学校教諭藤井沙季および校長中嶋政二である。

2. 事業の目的

本研究の目的は、甲賀市立伴谷小学校にける地域にねざした学校カリキュラムの開発およびそのための基礎研究を行うことを目的としている。伴谷小学校の学区には、①春日北遺跡、春日北窯跡（遺跡から10世紀後半の緑釉陶器発見）、②伴中山城跡、下山城跡、伴屋敷城跡などがあり、鎌倉時代初期から江戸時代の惣村の様子を伝える「山中文書」がある。惣村以来の自治の伝統が影響しているかいないかは確かなことは言えないが、明治初期に現在の地に伴谷小学校を設立する際にも、村と村との話し合いがあり、現在のPTA会長の決め方にも独自のルールがあると言われている。

こうした話し合いの文化を持つ地域を基盤としているが、小学校の学校文化においては必ずしも学級会での話し合いの実践は継承されず、学級会の実践を自信をもって取り組める教師は、初任期の若手教員だけでなく、教職経験の中堅層においても少なくなっているのが現状である。また、近隣の工業団地の整備に伴って、外国にルーツをもつ児童の割合も、1割を越えていて、特別なニーズを持つ児童も全国的に増加傾向の中、ダイバーシティマネジメントの視点からも、話し合いの学級文化を構築するカリキュラムの開発が課題となっていると考えられる。

そこで、本研究では、学校においてそうしたカリキュラムを開発し、実施するための基礎研究として、教師の力量とエージェンシーを高めるため、学級会実践を伴うOJT研修の在り方を考察することを目的とした。

3. 事業の概要

(1) 学級会実践を伴うグループOJTの必要性

学級会の指導に苦手意識を持つ教師に、学級会の価値の理解と指導技術を獲得させるため、体系的な研修を計画的に実施する取組や、教師の成長をサポートする継続的なメンタリングの取組が行われている。若手教員だけでなく、中堅教員も含めて、学級会の実践知を蓄積できていない現状においては、多くの教師を対象とする研修が必要となるため、デジタルコンテンツも含めて研修のための教材を準備し、計画的に学ぶという取組は、有効である。しかしながら、このような研修では、学級会の進め方の大筋の理解は得られるが、事前に子どもたちの声を集約して話し合いの議題を設定し、事後的に話し合ったことが実践できているかを振り返らせることや、話し合い活動の場面を活性化するための具体的な指導や支援の技術を獲得しきることができていないことが報告されている。メンターとなる教師が若手の教師にじっくり寄り添って、学級会の指導に関してのリフレクションを行い、職能開発を進める取組は、このような課題を克服する方法であるが、この方法で職能開発できる教師の数は限定的であり、教師全体の指導力の向上には不十分である。

そこで、これらの取組の成果を継承しつつ、中堅の教師も若手の教師もキャリアステージにふさわし

い学級会の実践知を獲得できるような学級会実践を伴ったグループ OJT (G-OJT) の取組を計画することで、質的にも量的にも効果的な研修を計画できるのではないかと考えた。

(2) 学級会実践を伴うグループ OJT の基本的な流れ

学級会実践を伴うグループ OJT の基本的な流れは次のとおりである。ここでは教職経験が浅く学級会の実践知の蓄積がない若手教員と、教職経験は中堅層であるが、これまで着任した学校では学級会の実践が位置付けられていなかったり、モデルとなる学級会のエキスパート教員との出会いがなかったりしたために、キャリアに応じた実践知の蓄積ができていなかった中堅層の教師の2つのタイプに焦点を当てたグループ OJT 研修を構想した。

	若手教員	学級会の実践知を蓄積できていない中堅教員
G-OJT①	学級開きの中での学級会オリエンテーションについて	
Phase1 児童への学級会オリエンテーション		
児童への学級会入門	エキスパート教員が若手教員の学級の児童に学級会入門の授業を実施	左の実践を参与観察による学びを生かして、自学級の児童を指導
Phase2 学級会実践のスタート		
事前学習	エキスパート教員と若手教員がメンター・メンティーとなり論点整理や司会への指導など事前学習	左の進め方を参考に自学級での論点整理や司会への指導など事前学習
学級会1	エキスパート教員が若手教員の学級で学級会実践を実施	中堅教員が自学級で学級会実践を実施。エキスパート教員が参与観察・リフレクション
事後学習	エキスパート教員と若手教員がメンター・メンティーとなり事後学習	リフレクションをふまえて、中堅教員が事後学習
G-OJT②	学級会の実践をふまえた G-OJT の実施	
Phase3 学級会実践の展開		
事前学習	上の進め方を参考に自学級での論点整理や司会への指導など事前学習	上の進め方を参考に自学級での論点整理や司会への指導など事前学習
学級会1	若手教員が自学級で学級会実践を実施。エキスパート教員が参与観察・リフレクション	自学級で学級会実践を実施。若手教員が参与観察・リフレクションの中で、中堅として若手教員にアドバイスができるようになる。
事後学習	リフレクションをふまえて、若手教員が事後学習	リフレクションをふまえて、中堅教員が事後学習
G-OJT	中堅教員がメンター役となり、G-OJT を推進	

4. 今後に向けて

今年度は、2学期からのスタートであり、上記の phase2 と phase3 を実践し、G-OJT も最後に1回のみ実施した。詳細は割愛するが、それだけでも教師の意識は向上し、学級の児童の話し合い活動も発展した。そこで、来年度は1学期から計画的に実践し、より組織的に G-OJT を年間計画に組み込むことにより、その効果がより確実により広く現れるようにしていきたい。

(岸本 実)

1 共同研究事業

32) 小学校教員の指導力向上を図る校内研究・校内研修

1. 事業名および担当者

事業名は、「小学校教員の指導力向上を図る校内研究・校内研修」である。担当者は、教育学部の岸本実と栗東市立葉山小学校教諭柴原茜である。

2. 事業の目的

教育課題が複雑化した今日、教師は、学校の同僚とつながり、協働して授業実践を作り出しながら、それを共に省察していくことを通して、自らの専門性を高めていくことが求められている。本研究では、小学校においてそうした協働の取組と省察を通して、教師としての指導力を向上させることができるような校内研究・校内研修の在り方を明らかにすることを目的としている。

校内研究のテーマは、「『できる！わかる！』が実感できる学びを積み重ね、自信をもって学習に向かえる子どもの育成～日常の取り組みを工夫して～」である。①子どもの学習意欲の喚起、②基礎学力の定着、③思考・判断・表現の力の向上という3つの視点からの授業の手立てを各学年で創意工夫するとともに、課題解決型 OJT の取組により、その成果を個々の教師の日常の教育実践につなげていく。教師の指導力向上についてはポートフォリオによる自己評価により検証していく。

3. 事業の概要

(1) 校内研究と課題解決 OJT グループのデュアル・システムによる組織改善

ジョン・P・コッター著・村井章子訳(2015)『実行する組織』（ダイヤモンド社）では、階層型組織とネットワーク型組織のデュアル・システムにより組織変革を加速する次の8つのアクセラレータが示されている。①危機感を高める、②コア・グループを作る、③ビジョンを掲げ、イニシアチブを決める、④志願者を増やす、⑤障害物を取り除く、⑥早めに成果を上げて祝う、⑦加速を維持する、⑧変革を体質化する。

柴原茜は2022年度校内研主任として、学校の校内研究の組織と課題解決型 OJT グループのデュアル・システムにより、校内研究の成果を日常の教育実践に活かし、教師の授業実践力を向上させることを試みた。校内研の組織は、完全な階層型組織ではないが、校長・教頭・教務主任・校内研主任・学年主任・学級担任という階層性により動いている面もある。OJT グループも、学年単位で研究授業を提案する校内研究と連動させるため学年の教師集団が基礎となっているが、学年の児童集団が似た課題を抱え、課題解決の方向性において一定共通のビジョンを掲げた2つの学年をつないで3グループと特別支援学級のグループを加えた4グループで組織したことで、ネットワーク型の要素も帯びた構成となっている。そして、コア・グループは、4つのグループリーダーと校内研主任などから構成される研究推進委員会である。校内研究は年度計画に沿って全体会3回、研修会1回、研究授業を7本実施した、G-OJT の時間は、隔週金曜日の放課後15分間として設定したが、学年で研究授業の打ち合わせを行う回もあり、G-OJT として実施したのは交流会も含めて年間で13回であった。研究推進委員会は6回実施した。

(2) 組織改善の3段階

年間の取組を振り返ると、およそ次の3段階で組織改善が進んだと言える。取組の第1段階は、昨年

度3月に「今、めざすべき子ども像は何なのか」、改めて子どもの実態から見つめ直した総括を受けて、子どもや学校の実態についての危機意識を共有することから始まった。そして、これをふまえて、各学年で目指す子どもの姿を明確にし、その実現のために次の3つの視点を設けた。①意欲的に学習に取り組めるようにする工夫、②学びを定着できるようにする工夫、③自分の思いや考えを表現できるようにする工夫。こうして、1学期は2回の全体会、3回の研究推進委員会、2本の研究授業、4回のG-OJTの取組が進められた。

取組を第2段階へと前進させる契機となったのは、研究推進委員会における1学期の総括である。7月の教師アンケートでは、「子ども達が、『できた』、『分かった』、『考えられた』と思えるよう、日々の授業改善に努めたか」「校内研究（研究授業や課題解決型OJT、一人一授業など）での学びを、自分自身の指導力向上のために生かしているか」に対しては、9割以上の教師が肯定的に回答したが、「校内研究（研究授業や課題解決型OJT）での学びを、学年での共通理解、共通実践として取り組んでいるか」に対しては4分の3に留まっていた。その原因として考えられたのは、目指す子ども像と3つの視点に対して、教師が個々ばらばらに工夫はおこなっているが、どのような手立てを共通実践として焦点化するのか、また、その手立ての成果をどのような指標によって看取るのかが明確でなかったことである。そこで、研究推進委員会との意見交換やサポートを受けながら、各グループ、各学年において共通実践を行う手立てとその成果を看取る指標を設定する第2段階の取組が8月、9月において進められた。

こうして、10月から1月における5本の研究授業と7回のG-OJTが有機的なサイクルでつながる取り組みの第3段階へと進んだ。ここでは、比較的早く成果が出る工夫の成果を指標に確かめ合い、認め合うことで授業改善が加速化された。また、成果が思うように出てこない工夫に関しては、継続するか、さらに工夫を練り直すか。他学年の研究授業を生かして工夫をバージョンアップできないかを常に問うことにより、工夫の視点ごとの、手立てと指標が更新されていった。このように課題と手立てと成果を共有することで校内研究の成果を日常の授業に活かすことができるようになっていった。

（3）学年の教師集団、個の教師としての成長の事例

1年間の取組では、変革が学校全体、全員の教師へと体質化するまでには至らない面もあったが、学年レベル、個としての教師レベルでは確実に成果を確かめることができた。ここでは紙幅の都合もあり、事例として簡潔にまとめておく。

例えば、ある学年の手立ては、第2段階で設定した手立ては「プリント学習の活用」という単発的なものであったが、他学年の研究授業や日常の授業の手立てを参考に、「毎回の授業の流れを明確にする。そのためにストーリー性をもたせる」など、構造化されて示すように発展した。また、「自分の思いや意見を書き出せる子、自信をもって話したり、失敗を恐れず挑戦したりできる子」を目標として設定した学年の初任校2年目の教師は、「書く」ことの指導の工夫を積み重ね、子どもたちのノートの記述にも確実な成果を看取れるまで、学年の教師との相談や研究主任のメンタリングを受けながら継続した。そして子どもたちの成長と共に自己の教師としての成長を実感していた。

4. 今後に向けて

今年度進んだ組織改善を、学校全体、教師全体へと広げ、変革を学校の体質や学校文化として定着させていくことが次年度の課題である。そのためには特に、今年度見られた障害をどのように克服するか。変革への志願者をどのように増やしていくかという点で、今年度の取組の成果と課題を総括して次につなげていきたい。

（岸本 実）

1 共同研究事業

33) 児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する小学校外国語科における言語活動の充実

1. 事業名および担当者

事業名：「児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する小学校外国語科における言語活動の充実－ICT の効果的な活用を踏まえた、バックワード・デザインによる授業づくり－」

担当者：	中川 絵美（滋賀県総合教育センター）	（研究立案・企画・実施・総括）
	上阪 奈麻（彦根市立佐和山小学校）	（実証授業研究）
	河添 愛（近江八幡市立八幡小学校）	（実証授業研究）
	中井やよい（滋賀県総合教育センター）	（研究支援）
	平山 美穂（滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課）	（研究支援）
	加藤 由紀（滋賀県総合教育センター）	（研究統括・支援）
	大嶋 秀樹（滋賀大学）	（研究支援）

2. 事業の目的

改訂学習指導要領の全面実施3年目を迎えた小学校英語教育の一層の充実化に向け、教科指導の専門性をもった教員による小学校外国語科の指導の充実、児童一人ひとりの外国語の個別最適な学びを生かしたICTの活用と言語活動の充実を以て、児童一人ひとりのコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成の実現を図ることを事業の目的とする。

具体的には、本事業では、バックワード・デザインにより単元を構想し、ICTを効果的に活用することで、児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができる言語活動の充実を図り、児童一人ひとりのコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成を目指す。

3. 事業の概要

本事業では、年間3回の研究推進委員会を実施し、本事業に係る研究の推進計画の立案と実施、及び検証、実証授業研究の実施計画の立案と検証を進め、研究成果を研究論文（滋賀県総合教育センター）にまとめ、滋賀県総合教育センターで開催の研究発表会で発表と交流を進めた。研究論文、及び研究発表会の内容は、引き続き、滋賀県総合教育センターのホームページや今後開催の各研修会を通じて、研究成果としての発信と交流を進めていくこととしている。

実証授業研究では、授業研究、児童・指導者を対象とした質問紙調査を取り上げて実施した。実施は、夏前の時期と秋初めの時期の二つの期間にわたって行い、実証授業を通じた研究を進めていった。実証授業研究は、「話すこと（やり取り）」（第5学年）の研究と「話すこと（発表）」（第6学年）の研究として、彦根市立佐和山小学校、近江八幡市立八幡小学校をそれぞれの研究の基幹研究校に実施した。

本事業の研究からは、

-
- (1) 指導者が、バックワード・デザインによる単元構想を行い、ICT を効果的に活用することで、児童が、自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する言語活動の充実が図られた。
 - (2) 「CAN-DO リスト」やモデル動画付きルーブリックを活用することで、児童が「何ができるようになるか」を意識して主体的に学ぶことにつながり、児童一人ひとりのコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力が育成された。
 - (3) 「英語マスターシート」を活用することで、児童が英語に慣れ親しむ機会の増加につながり、主体的な学びを促進することができた。

ことをそれぞれ明らかにすることができた。

具体的な研究の進捗については、次のとおりである。

- (1) 指導者が、「新滋賀県モデル『CAN-DO リスト』」の学習到達目標につながる単元の目標を定め、目的や場面、状況等に応じた言語活動を設定し、バックワード・デザインによる単元構想を行うことに取り組んでいった。
- (2) 児童が、ICT の効果的な活用を通して、自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する姿を目指して研究をすすめた。
- (3) 児童が家庭学習等で学習活動を選択したり考えたりして外国語に慣れ親しむことができるよう「英語マスターシート」を作成し、活用を図り、学校の授業を通じた学びと家庭での学びをつなげる学びの往還の機会を設け、児童の主体的な学びの深化のための学校と家庭の学びの相互連携を進めていった。

その結果、児童の言語活動が一層充実し、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力が醸成されていった。

4. 今後に向けて

本事業で取り組んできた研究からは、次のことが課題として明らかになった。

- (1) 指導者が設定した単元の中心となる言語活動に向けての各時間の言語活動で、教科書や学習者用デジタル教科書の内容をどのように効果的に結び付けて指導していくのか検討する必要がある。
- (2) 1人1台端末を家庭学習でどう活用していくか、ICT のさらなる活用について検討が必要である。

今後は、課題についてもさらに検証と検討を進め、児童のより良い、豊かで充実した質の高い学びの実現のためにも取り組んでいきたい。

(中川 絵美・上阪 奈麻・河添 愛・中井やよい・平山 美穂・加藤 由紀・大嶋 秀樹)

2 石山プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は、石山プロジェクトであり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：今井弘樹（代表者） 大橋宏星

大津市立石山小学校：藤井 都（校長）

大津市立石山幼稚園：赤井 加代子（園長）

2. 事業の目的

子供たちの多様化した課題を抱える今日の学校状況から、新規採用教員といえども、即戦力として実践的指導力や教員としての専門性が強く求められるようになってきている。本学部では、平成17年度に「石山プロジェクト」を立ち上げ、以後大学近隣の公立小学校と公立幼稚園の協力を得て、学生を毎年、学校の教育活動に参加させる活動（スクールサポーター活動）に取り組んでいる。参加の学生は全て本人の自主参加である。この活動の目的は、学生が子供や学校の実情を体験的に知るだけでなく、具体的な場面における子供の心情の理解や教師として求められる対応の仕方など、実践的な指導力を身に付けることや、子供たちとふれあう経験を積む中で、定期的に熟練の教職経験者に相談し共に語り合うことで、教師としての対応力を高めることをねらいとしている。

3. 事業の概要

本事業に対して、当該校園のみならず省察会講師をお願いしている退職校園長からの評価は高い。その理由は、サポーターとして本事業に参加している学生の意識の高さと教師を目指している純粋な姿に、これからの教育を担う若者への期待を強く感じてもらっているからである。一昨年度はコロナ感染拡大のため中止したが、昨年度は秋学期から実施し幼9名、小16名の学生が参加、今年度は春学期幼3名小18名、秋学期幼8名、小23名（春学期よりの継続参加6名含む）が参加となった。

[事業計画]

- ①春秋の学期に合わせて参加希望を募る。年間に春秋で30時間の活動を目指す。
- ②学生個々の予定を勘案して学校園と相談のうえ各自の活動日時を決める。ほぼ週1～2日。
- ③月一回の省察会 午後4時30分～5時30分 場所は大学 参加は自由
最後の報告会は、石山幼・小で実施
- ④アドバイザー 幼稚園 元公立幼稚園長 1名 小学校 退職女性校長会から毎回2～3名

4. 活動内容

- 各教科等で基礎的な内容の習熟を図る指導補助
- 個別の指導補助
- 各教科や総合的な学習の時間、遠足等の校外学習での引率補助
- 生活単元学習（特別支援学級）における指導補助
- 園児に対する日常生活の指導補助
- 発表会の練習や自由遊びにおける指導補助

5. 定例省察会の開催

毎月下旬に幼稚園と小学校の校種別に、省察会を大学で開催。

省察会では、学生が当該月の学校園でのスクールサポート活動を振り返り、やり甲斐や感じたこと、自信がついたこと、自らの成長を自覚できたこと、課題に思っていること、悩んだり、戸惑ったりしていること、子供の言動等をどう理解すればいいか分からなかったこと、指導や教育に当たっておられる先生の意図など、悩みや疑問点を出し合い互いに意見を交流した。この省察会には、退職園長、女性校長会の協力を得て、学校園での経験豊かな熟練の元校園長の先生方を外部講師として迎えた。先生方からは学生の提示した課題について明快な返答や励ましなどの指導助言を受けることで、学生自身が課題を明確にし、子供たちへの対応改善に意欲を高める機会となっている。

6. 省察会，報告会で意見交流から

【小学校／学生】

- ・会う度が変わっていく子供たちの表情や行動を目にしていけることが、一つのやりがいになりました。
- ・教師でも友達でもない立場だからできる関わりについて今後も考えて実践して生きたい。
- ・目の前の子をしっかり見て理解することを再確認できた。秋学期も活動できるのが楽しみです。

【小学校／講師】

- ・私たちの頃は教育実習まで子供たちと触れ合う機会がなかったので、石山PJの取組みはとても羨ましく思いました。学生の皆さんには、教室の中に風を運ぶ存在でいてほしいです。子供たちに意欲をもたせるよう、先生と子供たちの関係から学んだ事を今後生かして下さい。
- ・どの学生さんもなんと素直で一生懸命で志が高いことだと感じました。これから先に色々困難があっても必ずチームで乗り越えていき、一人で抱えこんで苦しんで身体やメンタルが壊れないようにという思いで話をしました。

【幼稚園／学生】

- ・年齢によって保育者の役割や立ち位置、必要な言葉がけも大きく変わることが分かり、子供の発達を学ぶとともに各年齢における保育者の姿についても学べたことが多かったです。
- ・副免許の幼稚園実習の前に幼稚園の雰囲気を知っておきたいという目的で石山プロジェクトに参加させていただいたのですが、実際それ以上に多くの学びがあり大変良い機会になりました。

【幼稚園／講師】

- ・学生の皆さんの気付きや子供を見る視点にいつも感心しています。環境構成や発達に応じた関りなど、子供たち一人一人の心に寄り添う教育を大切にして頑張ってもらいたいと思います。

(文責 大橋宏星, 今井弘樹)



石山小学校参加者打合せ(2022. 10. 7)



石山幼稚園報告会(2022. 9. 29)

3 出前講義

この出前講義は、滋賀県内の学校等における研修や講演会に教育学部教員を講師として派遣する制度である。既に、教育学部教員は個別に県や市町教育委員会や各学校の依頼を受け、研修講師等の役割を遂行している。しかし、これらのネットワークが成立していない場合や新任教員の派遣の場合に限っては、本出前講義は有効なものであろう。

令和4年度の出前講義については、こども園1園(延べ3園)、小学校2校(延べ3校)、中学校2校、高等学校3校、教育委員会、子育て支援センターの計10件(延べ13件)の実績があった。他に県内外からいくつかの依頼があったが、日程等の関係で成立しなかったケースがある。下記が今年度実施した出前講義である。

◆ 出前講義一覧

講師	実施日	依頼機関	対象	題名
大平 雅子 教授	4月26日	学校法人光泉カトリック高等学校	生徒(高等学校)	①ストレスと上手に付き合う方法 ②良質な睡眠とは
青木 善治 教授	5月18日	米原市立米原小学校	教員(小学校)	作品をみる・つくる・楽しく鑑賞する指導のアイデア
山田 淳子 准教授	5月30日	草津市立矢倉こども園	児童・教員(幼稚園)	運動遊び～サーキットを楽しもう～
松丸 真大 教授	7月9日	東洋大学附属姫路高等学校	生徒・教員(高等学校)	方言を考える日本語のしくみ
中村 史朗 教授	8月30日	近江八幡市教育委員会	市民一般	書の美を探る
山田 淳子 准教授	9月9日	草津市立矢倉こども園	児童・教員(幼稚園)	運動遊び体験①
松田 繁樹 教授	10月5日	近江八幡市立八幡東中学校	生徒(中学校)	生理学の基礎に基づいた効果的な運動・トレーニング
渡邊 慶子 准教授	10月5日	大津市立逢坂小学校	教員 (小学校及び中学校)	校内研究会での講話
松田 繁樹 教授	10月26日	愛知県立豊丘高等学校	生徒(高等学校)	生理学の基礎に基づいた効果的な運動・トレーニング
大平 雅子 教授	11月28日	学校法人光泉カトリック中学校	生徒(中学校)	①ストレスと上手に付き合う方法 ②良質な睡眠とは
北村 拓也 准教授	11月30日	大津市立逢坂小学校	小学校教員	公開授業を兼ねての講話
蔵永 瞳 准教授	12月7日	栗東市立地域子育て支援センター	保育士・児童厚生員	他者理解のコミュニケーション心理学
山田 淳子 准教授	1月16日	草津市立矢倉こども園	児童・教員(幼稚園)	運動遊び体験②

◆ 出前講義を利用された学校園からの感想（一部抜粋）

- ・研究について、授業について、今後の方向性についてなど、大変分かりやすくお話していただきました。専門的なお話が聞けて大変有意義でした。
- ・それぞれの年齢に応じた、希望していた内容以上の講義をしていただいた。
- ・こちらのねらいに即した講義内容で、アートカードを使っての体験的学びや対話型鑑賞のワークショップ的な学びで大変効果的であった。どの教員からも好評で、各学級での実践に踏み出せる感触を得ることができた。

多くの教育関係者の方々に本出前講義を利用していただくため、出前講義一覧を本学部ホームページにアップロードしている。次がその出前講義一覧である。

【国語教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
近江国と和歌	井ノ口 史 (いのぐち ふみ)	国語教育講座 (日本古代文学)	生徒(中・高) 教員(中・高) 保護者・市民一般	古代から近世まで、それぞれの時代背景を踏まえつつ近江国に関連する和歌を紹介します。近江国(現在の滋賀県内)には、和歌に詠まれた地名が少なくありません。いかなる風景が描写されているのか、和歌を通じて近江国の魅力を再発見することをめざします。
書とその周辺	中村 史朗 (なかむらしろう)	国語教育講座 (書道)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	人はどのようにして「書之美」を自覚するようになったのでしょうか。王羲之や空海の筆跡はどこがそんなに上手いのでしょうか。生活の場において“手書き”の機会が減って、書という表現の領域は失われてしまうのでしょうか。書と周辺のさまざまな問題を取り上げます。講義と実習をあわせて実施することも可能です。
国語教育における学びの探究	長岡 由記 (ながおか ゆき)	国語教育講座 (国語教育学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特)	近年、さまざまな言語活動を取り入れた国語学習が行われています。国語の学習における学びの手応えは必ずしも得やすいものではなく、言語活動を取り入れた学習の成果と課題も明らかになりつつあります。そこで、演習を交えた講義を行い、国語教育における学びについて具体的な学習材や学習指導法を取り上げながら探究していきたいと思えます。
唐詩を読もう	二宮 美那子 (にのみや みなこ)	国語教育講座 (中国古典文学)	生徒(中・高) 教員(小・中・高) 市民一般	中国古典詩を代表するのが唐詩(唐代に作られた詩)です。唐詩には、古くから日本人に愛されてきた多くの素晴らしい作品があります。この講義では、作品の背景を丁寧に解説しながら、漢字一文字一文字にこめられた意味を大切に唐詩を読み解き、その豊かな世界をご紹介します。
方言を考える	松丸 真大 (まつまる みちお)	国語教育講座 (日本語学/方言学)	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	ひとくちに日本語といっても、その内実は人によって、または場面によって異なります。その中でも地域による言葉の違い(=方言)は多くの人が興味を持つテーマです。この講義では日本語の方言をとりあげ、なぜどのよう方言があるのかを考えていきます。この授業を通して、言葉について考えることの楽しさに気づいていただければ幸いです。

【社会教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
地理から考える物語の舞台	安藤 哲郎 (あんどう てつろう)	社会科教育講座 (地理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・特) 市民一般	説話などの古典を読むと、いくつか地名が出てきます。こういった地名と物語の内容を手がかりとして地図を作りながら考えると、物語が作られた時代の人々が物語の舞台となった場所についてどのような認識を持っていたのか分かります。地図やパネルを使いながら、地理から物語の舞台について一緒に考えてみましょう。
史料を基礎とした日本史(前近代史)	宇佐見 隆之 (うさみ たかゆき)	社会科教育講座 (日本史学/日本中世史)	児童・生徒(小6以上) 教員(小・中・高)	歴史の記述は、すべて史料に基づいて行われています。このため、記述の背景にある史料の理解なしに理解できません。史料と教科書の記述を照らし合わせながら日本前近代史への理解を深めましょう。
古代ローマ史にみる曖昧な「史実」	大清水 裕 (おおしみず ゆたか)	社会科教育講座 (西洋史/古代ローマ史)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	歴史学は、様々な史料を用いて過去の社会を再構成しようとする学問です。しかし、そこで用いる史料が互いに矛盾していたり、あるいは荒唐無稽だったりすることは少なくありません。本講義では、古代ローマ史の中から有名な事件を取り上げ、人口に膾炙している「史実」の曖昧さと、「史実」を確定しようとする歴史学の営みをご紹介します。
論理学初歩	齋藤 浩文 (さいとう ひろふみ)	社会科教育講座 (哲学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	論理学への入門として、以下の2つのいずれか、または、両方について講義します。 (1) 形式論理学の初歩について紹介しながら、論理とは何か、そして、論理的であるとはどういうことを考えます。 (2) 非形式論理学を背景として成立したクリティカル・リーディングについて、その基本の紹介と実践を目指した演習を行います。
滋賀の近代史	馬場 義弘 (ばんば よしひろ)	社会科教育講座 (政治学/歴史学)	市民一般	明治前期に滋賀県の県令(のちの県知事)を務めた松田道之(初代、明治4年11月～明治8年3月)、籠手田安定(二代、明治8年5月～明治17年7月)を中心に、近代国家の形成と滋賀県政について考えます。
景観写真の観賞と教材化	松田 隆典 (まつだ たかのり)	社会科教育講座 (人文地理学)	児童・生徒(小・中・高) 教員(小・中・高) 保護者・市民一般	WEB上に多く掲載されている景観写真の観賞の仕方について、実例をもとにわかりやすく説明するとともに、社会科や地歴科・公民科のための教材化の可能性について示します。具体的テーマとしては、視覚的にわかりにくい気候を植生写真で説明したり、国際理解のために必要な社会的コンテキストを都市景観写真などで紹介します。

題名	講師	講座	対象	内容
社会調査に触れる	宮本 結佳 (みやもと ゆか)	社会科教育講座 (社会学)	市民一般	近年、パソコンを利用する機会が増え、表計算ソフトが身近になったこともあって様々な場面でアンケート(質問紙調査)を実施する機会が増えています。本講義ではアンケートをつくる時、一体どのようなことを気をつけていけばいいのかについてご紹介します。
身近な事件や話題をもとに法・裁判の役割を考える	渡邊 暁彦 (わたなべ あきひこ)	社会科教育講座 (法律学/ 日本国憲法)	児童・生徒(小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	私たちが「裁判員」として裁判に関わる時代となりました。法や憲法、そして裁判に対する関心も高まっています。本講義では、最近の身近な事件や話題を取り上げ、実際の判決文なども活用しながら、日本国憲法や裁判についての理解を深めていきたいと考えています。

【数学教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
正多面体とその数理	篠原 雅史 (しのはら まさし)	数学教育講座 (離散幾何学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・高・特) 保護者・市民一般	正多面体はプラトンの多面体として古くから知られていて、正四面体、正六面体(立方体)、正八面体、正十二面体、正二十面体の5種類があります。実際に正多面体を作ったり、展開したり、計算したりすることを通して、正多面体の対称性やその美しさを体感してもらうことを目標とします。
無限の考え方	神 直人 (じん なおんど)	数学教育講座 (解析学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	私たちは小学校の頃から無限の考え方を利用しています。無限の考え方を利用すると多くのことが明らかになる一方で、無限のパラドックスというものも存在します。この無限の持つ二面を紹介することで算数・数学の面白さ、考えることの楽しさに気づいてもらえればよいと思います。
非線形現象の解析	鈴木 宏昌 (すずき ひろまさ)	数学教育講座 (解析学)	生徒(高) 教員(中・高)	私たちの身の回りで見られる様々な非線形現象は、しばしば数理モデル方程式で表されます。本講義では、数理生物学における生物個体群のモデルや、化学反応のモデル方程式の解析を通じて、数学と自然科学との関わり的一面を紹介します。モデル方程式にもとづいた計算機シミュレーションも紹介する予定です。
算数・数学教育の理論と実際	高澤 茂樹 (たかざわ しげき)	数学教育講座 (数学教育学)	教員(小・中)	算数・数学科の教授・学習過程について、理論的研究を教育実践にどのようにいかすかを検討する。特に、教師として子どもたちの数学的認識をどのように捉え、それを基にしてどのように指導するべきかについて考えたい。
江戸時代の教遊びから見る現代数学	長谷川 武博 (はせがわ たけひろ)	数学教育講座 (代数学)	生徒(高) 教員(中・高)	江戸時代の和算家 吉田光由(みつよし)によって書かれた和算書「塵劫記(じんこうき)」に収録されている文字遊び・数遊びに「目付字(めつけじ)」「継子立(ままこだて)」などがあります。これらの遊びを紹介し、その背後に隠れている数学を考えます。具体的にはn進法や数列などが隠れています。
数学的ジレンマを使った対話による算数・数学科授業	渡邊 慶子 (わたなべ けいこ)	数学教育講座 (数学教育学)	教員(小・中・高)	「算数・数学科の授業で先生と児童・生徒たちが如何にして対話をし、新たな知識を作り上げていくのか」について、具体的な教材(学習・指導の内容、具体的な問題)をもとに議論します。対話型授業の構造と展開を探求した上で、「話し合い」を取り入れた授業における教師の役割についても議論したいと思います。

【理科教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
細胞をつくっている物質・脂質	糸乗 前 (いとのり さき)	理科教育講座 (生化学)	生徒(中・高)	生物を形作っている細胞は脂質でおおわれた袋で、その外側には特有の成分が含まれています。その成分を調べることは、細胞にとってあるいは生物にとって重要な情報を与えてくれます。本講義では「セラミド」などの、どこかで聞いたことのある脂質を含め、色々な生き物の脂質の話とどのように調べるかなどのお話をします。
太陽の科学	大山 真満 (おおやま まさみつ)	理科教育講座 (太陽物理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特)	太陽は、宇宙に浮かぶ平凡な星の一つに過ぎない。しかし、地球に直接的に影響を与え、その姿を詳細に観測できる唯一の恒星である。この太陽に焦点をあて、最新の画像や動画も用いながら、太陽の素顔を紹介する。
コミュニケーショントレーニング	加納 圭 (かのう けい)	理科教育講座 (科学コミュニケーション)	生徒(中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	滋賀大学に通う大学生が授業に求めていること第1位(滋賀大キャリア通信:サンクス2013年1月7日号より)であった「コミュニケーション能力」の向上を目指したトレーニングプログラムです。科学の内容について「伝える・伝える・分かち合う」ができるようになります。

題名	講師	講座	対象	内容
物性物理学入門	恒川 雅典 (つねかわ まさのり)	理科教育講座 (物理学/ 物性物理学)	生徒(高) 教員(高)	「物性」といってもなじみが薄いかもかもしれませんが、実は「物性物理学」は素粒子・原子核・宇宙物理学と並ぶ分野の1つです。最新の科学技術を根底から支えている物質科学の中でも物質の成り立ちや現象などを、量子力学や統計力学などの物理的な考え方・手法の立場から研究するのが「物性物理学」です。本講義では、身近な例をあげながら「物性物理学」についてお話します。
私たちの化学	徳田 陽明 (とくだ ようめい)	理科教育講座 (無機化学/ 物理化学)	教員(小・中・高)	化学が私たちの暮らしをいかに豊かなものとしているかについて講習します。 また、小中高での学びがどのように大学に接続するのかについて酸とアルカリをテーマに説明します。準備や片付け(廃棄を含む)の簡単な化学の実験を体験して頂き、生活用品を使った実験についても紹介します。
遺伝情報とは何か?	古橋 潔 (ふるはし きよし)	理科教育講座 (生物学)	生徒(高)	生命科学は近年目覚ましい進歩を遂げていますが、DNAと遺伝子の違いはおわかりでしょうか?この講座では遺伝情報がどのようなもので、どのように使われているかについて、身近な例を挙げて、しかし最先端の技術によって得られた知見も盛り込みながら説明します。

【音楽教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
オーボエ演奏法/ 木管アンサンブル	中根 庸介 (なかね ようすけ)	音楽教育講座 (オーボエ/ 木管合奏)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	オーボエの経験者を対象に、基本的奏法を学び、練習曲集などを用いて音楽的な表現を学びます。木管を中心としたアンサンブル(木管四重奏、五重奏、ピアノと管楽の五重奏、六重奏、など)を通して、より高度な音楽作りを学びます。
楽しい音楽づくり	林 睦 (はやし むつみ)	音楽教育講座 (音楽教育)	教員(幼・小・中・高・特)	音楽づくり、創作のワークショップをします。教師向けのワークショップや講習会、児童・生徒向けの授業のデモンストレーションもします。 楽器がなくても、ピアノが弾けなくても、おもしろい音楽を作る方法があります。楽しく音楽をつくり、子どもたちが自らの表現に目覚める瞬間を一緒に体験できたらと思います。
音による表現を めぐって	若林 千春 (わかばやし ちはる)	音楽教育講座 (作曲/音楽理論)	教員(中・高・特) 保護者・市民一般	お芝居の台詞に、その場に適した演技があるように、音楽にもそれぞれ適切な表現の方向付けがあります。「ここで音楽はどんな台詞を演じているの?」という問題を、一緒に考えてみましょう。楽譜に書かれていない「とても大切なこと」を見つけたり、簡単な音楽文法のおさらいや、創作の実践などを通して、音による表現を共に深めてゆく場を体験してみましょう。
本当の「声」と出会う ～ヴォイス トレーニング～	渡邊 史 (わたなべ あや)	音楽教育講座 (声楽)	児童・生徒(小4年～・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 その他(企業社内研修、 マナー講座等)	人間の表現ツール、コミュニケーション手段として「声」は重要な役割を担っています。 みなさんの「声」の可能性を見つめなおしてみませんか? 発声ストレッチ、呼吸トレーニングを経て、身体を芯から使いながら「声」と向き合う時間です。歌に、そして朗読にも、ちょっとしたコツで生まれる大きな変化を楽しみにご参加ください。 その「声」を用いた歌唱表現まで踏み込むことも可能です。歌唱、合唱等のブラッシュアップにも、機会をご活用ください。

【美術教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
子どもの絵の見方、 描かせ方、造形遊び のすすめ方	新関 伸也 (にいげきしんや)	美術教育講座 (美術教育)	教員(幼・小・中)	子どもの絵の見方や描かせ方、また「造形遊び」の具体的な指導方法について、各学校の先生方の課題に応じながら講義や演習を行います。
入門アート ～ラクガキから アール・ブリュット まで～	藤田 昌宏 (ふじた まさひろ)	美術教育講座 (彫刻/現代美術)	児童・生徒(小4年～・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) その他(福祉関連作業所など)	ラクガキを描くことから始めます。ラクガキを見せあひっこし、ラクガキの名作を鑑賞?し、そこから見えてくる表現の楽しさ・不思議さを感じてみてください。 そこからの展開は、「アールブリュット」「速写クロッキー」「エガオ絵」「目隠し彫刻」などなど、受講して下さる顔ぶれやリクエストでアレンジします。

題名	講師	講座	対象	内容
学びが深まる 「造形遊び」 (子供の主体的な 探究活動としての 図画工作)	村田 透 (むらた とおる)	美術教育講座 (美術科教育)	児童(4～5歳児・小) 教員(幼・小)	「造形遊び」は、準備や後片付けが大変で、抵抗があると思いませんか？ 「造形遊び」で、子供は楽しく意欲的だけ、「遊びの中に学びはあるの？」と思っていませんか？「個性的だよね」「いろいろあっていいよね」で、子供の「造形遊び」への評価を思考停止にいませんか？「造形遊び」には、表現の多様性(現象)と学びの深まり(探究)があります。 現場で明日から実践できる題材体験を通して、「造形遊び」の学び・楽しさ、題材開発、指導や支援の在り方について学びます。
グラフィックデザイン の世界	世ノ一 善生 (よのいち よしお)	美術教育講座 (グラフィックデザイン)	生徒(中・高) 教員(小・中・高) 保護者・市民一般	グラフィックデザインでは、ポスターや新聞広告などの広告物、パッケージ、雑誌、書籍装丁など様々なものを対象としますが、これらの多くは大量生産されて消費されてゆきます。 しかしそのようなものだから、漫然と作られた価値の低いものという訳ではありません。ここでは図版資料を提示しながらその素晴らしさについてお話したいと思います。

【保健体育教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
①ストレスと上手に 付き合う方法 ②良質な睡眠とは	大平 雅子 (おおひら まさこ)	保健体育講座 (衛生学/健康科学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	①誰もが聞いたことがあるストレスという言葉。その言葉の本来の意味を解説しながら、ストレスと「上手に付き合う」方法について様々な視点から考えていきます。 ②エビデンスに基づいて、良質な睡眠とは一体何かを考えていきます。
生理学の基礎に 基づいた効果的な 運動・トレーニング	松田 繁樹 (まつだ しげき)	保健体育講座 (体力科学/生理学)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	運動・トレーニングを行う際には、ヒトの生理的特徴や科学的知見に基づいた合理的なトレーニングをするべきです。本講義では、運動生理学の基礎を踏まえ、効果的な運動・トレーニングについて考えていきます。
運動好きの子どもを 育てる体育の授業 づくり	山田 淳子 (やまだ じゅんこ)	保健体育講座 (体育科教育)	児童(幼・小) 教員(幼・小)	教師も子どもも運動が大好きになれる体育科の授業づくりを、実技や講義を通して学んでいただければと思います。 体育科の授業づくりのヒントとなる事柄を紹介していきます。 子ども向けにも模擬授業を行い、子どもも教師もともに学ぶ場を提供したいと思います。

【技術・情報教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
金属材料のこれから	磯西 和夫 (いそにし かずお)	技術教育講座 (金属加工学/ 粉末冶金)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	金属材料は最も多く用いられている材料の一つである。最近、既存の金属をしのぐ材料特性が求められている。 このような材料は溶解-塑性加工-切削による従来からの加工が不可能な場合が多い。その一解決法が粉末を用いた素材製造・加工・成形法である。粉末冶金法による材料開発と加工について解説する。
教育工学的手法を用いた教育環境の 改善	岩井 憲一 (いらい けんいち)	情報教育講座 (認知科学/ 教育工学)	生徒(中・高) 保護者	教育環境は、慢性的な人材・予算不足等の問題から、これまで以上に質の高い教員の採用や情報ネットワークの導入による資源の共有、および、新しい教育手法の検討が求められています。 本講座では、これまで行ってきた学習指導案の電子化や情報ネットワーク環境等の ICT 導入事例を通じて教育環境の電子化について提案します。
一本の木から 椅子をつくる	岳野 公人 (たけの きみひと)	技術教育講座 (技術教育/ 環境教育)	教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	森林環境の有効利用の観点から、伐採から製材、椅子作りのプロセスをすべて人間の手でおこなう方法を紹介する。 米国では、グリーンウッドワーキングといい、日本の木地師が山にもって、器づくりをしていたころの技術と同様の伝統的な手法である。作業できる場所が確保できれば、実際の作業を体験するワークショップを開催することもできる。

題名	講師	講座	対象	内容
動物の行動を真似るロボット	右田 正夫 (みぎた まさお)	情報教育講座 (認知科学／ ロボット工学)	生徒(高)	外界からの情報に応じて、自ら適切な行動を選択できるロボットを総称して「自律ロボット」といいます。自律ロボットが動作する環境はとても複雑ですが、さまざまな動物の行動様式を真似てロボットの行動をデザインすることでうまく対処できる場合があります。本講義では、そのような自律ロボットの研究事例を紹介します。
複雑系入門 -フラクタルとは何だろう-	水上 善博 (みずかみ よしひろ)	情報教育講座 (コンピュータ シミュレーション)	生徒(高)	海岸線や川の流れ、雲の形や木の枝ぶりなど、自然の造形には複雑な形をしているものが多く見られます。複雑な形をした図形の特徴を表す方法にフラクタルがあります。本講義では、フラクタルという考え方を分かりやすく解説し、形の複雑さを知るための指標としてのフラクタル次元の求め方を学びます。

【家庭科教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
何をどう食べる？ -自分のための食べ物、食べ方-	久保 加織 (くぼ かおり)	家政教育講座 (食物学)	教員(小・中・高・特) 市民一般	誰もがいつでも食べたいものを食べられる現在であるからこそ、どの年代の人も自分の健康のためには何をどれだけどのように食べるのがいいか、きちんと理解しておくことが大切です。様々な情報と食品表示が氾濫する中で、自分のための食材選びと食べ方について考えます。(具体的にどのような点に重点をおくかは、対象者に応じて相談させていただきます。)
くつろぎの住まい	田中 宏子 (たなか ひろこ)	家政教育講座 (住居学)	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	住まいは、雨や風、暑さ・寒さや様々な過酷な自然現象から人々を守る役割があります。また、そこで暮らす人々がゆつくりと休養し、エネルギーを蓄えるなど、住まいは人々の心身の健康を維持する役割ももっています。これらの役割を果たすためにはどのような工夫が必要でしょうか、ともに考えてみたいと思います。
家族の機能	平松 紀代子 (ひらまつ きよこ)	家政教育講座 (家庭経営学)	児童・生徒(幼・小・中・高) 教員(幼・小・中・高) 保護者・市民一般	家族の存在はどのような機能を果たしているだろうか。社会で一番小さい組織(システム)である家族について、客観的に振り返り、時代、国、あるいは同じ時代に同じ地域に暮らしていても異なる家庭の文化にも目配りしつつ、それぞれの価値観の違いをふまえ、それぞれの価値観を尊重することの大切さについてお話しします。
衣生活と環境	與倉 弘子 (よくら ひろこ)	家政教育講座 (被服学)	教員(小・中・高・特) 市民一般	環境問題に配慮した衣服の着装行動について解説します。衣服による気候の調節と省エネルギー(暑さ寒さに応じた着方、クールビス・ウォームビズなど)、有害紫外線と健康の関わりや衣服による紫外線対策について、衣服のリユース・リサイクルなど、環境保全に関わる衣生活の問題について考えてみましょう。

【英語教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
人間の言葉の能力について:母語の獲得、外国語の習得と脳のはたらき	大嶋 秀樹 (おおしま ひでき)	英語教育講座 (英語科教育／ 言語心理学)	児童・生徒(小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	ことばの能力は、生き物の中で、人間だけが持つ能力です。人間は、ことばを覚え、ことばを使ってコミュニケーションをします。ことばの能力には、音声、語彙、文法、意味の領域で、脳の活動が大きく関わっています。講義では、人間の持つことばの能力、ことばの能力と脳の働き、母語の獲得、外国語の習得について、最新の言及の知見にも触れながら、話を進めようと思います。
イマージョン教育と英語学習	田中 佑美 (たなか ゆみ)	英語教育講座 (英語教育学)	教員(小・中)	本講義では、イマージョン教育と英語学習、特に英語学習に対する動機づけについてお話しします。イマージョン教育はカナダで始まった第二言語を使って理科や社会などの教科を指導するバイリンガル教育の一つです。日本における英語によるイマージョン教育にも触れながら、英語を通して教科を学ぶことによる英語学習と英語学習に対する動機づけについてご紹介いたします。

題名	講師	講座	対象	内容
アメリカ小説を読む	林 直生 (はやし なお)	英語教育講座 (アメリカ文学/ アメリカ文化)	市民一般	詩や小説などの文学作品は、それ自体が独立して存在するのではなく、作家が作品を執筆した当時またはそれ以前の時代の社会や文化と密接な関わりを持っています。 この講義では、主に 20 世紀前半のアメリカで書かれた小説を取り上げて、作品とその背景について見ていきます。
言語学への招待	板東 美智子 (ばんどう みちこ)	英語教育講座 (言語学)	生徒(高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	・なぜひとはことばをもっているのか(言葉の起原) ・なぜひとは3歳ぐらいになるとことばをしゃべり始めるのか(普通文法) ・アメリカ人の子供のように学習すれば日本人も英語がべらべらになるのだろうか(言語臨界期仮説) ・ことばのかたち・いみ・ならび(形態論・意味論・統語論) ・会話の意図は会話に出てこない(語用論) などについて紹介します。

【学校教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
カウンセリング マインドを育む	芦谷 道子 (あしたに みちこ)	学校教育講座 (臨床心理学)	教員(幼・小・中・高) 保護者・市民一般	さまざまなこころの問題が起こっている現代において、どのように人と関わればよいか、どのように子育てや子どもの心理的援助をすればよいか、悩みを抱えておられる方も多いことと思います。 自己理解や他者理解のヒントとなるよう、カウンセリングの基本的な概念や、カウンセリングマインドについて、絵本や教材、体験を通して学んでいきます。
教師-生徒関係 の変容とこれから	太田 拓紀 (おおた ひろき)	学校教育講座 (教育社会学)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	現在、教師と児童・生徒との関係性における危機が広く叫ばれています。では、過去の教師と生徒の関係は良好だったのでしょうか。そもそも、問題視されはじめるのは、いつ頃からでしょうか。この講義では、わが国における教師-生徒関係の歴史的变化を概観し、その上で、今後の望ましい関係性のあり方について考えてみたいと思います。
他者理解の コミュニケーション 心理学	蔵永 瞳 (くらなが ひとみ)	学校教育講座 (社会心理学)	教員(幼・小・特) 保護者・市民一般	人間は、他者とたくさんのコミュニケーションをとりながら生活する生物です。本講座では、対人コミュニケーションのメカニズムとつまずきのポイント、人間が持つコミュニケーション能力の基盤である「他者の気持ちを理解する」力について、心理学の観点からお話します。
比較教育学で 教育を考える	児玉 奈々 (こだま なな)	学校教育講座 (比較教育学)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	比較教育学は、諸外国の教育事象を対象に教育と社会のつながりを考察する学問領域です。 この講義では、現代の日本の学校で課題となっていることの諸外国における状況や各国の解決策を見ていきます。諸外国の教育事象の考察を通して、日本の学校の当たり前が海外の学校では当たり前ではないことに気づき、教育と社会のつながりを知り、さらには、人間にとって教育や学校はどんな意味を持つものなのか、教育や学校の本質について考えることを目指します。
教育法規を読み解く	藤村 祐子 (ふじむら ゆうこ)	学校教育講座 (教育制度学)	教員(小・中)	教育法規は、教育の枠組みとなる重要な要素です。様々な教育改革が進められる中で、教育法規に目を通し、教育に何が求められ、どの方向に進もうとしているのか、改めて考えてみたいと思います。
『エミール』を読む ～生きるための教育と 大人の役割について	三輪 貴美枝 (みわ きみえ)	学校教育講座 (教育学・教育哲学)	保護者	ルソーによって書かれた『エミール』は、人が教育をまさに「生きるために」必要とした時代のものであり、その思想は時代や文化の違いを越えて現代の私たちにも「生きること」の意味を考える材料を提供してくれます。 それが書かれた時代状況等にも触れながら、「生きるための教育と大人の役割」について考えます。
キャリア教育の 理解と推進	若松 養亮 (わかまつ ようすけ)	学校教育講座 (キャリア心理学)	教員(幼・小・中・高・特)	進路指導や就職指導と混同されがちなキャリア教育について、その出自や必要性、中教審答申に示された内容について解説し、具体的な推進方法や運営上の課題について、これまでの実践例にふれながらお話しします。
子どもが「こころ」 に気づく時	渡部 雅之 (わたなべ まさゆき)	学校教育講座 (発達心理学)	教員(幼・小・特) 保護者・市民一般	幼い子どもたちは、自分自身の中にある「こころ」という存在を、十分に意識することができません。 他の人間にも「こころ」があり、それが自分の「こころ」と同じ働きをしていることに気づくことで、他者への共感や理解が深まります。こうした「こころ」への気づきの発達過程についてお話します。

【幼児教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
幼児期の遊びを豊かにする環境構成	山本 一成 (やまもと いっせい)	幼児教育講座 (幼児教育学)	生徒(高) 教員(幼・小)	幼児は遊びを通して様々なことを学んでいきます。そして、幼児が夢中になって遊ぶためには、子どもたちの遊びを可能にする環境が整えられている必要があります。この講座では、子どもの遊びの大切さや、遊びにかかわる環境の在り方について、理論と実践の両面から学んでいきます。

【障害児教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
障害の原因と最近の話題	江原 寛昭 (えはら ひろあき)	障害児教育講座 (小児神経学)	教員(幼・小・中・高・特)	近年、遺伝医学などの研究の急速な進展により、病気や障害の原因の解明が急速に進展しました。この講義では、それらの研究の成果を中心に、障害に関するトピックスを概説します。
ちょっと気になる子どもたちの発達と教育	窪田 知子 (くぼた ともこ)	障害児教育講座 (特別支援教育)	教員(幼・小) 保護者	私たちの身のまわりにいる“ちょっと気になる子どもたち(主に、発達障害の子どもたち)”のことをどう理解すればよいのか？家庭や学校でどのような関わりをすれば、彼らの健やかな育ちを支え励ますことができるのか？保護者とどう連携するには…？などのテーマについて、一緒に考えてみたいと思います。
障害のある子の発達と教育	白石 恵理子 (しらいし えりこ)	障害児教育講座 (障害心理／ 障害児教育)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者	主として知的障害や発達障害をもつ子どもたちの発達と教育について考えます。 (発達の時期等については、ご相談に応じます。)
支援の必要な子どもと教育	羽山 裕子 (はやま ゆうこ)	障害児教育講座 (障害児教育)	教員(小・中)	通常学校に在籍する支援の必要な子どもたちは、学校生活のどこにつまずきを抱えがちなのか、どのような支援が可能なのか、一緒に考えていきたいと思います。
「気になる」児童・生徒の発達の理解と支援	松島 明日香 (まつしま あすか)	障害児教育講座 (障害児心理)	教員(幼・小・中・特) 保護者	友達とトラブルになる、じっとしていられないなど、対人面や行動面において「気になる」児童・生徒の存在が注目されています。その支援と対応には彼らの困難さを発達の的に理解していくことが重要です。本講義では、この時期の発達を通して「気になる」児童・生徒の困難さをどのように理解し、対応していけば良いのかについて考えます。

【環境教育関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
湖沼の生態系	石川 俊之 (いしかわ としゆき)	環境教育講座 (湖沼生態学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	湖沼の水の中には一見すると何も無いように見えます。しかし、そこには目に見えない小さな生き物が活躍する実に豊かな世界があります。琵琶湖を例に生物と生息環境の関係について考え、自然環境を大切にするためにできることを考えます。
食料生産と環境	森 太郎 (もり たろう)	環境教育講座 (園芸学/植物病理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	私たちの生活に欠かせない食料生産と環境との関係について、食料生産は環境にどのような影響を与えているのか？一方、食料生産は環境からどのような影響を受けているのか？の観点から講義し、持続可能な食料生産について考えます。

【教職大学院担当教員関係分野】

題名	講師	講座	対象	内容
教師の変容と省察を促す研修会の創造	青木 善治 (あおき よしはる)	高度教職実践専攻 (教育方法学)	教員(小・中)	「主体的・対話的で深い学び」の実現の上で不可欠な要因があります。それは、そもそも教師が一人ひとりの子どもの学びの姿をしっかりとらえることができなければはじまりません。しかしながら、教師自身の見方や感じ方を一人でとらえ直すことはなかなか難しいことです。そこで、令和2年度まで新潟県内の小学校校長として研修による学校経営を行ってきた経験もいかし、私たち教師が生涯に渡って学び続け、変容し省察しやすい研修会を授業研究時の事後協議会を活用して行います。

題名	講師	講座	対象	内容
コーチングを意識するだけで子どもが変わる〇〇の方法 ～子どもを伸ばす先生、ダメにする先生、その違いはどこにあった！	青木 善治 (あおき よしはる)	高度教職実践専攻 (教師教育)	若手～中堅教員(小・中)	子どもを伸ばす先生、ダメにする先生、その違いはどこにあるのでしょうか。実は、コーチングを意識するだけで子どもが変わる様々な方法について、具体的に楽しみながら紹介します。令和2年度まで新潟県内の小学校校長として学校経営を行ってきた経験もいかして行います。
作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア	青木 善治 (あおき よしはる)	高度教職実践専攻 (美術科教育)	教員(幼・小・中)	新潟県立近代美術館勤務の経験もある講師が、「対話型鑑賞(朝鑑賞)」や「アートカード」を用いた活動など、楽しく鑑賞する指導のアイデア満載な研修会を行います。
学校危機管理	今井 弘樹 (いまい ひろき)	高度教職実践専攻 (学校経営)	教員(小・中)	今日、学校をとりまく環境には様々な危機が存在します。特に学校における不祥事は、学校教育を根拠から支える「信頼」を揺るがす大きな課題です。自身が対応に関わったものや近年の事例から、事件・事故の発生前、発生直後、発生後の学校管理や取るべき対応について、具体的に分析・検証し、組織対応の内容や課題について考えていきます。
リーダーシップとカリキュラムマネジメントの推進	今井 弘樹 (いまい ひろき)	高度教職実践専攻 (学校経営)	教員(小・中)	小中学校でのカリキュラムマネジメントの考え方を整理し、推進するにあたって、学校リーダーシップの側面から考えます。また、地域に開かれた教育課程の実現を目指すカリキュラムマネジメントの取組みについて、演習をしながら、その充実について考えていきます。
学校のビジョン形成と評価の手法	大野 裕己 (おおの やすき)	高度教職実践専攻 (学校経営学/ 教育制度学)	教員(主に小・中・高校)	今日の学校経営改革下で各学校に求められるビジョン形成やその評価の考え方・手法について、学校組織開発や内外連携構築と関連して整理・検討します(講義・演習・コンサルテーション)。 ※学校関係者評価や学校第三者評価実施への関わりについても、本務に支障のない範囲(年度数件程度)で対応できます。
算数・数学科の授業づくり	大橋 宏星 (おおはし こうせい)	高度教職実践専攻 (算数・数学教育)	教員(小・中)	主体的・対話的で深い学びを目指した授業展開について、実際の授業や指導案を通して検討します。
幼児の健康と生活	奥田 援史 (おくた えんじ)	幼児教育講座 (健康教育)	教員(幼) 保護者	幼児の健康と生活の関連について概説します。 また、「幼児期運動指針」(文部科学省)を解説します。
暮らしと消費と環境	岸田 蘭子 (きした らんこ)	高度教職実践専攻 (家庭科教育)	教員(小・中・高)	新学習指導要領でも重視されている「消費と環境」についての教材開発や授業実践についての解説を行います。受講者主体のワークショップ型の講座で、小・中・高対象ですが、学校種別でも合同型でも対応できます。
社会科の学力とパフォーマンス評価	岸本 実 (きしもと みのる)	社会科教育講座 (社会科教育)	教員(小・中・高)	社会科の思考・判断・表現の学力を身につけさせるために、パフォーマンス評価の指導と実践が求められています。授業の中の15～20分の中心活動、1時間そして1単元の授業など、生徒の思考・判断・表現のパフォーマンスをどのように指導し、評価すればよいのか、ワークショップ形式で考察します。
新しい時代が求める資質・能力を伸ばす教育課程・指導・評価	岸本 実 (きしもと みのる)	高度教職実践専攻 (教育方法学)	教員(小・中・高)	新しい学習指導要領により整理された、新しい時代が求める資質・能力を伸ばすためには、学校を基礎に教育課程を編成し、カリキュラムマネジメントを適切に実施していくことが求められています。また単元や授業において確実にその資質・能力を身につけさせる学習指導と評価の在り方が問われています。本講座では、学校、学年、教科など学習者の状況に合わせて、これらの問題を考察します。
国語科の授業づくり	北村 拓也 (きたむら たくや)	高度教職実践専攻 (国語科教育)	教員(小・中)	主体的・対話的で深い学びの実現を目指した国語科の授業づくりについて、実際の授業や指導案を通して検討します。
体育授業における指導と評価の一体化	辻 延浩 (つじ のぶひろ)	保健体育講座 (体育科教育)	教員(小・中・高)	子どもたちが学び合い育ち合う体育授業はどのように実現できるのか。いま教師に求められる考え方や指導性はどのようなものか、協同的な学びをどのようにデザインし、評価していけばよいのか等、学習集団づくりの理論と方法について考えていきましょう。

題名	講師	講座	対象	内容
自然景観と自然災害／ 防災教育と学校安全	藤岡 達也 (ふじおか たつや)	理科教育講座 (科学教育／ 防災教育)	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	本講義では、次の3つのテーマを取り扱っています。テーマの選択等は可能です。 ① 自然と人間との関わり(持続可能な社会とこれからの環境教育) ② 自然景観の形成・活用と自然災害(国立公園・ジオパークと近年発生した自然災害など自然の二面性について) ③ 防災教育と学校安全・学校危機管理(子供を事件・事故災害から守るために)
授業実践の事例研究	堀江 伸 (ほりえ しん)	高度教職実践専攻 (教育方法学)	教員(小・中)	学校で授業研究を実際にされることを前提に引き受けることにしています。ひとりの教師や何人かの教師が、ある目的で授業研究されるのを参観し、その後の検討会に参加させていただくという形式です。 その目的は、問いませんが、以下の教科に限らせていただきます。国語科、社会科、図工・美術科、道徳、総合の授業です。授業を改善するという目的でも、校内研究のテーマに即した授業研究でもかまいません。進め方などは相談に応じます。
学校における 人材育成	前田 利幸 (まえだ としゆき)	高度教職実践専攻 (教師教育/ 学校経営)	若手～中堅教員(小・中) 管理職(小・中)	今日、学校現場では教職員の多忙化が深刻な課題であり、働き方改革の推進が求められています。さらに滋賀県の教職員の年齢構成からも学校現場での人材育成は喫緊の課題となっています。このような状況下、多忙な学校現場においていかに効率よく計画的に人材育成を進めるのか、また教育課題解決に向けていかに学校組織力を向上させていくのか、校長のリーダーシップとマネジメント力が求められます。 教員の各ステージに合わせて、明るく元気に学び続ける教職員を応援できるよう自身の経験を活かして研修を行います。
障害のある 子どもの支援	山川 直孝 (やまかわ なおたか)	高度教職実践専攻 (特別支援教育)	教員(幼・小・中・高・特)	勉強が苦手だったり、集団生活になじめなかったりする子どもが少なくありません。障害の状態やそれに伴う学びにくさは多様かつ個人差が大きく、個別最適化した学びが求められます。心理アセスメントの紹介や気になる行動をする理由、子どもの長所を生かした対応などについて、自立と社会参加を見据えながら考えていきます。

4 教職探究講座

教職探究講座は、滋賀県内の高校生を対象として、教員の仕事や子どもの発達特徴を理解することを通じて、教職への意識高揚を図ることを目的として実施されるものである。令和4年度は、コロナウイルス感染症に鑑み、講座の拡大実施は計画せずに、例年実施されている東大津高校及び水口東高校の生徒を対象とした「教職探究講座」を2日間にわたって実施した。両校の高校生43名と本学部在学学生で各高校OB・OG10名の参加のもと充実した講座になった。具体的なプログラムは以下のとおりである。

【令和4年度教育実践総合センター連携講座「教職探究講座」（高大連携）】

- 1 目的 教職を志望する高校生を対象として教職探究講座を開設し、対象者の教職に対する理解を深めると共に進路（教職）に対する視野を広げ、モチベーションを高めることを目的とする。
- 2 対象 滋賀県立東大津高等学校及び、滋賀県立水口東高等学校の1・2年生
- 3 主催 滋賀大学教育学部・滋賀県立東大津高等学校・滋賀県立水口東高等学校
- 4 期日 令和4年12月21日（水）・22日（木）
- 5 会場 滋賀大学教育学部 大講義室

（プログラム）

(1) 1日目：12月21日（水）	(2) 2日目：12月22日（木）
<ul style="list-style-type: none">◆ 開講式（14:00～14:05） 挨拶：学部長 徳田 陽明 教授◆ 第1講（14:10～14:55） 講義名：教師力を培う 講師：大野 裕己 教授<ul style="list-style-type: none">➢ 教師の仕事と役割<ul style="list-style-type: none">・教師の仕事の特徴と背景・教師の専門職性➢ 教師力を培い、高める<ul style="list-style-type: none">・教師力とその核・学び続ける教師と教師力◆ 第2講（15:00～15:45） 講義名：学校における心理的問題への教師による対応 講師：芦谷 道子 教授<ul style="list-style-type: none">➢ 現代の子どもたちが抱える心理的問題➢ 子どもたちの心を育む教師の関わりと支援◆ 第3講（15:50～16:35） 講義名：授業とICT 講師：岩井 憲一 准教授<ul style="list-style-type: none">➢ 教育におけるICT活用とは<ul style="list-style-type: none">・ICT活用の重要性・ICT活用の効果➢ 教育の情報化にむけて<ul style="list-style-type: none">・ICT活用の取り組み	<ul style="list-style-type: none">◆ 第4講（14:00～14:45） 講義名：教職への志が拓く教師の道 講師：今井 弘樹 教授<ul style="list-style-type: none">➢ 教職とは<ul style="list-style-type: none">・人を教えること、人に教えることについて考える・教職を志す上で大切なこと◆ 第5講（14:50～15:35） 講義名：教育学部で学ぶとは 講師：大橋 宏星 准教授<ul style="list-style-type: none">➢ 教育学部とは<ul style="list-style-type: none">・各学校種の免許取得方法・他学部との違い（教育学部の独自）・教育学部の可能性（就職）➢ 先輩に学ぶ：東大津高校、水口東高校の卒業生OB・OGとの懇談交流会<ul style="list-style-type: none">・「私が滋賀大で学んでいること、感じていること」（先輩からの話）・「先輩への質問と応答」（高校生からの質問）◆ 閉講式（15:35～15:45） 司会：センター長 神 直人 教授<ul style="list-style-type: none">➢ 修了認定書授与（生徒代表）➢ 挨拶◆ OB・OG懇談交流会（15:55～16:25）

【参加した生徒の感想より】

(1年生) 高校に入ってから、何回か他の大学のオープンキャンパスに行ったことはありますが、「説明会」ではなく興味のある学部の特化した「講義」を受けたのは初めてでした。ただパンフレットを読むのではなく、教授の方から直接お話を伺えたことで、今までぼんやりしたイメージしかなかった教育学部について「教育学部ってこんなことを学ぶんだな」「先生ってこういう仕事なんだな」ということが感じられたと思います。すべての講義が教育学部についてだけれど、すべての講義でそれぞれ違う視点から見た教育学部のように感じ、5講目まで集中して講義を受けることができました。確かに少し難しいな、と思うところはありませんでしたが、資料で図やデータが使われていたり、実際に児童に出題された問題をもとに考えていったりと、教授の方々が私たちに少しでもわかりやすいようにしてくださっていることを感じたし、そのような工夫がされていたおかげで理解しやすくなっていったと思います。懇談交流会では、OB・OGの先輩に質問し、話すことができたことで「滋賀大に通う」というイメージがぐっとわいてきました。「みんななら大丈夫だよ!」と言って下さってすごく気持ちが楽になりました。とても充実した高大連携講座であったと思います。来年も開かれるならばまた参加したいです。

(2年生) 普段から自分たちの近くにいる「先生」。自分でもいつからかあこがれていて、自分もなりたいと思うようになっていました。しかし教師という仕事について深く知りませんでした。今回の講義で学んだことはいくつもあります。1つ目は、大野先生の講義にあった「教職はあいまいなもの、あいまいであるから難しい」という言葉でした。普段から忙しそうにしている先生方の忙しさの理由というのが少しわかった気がしました。2つ目は、心理学と教育のかかわりです。人の心をデータから読み取り活用していく心理学と人を教え導いていく教育の関係は興味深く、もっと学びたいと思いました。3つ目は、ICTの活用についてです。自分も経験したことがあるのですが、板書が多く、授業内容が頭に入ってこないということがありました。そこで、ICTを活用することで「書く授業から捉える授業」に変化するという言葉は印象的でした。4つ目は、教師のあり方です。今井先生の講義の中で「先生のおかげでできた」ではなく「先生の手助けのおかげで自分でできた」が重要であるとされていました。この言葉はとても印象に残っていて、とても共感することができたし、これができるようになりたいと思ったのですが、とても難しいことだと思います。これが大野先生の言っていた「あいまいさ」の1つであると考えます。このほかにも教育学部の系統の話やOB・OGの方からの話といろいろなことを学ぶことができました。今回の貴重な講義を聞いて、より教員になりたいという思いが強くなりました。



開講式 徳田陽明学部長の挨拶



先輩に学ぶ (OB・OG との交流会)

(神 直人)

5 教育臨床研究

1. 教育相談領域

これまで同様、非公開での相談業務を継続した。相談場所としては主に大学内にあるカウンセリング室と研究室（芦谷研究室）を用いた。今年度は、教員からの相談やコンサルテーションの依頼が16件、スーパービジョンの依頼が8件（1件につき、必要に応じて複数回実施）、本人や保護者からの教育相談依頼が3件、学生からの相談が15件あり、相談延べ件数（2月末まで）は76件であった。スーパービジョンとしてはグループを対象とした自治体への支援や、教員になった卒業生を対象としたもの、自治体や病院、大学心理相談室の心理士を対象としたものを実施している。平成28年度より継続実施している「野洲市ふれあい教育センター」での、適応指導教室、カウンセラーを対象としたスーパービジョン研修講師は4回行った。

今年度も新型コロナウイルス感染拡大による不安が継続し、不登校、登校渋り、登校不安、抑うつといった問題が子どもたちに多く見られ、その対策に伴う相談が昨年に引き続き多かった。直接会うことのできない対象には、オンラインによる面談も実施した。問題が深刻な事案に対しては、カンファレンスを開いて様々な専門家による対策チームを立ち上げ、継続的な支援活動を行った。学生からの相談においては、多重関係を避けるため、継続面接が必要な数事例は保健管理センターなどの相談機関に繋いでいる。学生の間にも、抑うつや生活リズムの乱れ、将来や進路への不安が見られている。保健管理センターは敷居が高いと感じる学生も多く、教員が必要な支援への繋ぎ手となることの意義を感じている。

（文責：芦谷道子）

2. 大津少年鑑別所との連携事業

2014年度より開始した、大津少年鑑別所と連携事業を引き続き実施し、鑑別所に入所している少年を対象とした学習教室に大学院生を派遣し、教養講話を行っている。時間は一回30分～1時間ほど、頻度はランダムであり、今年度は5回（通算66回）の実施となった。教職大学院生の北出未久、毘盧谷侑、武内昭遵、立岡寿規、谷本佑斗、園田純也、野原桃香、徳永萌花、林正人がそれぞれ現職教員とストレートマスターがペアを組んで訪問した。必要に応じて筆者が関係者と枠組みについて検討し、担当院生にスーパービジョンを行った。鑑別所からは子どもたちに貴重な体験になっていると好評を得ており、また派遣講師にとっても貴重な学びの機会となっている。以下は担当した教職大学院生4名からの実施報告である。

（文責：芦谷道子）

（1）教養講話実施状況（受講者：各回1名）

実施日：①8月30日、②9月6日、③9月8日、④9月13日、⑤9月15日

（2）教養講話概要

【①：実施内容】社会 地理的分野 「世界の国々 国名パズルゲーム」

〈所感〉世界の国にたくさん触れるための「国名パズル」というクロスワードパズルを行なった。はじめに受講者に「いくつ世界の国知ってる？」と尋ねると、片手で足りるほどしか答えることが出来ず、表情も堅く感じた。ゲームが始まり、地図帳を使いながら国名を調べ、たくさんの国名を知る中で徐々

に表情が和らぎ、国名の見つけ方のコツを聞いたり、ヒントを求めたりと主体的に学びに向かう姿が見られた。ゲーム後、「いくつ世界の国言える？」と尋ねると両手では足りないほど答えることができ、本人も達成感に満ちた表情で、「面白かった！」と感想を述べていた。学ぶことへの動機づけの重要性や、自分の成長を感じさせる大切さを再認識した。(M1：林正人)

【③：実施内容】 保健体育 「交通ルールの大切さ」

〈所感〉交通ルールを順守しなかったことによる交通事故が後を絶たない。年齢的に早い段階から正しい交通ルールを知り、守ることは自らの身を守ることに繋がる。そこで今回は身近にある信号機を題材に交通事故の現状や、守らなければならないルールをクイズを通して紹介した。内容はクイズを楽しみながら、交通ルールを意識してほしいとの思いから、「信号機の色の意味」や「青信号は緑色なのに、なぜ青信号と呼ぶのか」など雑学に近いものを取り扱った。今回のことから細かい交通ルールでも意識してほしいと思う。(M1：園田純也)

【④：実施内容】 社会 歴史的分野 「オリジナルの家紋を作ろう！」

〈所感〉講話に当たって、短い時間だが、受講者に自分を表現してほしいと感じていた。そこで、家紋の図鑑を見せ、好きな紋様を選んでもらい、組み合わせて自分だけの家紋を作ってもらった。家紋に用いられる文様は多種多様で、どれも単純かつ洗練されたものになっている。受講者は、自分の頭で配置を考えながら、「これとこれを組み合わせたらかっこいい」と好みの家紋を作っていた。「意外と、描くのが難しい」など、試行錯誤しながら、自分で決めるプロセスを楽しんでもらえたように思う。完成した家紋を見て、「かっこいいっすね」と笑顔で語ってくれた顔は忘れられない。(M1：徳永萌花)

【⑤：実施内容】 数学 「数学クイズ」

〈所感〉学びの面白さを感じてもらうために「紙を何回折ると月まで届く？」「同じ誕生日の人がいる確率は？」など数字に関する問題を考えた。数学について興味を持つきっかけになったようで、予想した考えと答えが異なる点に驚く姿が見られた。学ぶことの楽しさは生活に直結する要素だけではないと思う。このことをきっかけに様々な事についての興味を持って生活してくれればうれしい。(M1：谷本佑斗)

3. SKC キッズカレッジ（滋賀大キッズカレッジ）2022 年度連携活動報告

2017年6月21日に教育学部と当法人の協力連携協定を結ばせていただいてから当法人としまして教育学部との協力連携が進んでいることに感謝しております。SKC キッズカレッジとしましては、日常的には、発達障害、特に読み書き困難のある子どもの相談、アセスメントと学習指導を行っています。相談とアセスメントは、教育学部の相談準備室（207）と相談室で行っています。最近の傾向は、年少化（年長児、低学年）と中学生の分極化しているように感じています。不登校との重複も多くなっています。また、アセスメント後の学習指導は、大学近くの平津1丁目の民家で、火、水、木の午後、土曜日の午前午後に行っています。

教育学部との協力・連携では、教職大学院大学院生の実習を当法人の学習室にて深川美也子が担当者として実施しました。本年は7名の参加がありました。実習後の感想では、学習室での子どもの様子をビデオを通して観察し、キッズカレッジの独自の方法についての事前のレクチャーから大学の講義とは違う面を見聞きすることができたなどという感想があり、有意義であったと思われれます。また、今年

は、教職大学院学生1名からボランティア希望があり、10時間のボランティア研修を行い、その後学習室の見学をしてもらいました。

滋賀大学の授業への協力として、当法人の横江真理子が江原教授の「知的障害時の健康と医療」の一部を担当し、深川美也子が、「軽度発達障害の心理と支援」の一コマを実務家教員として担当するなど協力させていただきました。学術的研究としては、窪島務が教育学部紀要 72 巻および滋賀大学教育実践研究論集第 5 号に論文を投稿しました。

社会貢献事業としまして、発達障害に関する「ミニ講演と相談会」を11月22日から毎月1回午前中、大津サテライトにて実施、毎回数人の保護者の参加がありました。相談は、年長児から高校生までとかなりの幅がありました。外部向けの研修講座は、コロナ流行の影響でしばらく行っていませんでしたが、今年度は5月から3回連続講座を対面とZoomのハイブリッドで行い、約30名の参加がありました。

学校連携では、毎年1学期末に実施しているキッズ児童の通う学校の担任を対象に7月25日に行い、18校から23人の先生が参加されました。個別の連携も、膳所小学校、近江兄弟社中学校、中主中学校などとおこないました。

協力連携が良好に行われていることに感謝致します。今後とも、教育学部のご支援とご協力をよろしくお願い致します。

(文責 窪島務)

4. 心理予防教育開発実践事業

2016年度より、心理予防教育開発事業に取り組み、滋賀県において「生きる力を育むモデル校」に指定されている公立小学校にて、英国で開発されたマインドフルネスの小児版である「.bプログラム」や、鳴門教育大学予防教育科学教育研究センターで開発された「いのちと友情の学校予防教育」(トップ・セルフ, TOP SELF: Trial of Prevention School Education for Life and Friendship)の実施などに取り組んできました。

現在は、英国オックスフォード大学、MiSP (Mindfulness in Scholl Project)、関西医科大学心療内科科学講座、MBSR研究会と協力し、4か年計画の「.bプロジェクト」に取り組んでいる。3年目の今年、昨年同様英国とオンラインで繋ぎ、第2回子どもマインドフルネス講師 .b Teacher 養成研修 Teach .b を開催することができた。研修は9月18日・19日・24日・25日の4日間にわたって行われ、北海道から沖縄までの心理士、教師、その他の教育関係者より申し込みがあり、28名(昨年度と合わせて計66名)の新たなドットビー・ティーチャーが誕生した。参加者より、「この度は、素晴らしいプログラムを学ぶ機会を得られ、大変嬉しく思います。4日間とは思えない、濃厚な学びの世界の中で、子どもたちとのつながり方が重要であり、マインドフルネスの可能性も感じました」「2017年からずっと心待ちにしていたプログラムでやっと受講することができ、感無量です。素晴らしい内容でした。開催にあたりご尽力いただき心より感謝申し上げます。今後はどうすれば未来を創る青少年に届くのか、検討と実行をして参ります」などの感想があった。現在ドットビー・ティーチャーが各地の学校や教育施設で実践を行っており、英国試験と共通の心理尺度を用いて効果評価に取り組んでいる。

さらに、MfCP : Mindfulness for Children's Project という団体を立ち上げてホームページ (<https://mfcp.info/>) を作成し、オンライン上で .b Teacher のプラットフォームを作り、プログラムに参加する子どもたちの様子をシェアし、情報交換、情報共有、各種コンテンツの提供、グループワークなどを行っている。

次年度は効果評価の統計的分析を行い、公表する予定である。また、一般の子どもたちからケアを必要とする子どもたちに活動の幅を広げ、より幅広い対象にプログラムを提供できるよう、工夫していくことを計画している。さらに、現在の中高生向け 10 回プログラムに加えて、4 回短縮版のプログラムや、小学生向けのプログラムの翻訳にも携わる予定である。



MFCP (Mindfulness for Children's Project) HP より



尾道の学習塾での.b プログラム実施の様子 (.b Teacher 辻佳衣子先生の実践)



埼玉県立鴻巣女子高等学校での.b プログラム実施の様子 (.b Teacher 石田友美先生の実践)

(文責：芦谷道子)

6 情報教育研究

1. 事業名および担当者

本学部教育実践総合センターでは、毎年12月に高大連携事業の一環として、滋賀県立高校の1、2年生を対象とした教職探究講座を実施しています。筆者もこの事業に講師として参加しました。昨年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で一日のみの開催でしたが、本年度は例年通り12月21日(水)～22日(木)の二日にわたって実施いたしました。本稿では、筆者の講演内容の概要についてご報告いたします。



事業名は「授業とICT」で、担当者は岩井憲一です。

2. 事業の目的

ご存知の通り、教員養成系学部としては、「優れた教員を養成する」のが主な目的です。その中で、教授スキルを磨くという意味においてICTが注目されています。当センターが主催する高大連携講座「教職探究講座」は、地域の高等学校と本学部が連携し、進路としての「教師」について、「教師とはどのような仕事であるのか」、「本学部ではどのようなことが学べるのか」等を理解するための場であるといえます。筆者は講演の中で、教師としてのスキルアップ、また教育学部として行われている具体的な取り組みを理解してもらうために、その中の一つである授業におけるICTの役割やICTを利用した教育手法に関する取り組みについて扱っていることとお話しました。

文部科学省の“令和元年度 文部科学白書”[1]によると、「教科指導におけるICTの活用は、子供たちの学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業を実現する上で効果的」と述べられています。このことから、子供たちの「確かな学力」を育成するためには、わかりやすい授業を実現することが必要です。

以下では、この目的に沿った事業の概要につきましてこの場をお借りしてご報告したいと思います。

3. 事業の概要

3.1 今回の発表の特徴について

大まかな流れとしては前年度の事業[2]でお話した(1)文部科学省のWebサイトの重要性について、(2)ICTの教育への導入について、(3)ICT活用の伴う教材や学習形態について、(4)ICTを扱う上での注意、(5)プログラミング教育の構成の中から、今回は論旨を明確にして理解を促せるように提示資料の内容を今一度見直すことにしました。

3.2 ICTを扱う上での注意

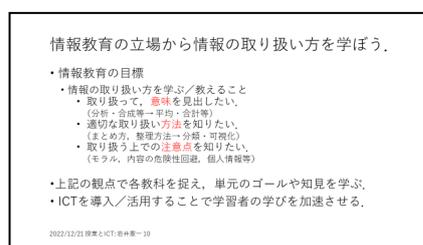
講演の内容については前年度と基本的に同様ですので、まず「ICTの利用は、本来の教授活動をよりわかりやすくするために置き換えたものであり、利用することが目的ではない。」ということをお話しました。つまり、授業全体の流れを指導案という一つの枠組みとして捉え、ICTを利用している流れが、授業のどの流れになるのかの確認と、利用することでわかりやすくなっているかの確認を行うように指導していることとお話しました。次に授業の内容がわかりにくいと感じた場合の補完対策や理解をさら

に進めていこうとする場合に ICT の導入が望ましいということをお話しました。授業の中で、以前話した内容について教師は簡略化しがちであり、また、そのような場合の確認手段として ICT を利用することで補うことができる等の事柄を説明しました。

また、プログラミング教育についてもお話しました。ここで挙げる「プログラミング」とは「プログラミング的思考」であり、必ずしもプログラミング言語の修得が目的ではないことを説明しました。そのあたりのエビデンスとして文献 3 を紹介します。この文献は文部科学省・総務省・経済産業省による小学校を中心としたプログラミング教育に関するポータルサイトであり、日本全国の小学校におけるプログラミング教育の実例についてまとめられています。

3.3 再編した資料の概要について

資料の再編についてですが、なるべく初見の高校生にも理解を促せるように進めていきました。もちろんこれまでもその方針で進めてはありましたが、教科「情報」が導入されてからは、情報教育的な知見がある程度浸透しているのではという思い込みを危惧し、そのあたりを一度全て見直してみることにしました。その結果、筆者自身としては一定のレベルで改善できたのではないかと考えています。



3.4 まとめ

最後にまとめとして、教師の仕事は人を育てる重要な仕事であり、やりがいのある仕事でもあることを述べました。そして、自らの頑張り次第で様々な専門家にもなれるので、自分の特色を見つけることができる仕事であるとも述べて講演を終わりました。

4. 今後に向けて

本稿では、「授業と ICT」と題して、本年度の教職探究講座における筆者の講演内容について紹介しました。また来年度もお話する機会がございましたら、受講生のみなさんにとって少しでも教員を志すきっかけになれるように頑張りたいと思います。

参考文献

- [1] 文部科学省，“令和元年度 文部科学白書 第2部 文部科学技術施策の動向と展開 第11章 ICTの活用の推進”，2020，https://www.mext.go.jp/content/20200731-mxt_kouhou02-000009140_19.pdf (2023年2月6日アクセス)。
- [2] 岩井憲一：“5 情報教育研究”，教育総合実践センター年報，No.5，pp.64-65，2022，<https://www.edu.shiga-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/5abfbd4c273821f314c844538db65c68.pdf> (2023年2月6日アクセス)。
- [3] 文部科学省・総務省・経済産業省，“小学校を中心としたプログラミングポータル”，2020，<https://miraino-manabi.mext.go.jp/> (2023年2月6日アクセス)。

(文責 岩井 憲一)

7 教育実習支援（その1）

教育参加カリキュラムは、平成17年に始まり、今年で18年目を迎える。1年次の「教育参加プランニング」「観察実習」、2年次の「実習基礎」「交流実習」、3年次の「基本実習（教育実習）」「教育実習中間指導」「教育実習終了後（3年次の秋学期と4年次）の発展実習」「自主参加体験」という滋賀大学のすべての教育参加カリキュラムを、原則として4年間で積み上げ式に体験するプログラムである。特に、地域実習（平成17年から始まった栗東実習、平成25年度から始まった守山実習、平成30年度から始まった大津実習、令和2年度から始まった草津実習）は、「地域の公立学校における教育支援活動を通して実践的力を高める」という目的に則り、実習校、教育委員会、大学とが連携して行っている。

1. 教育参加プランニング

1回生の教育参加プランニングは、グループ学習を通して将来の目標を設定し、これからの4年間の学びを計画させるものである。プランニング作業は、個々の学生の立場から、教育参加カリキュラムにおけるそれぞれの実習の位置づけを明確にし、目的意識と見通しをもって、充実した学生生活を送るための一助となるものである。

2. 観察実習

観察実習は、交流・基本実習の事前指導として、附属学校園での授業参観等を行う、1回生の活動である。交流・基本実習を行う前に附属学校園の日常に触れ、教員としての心構えや学校園の現状を体感する機会になっている。

3. 交流実習

交流実習は、主に学校行事等における準備や運営に、指導者の立場から体験的に関わる実習である。2回生は、交流実習の中で、小学校では校外体験や運動会、中学校では体育祭や合唱コンクール（文化祭）等の指導補佐を行っている。先生方や児童生徒とのふれあいを通して、先生方が学校行事等を、どのように準備し、どのような配慮をしながら実施しているのかを実践的に学んでいる。

4. 基本実習

3回生になると、交流実習を行った学校で4週間（前期2週間、後期2週間）の基本実習を行う。具体的には、児童生徒の生活指導、授業観察、授業、一日担任などである。基本実習では、個別の児童生徒の対応にとどまらず、クラス全体を視野に入れて、児童生徒との関係を作っていくこと、授業を進めていくことが求められる。また、多様な児童生徒や様々な課題を抱えた児童生徒と向き合うことでより具体的な対応を学ぶことができる。



地域実習校での教育実習

5. サポーター活動（自主参加体験・発展実習）

地域実習では、基本実習の事前・事後指導の一環として、基本実習の配属校で3年次の3月まで原則として週1回のサポーター活動を行う（栗東実習3回生は全員必修、他も積極的に参加）。基本実習前のサポーター活動は、児童生徒や先生方との関係をつくることに重点を置いている。それを活かして、6

月から10月までの実習期間中での、児童生徒との信頼関係の形成、担当教員との授業の打ち合わせ、授業構想・指導案の確認等を行っているので、基本実習のために欠かすことのできない活動となっている。基本実習終了後の活動は、基本実習で学んだ成果を活かして児童生徒や先生とより深く関わり、学校の教育活動に積極的に参加することを目的としている。なお、基本実習前と実習期間中のサポーター活動は、自主参加体験として、実習後のサポーター活動は、発展実習として単位申請することができる。また、学生が希望すれば、基本実習の配属校で4年次になってもサポーター活動を続けられる。

6. 大学の支援体制

学生への支援体制は多岐にわたっているが、代表的な支援は、以下の3点である。

一つ目は、実習中の支援である。地域実習では、栗東・守山・大津・草津実習担当の学部教員が、学生の授業を参観したり、学生から実習の様子を聞いたりして、技術面・精神面への支援を行っている。また、基本実習を行う3回生には、第1ステージ（6月）と第2および3ステージ（9・10月）の間に、教育実習中間指導を実施している。教育実習中間指導では、それぞれの実習校での経験を語り、共有することで、前ステージの課題を見つけ、次ステージに向けての目標を明確にすることをめざしている。

二つ目は、実習後の支援である。基本実習とその年の教育参加カリキュラムが終了する頃に、各専修専攻毎に教育実習報告会を開催している。3回生が基本実習の成果を発表し、それぞれの経験を振り返る機会を提供している。また、1回生と2回生は、上回生の発表や彼らとの意見交流を通して、次に行う実習の情報を得ることもできる。

三つ目は、サポーター活動への支援である。スクールサポーターでは、運動会や音楽会といった学校行事の準備や手伝いといった、日頃は経験をしない、裏方的な仕事を行うことになる。そのことにより、授業という児童生徒の前で行うことだけでなく、陰で支える仕事の存在を知り、互いの思いやり、感謝、協力の心を学び、チーム学校の大切さを体感するのである。地域実習生だけでなく、附属実習の学生にもその機会を知らせ、紹介する支援も行っている。



スクールサポーター活動

7. 今後に向けて

今後、重点的に取り組むべき課題は、次の4点である。

- ① 教師という仕事の素晴らしさや、やりがいを実感させ、教師という職業への憧れや意欲を高めさせることにある。
- ② 教師になるまでの4年間の大学生活の間に、どのように学習をして、どのような力をつけなければならないのか、また、そのために、何に取り組めばよいのかといった具体的な内容を考えさせる。それらをもとにして、4年間の学習計画（プランニング）を立てさせる。その学習計画を、毎年、修正・実践を行うための支援を行うことである。
- ③ 学生の豊かな経験を深めるために、地域実習校と大学とが連携して、サポーター活動や発展実習が更に実践しやすいように環境を整えることである。
- ④ 今後、副免実習を行う学生が増える中、少しでも多くの実習生がスムーズに実習が受けられるように、地域実習校との連携を深めていくことである。

（水野 裕美）

8 教育実習支援（その2）

教育参加カリキュラムを円滑に進めていけるよう、1回生には観察実習の事前指導、2回生には交流実習の事前説明と3回生での基本実習を見据えた教育実習基礎の指導、3回生には基本実習の事前・中間・事後の指導、4回生には教職実践演習等の指導をおこなった。

1. 観察実習のための事前指導（8月4日）

【内容】

1. 指導のめあて 「観察実習で大切にすることを知ろう」
2. めざす教師像の確認 「私がめざす先生～こんな先生になりたいな～」
3. 授業の見方と観察記録の取り方
4. 観察実習で高める力
5. 心構え
6. ふりかえりと連絡事項

【各校園での観察実習実施日】

幼稚園：令和5年2月27日（月）、28日（火） 小学校：令和4年8月26日（金）
中学校：令和4年9月8日（木） 特別支援学校：令和4年9月8日（木）

2. 基本実習のための事前指導（教育実習基礎）（7月14日～11月17日）

（1）本指導について

「教育実習基礎」の受講を教育実習の履修条件に位置付け、実習参加予定者全員が必ず受講する。

（2）「教育実習基礎」の指導について

基本実習につなぐために必要な指導内容

- ①授業づくりと教材研究についての講義
（授業の構想と授業のイメージ：指導計画と授業過程）
- ②指導案の大切さと指導案の様式、指導案の書き方の具体についての講義
（指導後、指導案作成に係る課題を提示・・・中学校は各教科）
- ③模擬授業の学習指導案および教材等の作成（各グループごとに集まって作業）
- ④模擬授業の実施と指導Ⅰ（模擬授業および指導案に関する指導）
- ⑤模擬授業の実施と指導Ⅱ（模擬授業および指導案に関する指導）

（3）指導の場と時間の確保

	指導者	令和4年度実施日
A 来学指導1・・・①と②を指導	附属教員	小・中：7月14日（木） 14:30～17:00
B グループ作業・・・③の活動	大学で監督	小・中：8月3日（水） 9:00～12:00
C 来学指導2・・・④を指導	附属教員	小・中：8月18日（木） 9:00～12:00
D 来学指導3・・・⑤を指導	附属教員	小：10月20日（木） 15:00～17:30 中：9月29日（木）10月13日（木）20日（木） 11月17日（木） 14:30～17:00

3. 基本実習事後指導（11月10日，24日）

【めあて】 実習における成果と課題を明確にし，更なる学びを主体的かつ協働的に進めよう。

- 【内容】
- ・教育実習を振り返り，自己評価と課題解決に向けた取り組みを考える。
 - ・教育実習に関する自己評価結果と講義を基に，教師力向上の方策を考える。
 - ・仲間と協働し，仲間同士で育ちあう機会にする。

【日程と具体的指導内容】

	第1回（11/10）	第2回（11/24）
14：30～	はじめに	はじめに
14：30～	グループ協議① 実習を終えて 「教育実習で何を学び，何が自分の課題となったのか」	講義 自己評価結果からみる実習分析
	グループ協議② これからの自分 「この先の教職への志向と迷い，これからの自分の生き方」	講義 今後につながる指導改善 ～教師力の向上をめざして～
15：30～	グループ別協議の報告	記録用紙の整理，諸連絡
16：30～	諸連絡 授業レポートの記入	授業レポートの記入

4. 学級担任実践研修（11月～3月 各90分）

新年度4月から教職に就く学生への指導として，希望者に対し，具体的な教育活動を想定した学級担任研修を実施した。

【内容】

- ①4月を迎えるまでに
- ②初心者の心構え
- ③4月の動きと学級づくり
- ⑤教師の仕事
- ⑥年間計画と見通し
- ⑦所見の書き方
- ⑧保護者対応
- ⑨健康観察と保健指導 など



【写真】教育総合実践センターでの研修の様子

5. まとめ

コロナ禍で3年目の大学生活を過ごした3・4回生の学生たち。何とか教育実習は無事に終えることができたが，多くの授業をリモートで受け，学生サポーターとして教育現場へ出かけることさえままならぬ時期を過ごしてきた。その中で，今年度は多くの授業が対面指導可能となり，「教育参加プログラム」による教師力向上を強く意識した指導が展開できた。そこでは，まず教職への関心を深め，学校現場における実習への意欲を高めること。そして，ビジョンや見通しをしっかりと持たせ，主体的に実習へ臨めるように配慮した。その結果，とくにグループによる作業や協議，子ども役を確保した模擬授業等を通して，学生たちのモチベーションを高めることができた。

いま，学校現場ではICTを活用した授業が急速に進展している。その中で，これから教員をめざす学生たちに，教員養成系の学部としていかにその指導技術を高める環境を保障していくかが課題である。次年度に向け，この点からも指導の内容の更新と指導の工夫を心がけていきたい。（齊城 勝美）

9 キャリア支援の取り組み

1. 事業名および担当者

事業名：キャリア支援事業 担当者：学部教員 杉野 澄子

2. 事業の目的

大学での学びを支援し、就職相談を中心とした進路支援（キャリア支援）を行う。対面指導とオンライン利用による指導により、教員採用試験、その他の就職対策について指導助言をする。

3. 事業の概要

1) 取り組み

① 新入生対象 キャリア支援の案内とキャリア支援アンケートの実施

1年生全員の個人あてに、オンライン success のシステムにより「キャリア支援の案内」と「キャリア支援アンケート」を送付し、各個人から調査回収を行った。新入生の本学入学理由や大学生生活の満足度、進路（教職）希望の実態把握をし、学内での情報共有をした。

また、学生には、進路相談や就職相談などについて、キャリア支援室を訪問でもオンラインでも対応できる旨を案内した。

② 教職採用試験対策の指導

a 就職委員会主催の事業に協力参加する。

- ・就職・教職ガイダンス（3回生対象）（説明講義）
- ・教員養成研修（3回生対象）（説明講義）・分科会（高校の部の進行）
- ・直前模擬集団討論（4回生対象）集団討論・面接（説明講義）・班別模擬面接実施
- ・春季スタートアップ集団面接・討論（3回生対象）（説明講義）
- ・集団面接討論練習会の実施（3回生～4回生対象，3月14回・4月以降22回実施）

b 個別指導

- ・教職採用試験用小論文指導（小論文予想課題問題を提示，ワード文書で受けとり，添削してメール返送する。指導助言はメールおよび対面で行う）
- ・面接カード等の記入指導（手書きおよびメールによる文章提出を受け，添削を行う）
- ・個人面接練習指導（対面および ZOOM による実施）

③ 進路相談・就職相談

a 教職採用試験の受験についての迷いや他の就職採用試験の受け方についての相談

公務員試験対策，企業採用試験の受験対策の助言，エントリーシート記入助言を対面指導およびオンライン（メールや ZOOM 利用）により行う。

b 本学経済学部就職係への協力依頼の連携をする。（就職相談・企業説明会の実施など）

c 教員採用試験や他の就職試験関係の情報収集と掲示・求人票整理（キャリア支援室設置）

④ 入学時から就職決定までの「教員志望変遷の状況」レポートを作成（学内情報共有）＊後掲

2) 実績

a 進路・就職相談および面接練習・対策指導 年間 のべ 239人

b 小論文・エントリーシートの文章添削指導 年間 のべ 72件

3) その他 就職対策問題集および小論文対策図書の選定と貸出管理を行う（キャリア支援室設置）

4) 新入生対象アンケート調査結果

問1 あなたが本学へ入学した理由は何ですか。(1つ選択)

- 1 教職を目指しているから 2 入試難易度や受験科目などが自分にあっていたから
3 国立大学法人だから 4 親や高校の教師などが勧めたから 5 理由はない 6 他

回答 \ 年度	平30入学	令和元入学	令和2年入学	令和3年入学	令和4年入学
1	67.2%	55.2%	68.6%	65.3%	74.6%
2	12.4%	19.9%	15.9%	15.5%	12.1%
3	9.5%	16.6%	8.8%	11.7%	10.3%
4	6.2%	5.4%	4.4%	1.3%	1.7%
5	1.2%	1.2%	0.9%	2.1%	1.3%
6	3.3%	1.7%	1.3%	4.2%	0

問2 あなたは本学での大学生活に満足していますか。(1つ選択)

- 1 大変満足している 2 ほぼ満足している 3 やや不満である 4 大いに不満である

回答 \ 年度	平30入学	令和元入学	令和2年入学	令和3年入学	令和4年入学
1	33.6%	29.9%	4.4%	11.3%	28.9%
2	61.0%	63.9%	49.1%	64.4%	64.2%
3	5.0%	5.4%	40.7%	23.9%	6.5%
4	0.4%	0.8%	5.8%	0.4%	0.4%

* コロナ禍の急激な影響を受けた令和2年から徐々に満足度が回復し、コロナ禍前にもどった。

- ① 満足+ほぼ満足の理由：1 講義に関する事(42人) 2 進路に関する事(84人)
3 部活や人間関係(64人) 4 施設・設備(6人) 5 バイトなど(15人)
② やや不満+不満の理由：1 講義に関する事(5人) 2 進路に関する事(3人)
3 部活や人間関係(0人) 4 施設・設備(5人) 5 バイトなど(1人)

問3 現時点であなたの教職を目指す気持ちはどの程度ですか。(1つ選択)

- 1 ぜひ教職を目指したい 2 できるだけ教職を目指したい
3 教職以外を目指したい 4 どうするか決めていない

回答 \ 年度	平30入学	令和元入学	令和2年入学	令和3年入学	令和4年入学
1	56.0%	54.8%	62.4%	56.9%	63.4%
2	31.1%	32.8%	24.8%	31.4%	28.9%
3	6.6%	4.1%	4.9%	7.5%	5.2%
4	6.2%	8.3%	7.9%	4.2%	2.6%

4. 今後に向けて

使命感と意欲ある教員を育成すること、また、学生の希望就職に向けて指導助言を行う。

(杉野 澄子)

10 教員志望について「志望の変遷」を追う

滋賀大学は、教育学部と経済学部、データサイエンス学部の3学部からなる総合大学である。キャンパスが、大津と彦根にあり、教育学部のみ大津キャンパスである。一つの大学としての共通の教育活動もあるが、大津と彦根の距離が片道1時間以上を要するので、学生が行き来することは少ない。つまり、滋賀大学教育学部生は、単一の学部のキャンパスで学んでいる。

本学部入学の志望動機は、「教員として就職すること」を基本にしているが、就職結果をみると「教員以外」の仕事に就くものもいる。教員養成を理念としている教育学部の学生の教員志望の目標がどの時点でどのような理由によって変遷したのかを探ってみた。

学生には、在学中に何回かアンケート調査が各種行われている。今回、資料として使用するのは、

- ① 大学入学直後、前期中にキャリア支援アンケートとして実施しているもの。（キャリア支援室で実施）
- ② 1回生の11月に学生が所属するコースと専攻が決定したときに実施しているもの。（教育実践センターと教務係で実施）
- ③ 3回生の教育実習終了後、実施しているもの。（教育実践総合センターで実施）

この3種類の個人別調査データを用いて教員志望の変遷を追跡した。

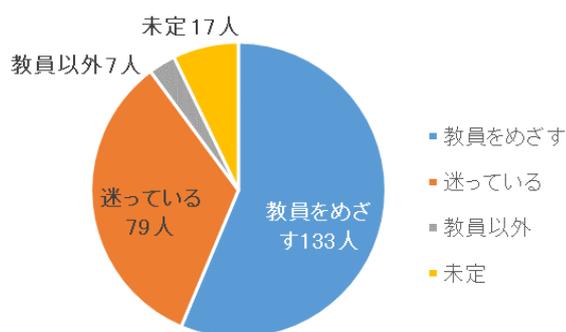
アンケート調査の項目は、

「1 教員になりたい。2 教員になるか迷っている。3 教員以外をめざす。4 未定またはその他」である。以下の資料は、直近の過去3年、2017年～2019年4月入学生＝2020年～2022年度卒業生のデータをまとめたものである。

1 2019年度入学生の進路希望調査の推移

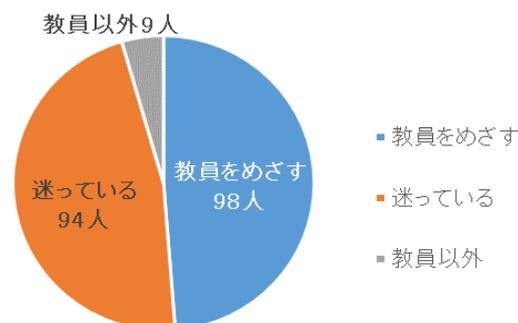
- ① 1回生入学時志望調査（4月～7月）（回答数 236人）

1. 教員をめざす	133人	56.4%
2. 迷っている	79人	33.5%
3. 教員以外	7人	3.0%
4. 未定	17人	7.2%



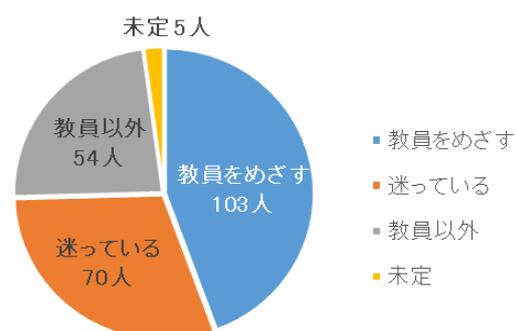
- ② 1回生コース決定時志望調査（11月）（回答数 201人）

1. 教員をめざす	98人	48.8%
2. 迷っている	94人	46.8%
3. 教員以外	9人	4.5%
4. 未定	0人	0.0%



③ 3回生教育実習後志望調査（11月）（回答数 232人）

1. 教員をめざす	103人	44.4%
2. 迷っている	70人	30.2%
3. 教員以外	54人	23.3%
4. 未定	5人	2.2%



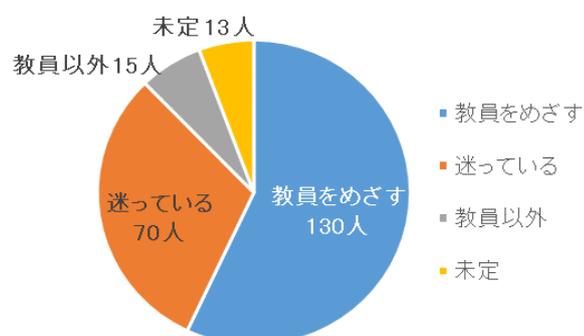
1回生入学時からコロナ禍の影響を受けた。教員志望者が1年11月時に大きく減少した。

3回生の教育実習後に、教員以外の方向を考える学生が50人以上となった。

2018年度入学生の進路希望調査の推移

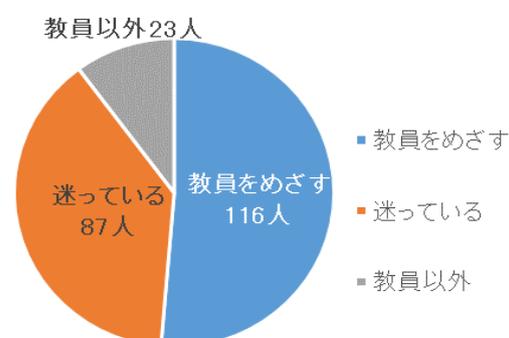
① 1回生入学時志望調査（4月～7月）（回答数 228人）

1. 教員をめざす	130人	57.0%
2. 迷っている	70人	30.7%
3. 教員以外	15人	6.6%
4. 未定	13人	5.7%



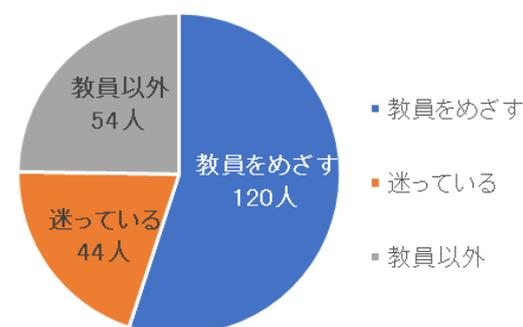
② 1回生コース決定時志望調査（11月）（回答数 226人）

1. 教員をめざす	116人	51.3%
2. 迷っている	87人	38.5%
3. 教員以外	23人	10.2%
4. 未定	0人	0.0%



③ 3回生教育実習後志望調査（11月）（回答数 218人）

1. 教員をめざす	120人	55.0%
2. 迷っている	44人	20.2%
3. 教員以外	54人	24.8%
4. 未定	0人	0.0%



1回生で迷っていた学生が、教育実習後、教員以外の方向を考える者は約50人。

教員志望者数は6割弱である。

2 教員志望者の推移と就職結果

上段：該当者/回答者の実人数

下段：該当者/回答者の割合

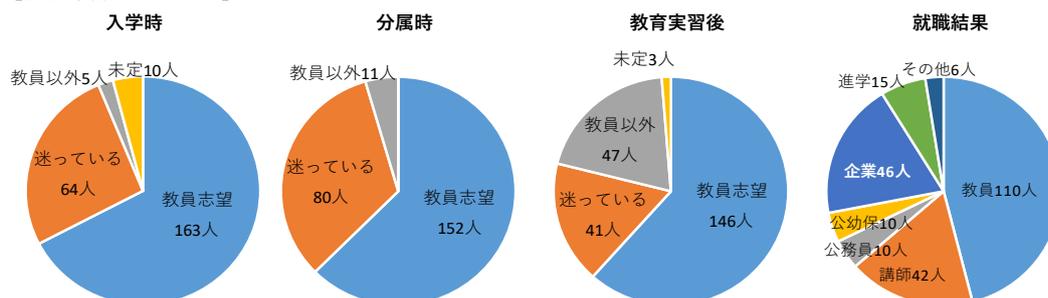
入学年 卒業年度	2017年 (H29) 2020年度	2018年 (H30) 2021年度	2019年 (R1) 2022年度	2020年 (R2) 2023年度	2021年 (R3) 2024年度	2022年 (R4) 2025年度
入学時教員 志望(1年6月)	163人/242人 67.4%	130人/228人 57.0%	133人/236人 56.4%	141人/226人 62.4%	136人/239人 56.9%	147人/232人 63.4%
分属時教員 志望(1年11月)	152人/243人 62.6%	116人/226人 51.3%	98人/201人 48.8%	138人/229人 60.3%	126人/239人 52.7%	151人/222人 68.0%
教育実習後 教員志望(3年)	146人/237人 61.6%	120人/218人 55.0%	103人/232人 44.4%	133人/226人 58.8%	未実施	未実施
教員就職結果 (含講師)	152人/239人 63.6%	122人/235人 51.9%	126人/237人 53.2%	—	—	—

※入学年 2019 年の教員就職結果は、2 月末現在

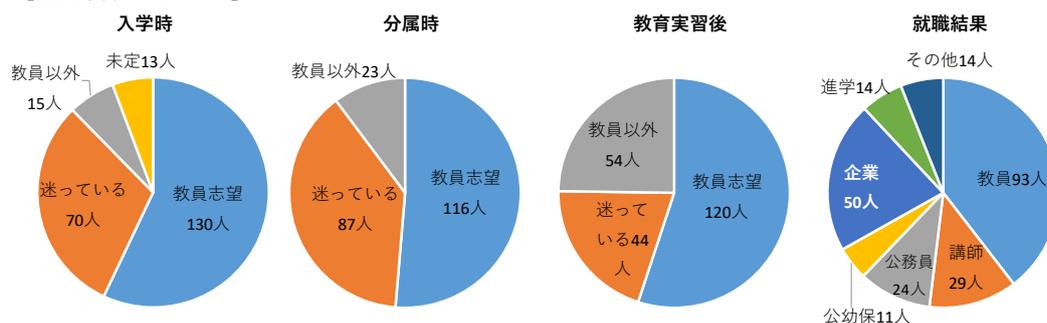
学校教員として就職した者、次年度に向けて講師就職した者は、2020年度卒業生から、10%減少してきている。人数にして約20人の減少である。

教員志望の変遷は、入学時から教育実習後まで減少し、就職結果は、入学時の志望者数に戻っている。教育実習では、学校教育の業務の多様さを実体験し、自信をなくす者がいる。

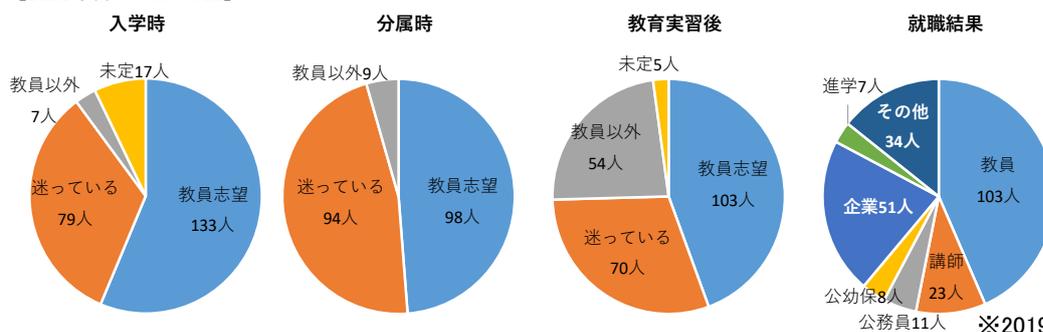
【2017年度入学生の志望】



【2018年度入学生の志望】



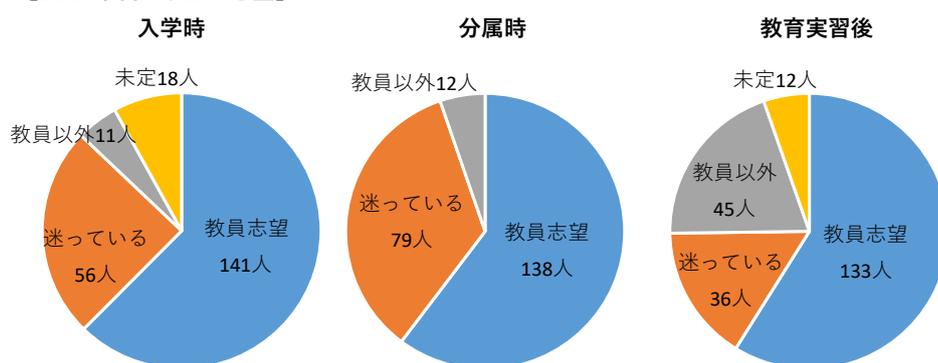
【2019年度入学生の志望】



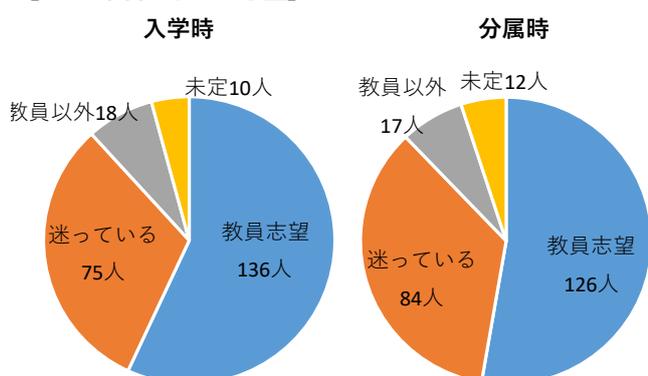
※2019 年度入学生の就職結果は 2 月末現在

過去 3 年間の卒業生は、どの年度も約 50 人が企業就職している。

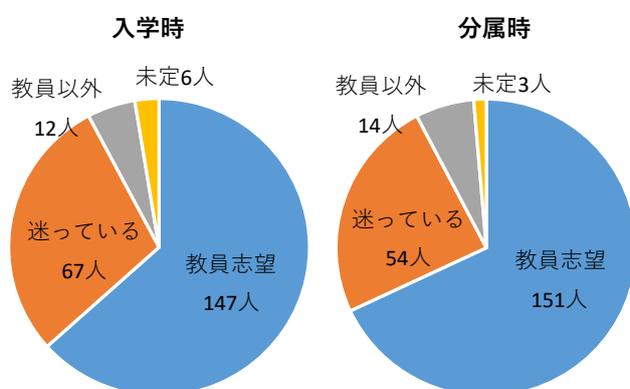
【2020年度入学生の志望】



【2021年度入学生の志望】



【2022年度入学生の志望】



教員志望の変遷について、1回生の入学時に比べ、分属時に教員志望が減少していたが、2022年度入学生は減少していない。

教育実習後に迷っていた者が半数に減り、教員以外を50人前後が考えるようになり、企業就職も50人前後である。

入学時調査で、教員以外の就職を希望している者が、どの年度も10人前後いる。本学の教員養成学部への入学動機はどのようであったか、疑問が残る。

3 卒業時の就職状況からみる進路希望の推移

卒業時の就職決定先をグループ化して、学生個別の教員志望変遷を追ってみた。
それぞれの就職先のグループ別に教員志望の変遷をたどる。

【2019 年度入学生】

グループを次のように分けた。2023 年卒業生 237 人のうち、教員志望アンケート（1 回生入学時・1 回生コース決定時・3 回生教育実習後）の 3 回分の回答を得ているのは 196 人である。

A 【教員採用試験合格者で学校に正規採用された者】

103 人（回答者 87 人）

B 【教員採用試験不合格だが、教員志望で講師になった者・含私立】

23 人（回答者 18 人）

C 【国家・地方公務員試験を合格し採用された者】

11 人（回答者 10 人）

D 【公務員試験により幼稚園・保育士に採用された者】

8 人（回答者 4 人）

E 【一般企業に採用された者】

51 人（回答者 47 人）

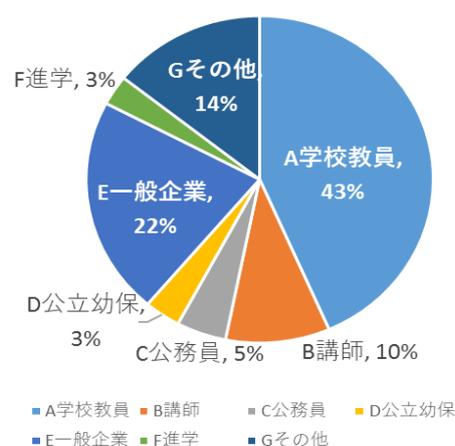
F 【大学院に進学した者含留学】

7 人（回答者 5 人）

G 【自営業・その他・不明】

34 人（回答者 25 人）（3 月末には、減少予想）

就職決定先別人数比（回答者237名）



※2019 年度入学生の就職結果は 2 月末現在

【2018 年度入学生】

2022 年卒業生 235 人のうち、3 回分の教員志望アンケートの回答を得ているのは 213 人である。

A 【教員採用試験合格者で学校に正規採用された者】

93 人（回答者 90 人）

B 【教員採用試験不合格だが、教員志望で講師になった者・含私立】

29 人（回答者 24 人）

C 【国家・地方公務員試験を合格し採用された者】

24 人（回答者 21 人）

D 【公務員試験により幼稚園・保育士に採用された者】

11 人（回答者 11 人）

E 【一般企業に採用された者】

50 人（回答者 43 人）

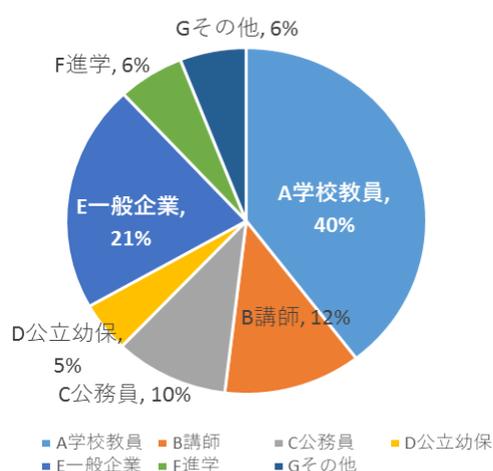
F 【大学院に進学した者含留学】

14 人（回答者 12 人）

G 【自営業・その他・不明】

14 人（回答者 12 人）

就職決定先別人数比（回答者235名）



【2017 年度入学生】

2021 年卒業生 239 人のうち、3 回分の教員志望アンケートの回答を得ているのは 223 人である。

A 【教員採用試験合格者で学校に正規採用された者】

110 人（回答者 104 人）

B 【教員採用試験不合格だが、教員志望で講師になった者・含私立】

42 人（回答者 40 人）

C 【国家・地方公務員試験を合格し採用された者】

10 人（回答者 10 人）

D 【公務員試験により幼稚園・保育士に採用された者】

10 人（回答者 9 人）

E 【一般企業に採用された者】

46 人（回答者 40 人）

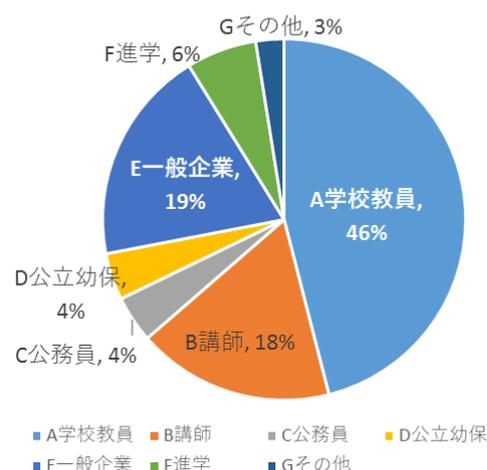
F 【大学院に進学した者含留学】

15 人（回答者 15 人）

G 【自営業・その他・不明】

6 人（回答者 5 人）

就職決定先別人数比（回答者239名）



◆ AグループからGグループ7種類の卒業時の進路別グループの教員志望変遷パターン

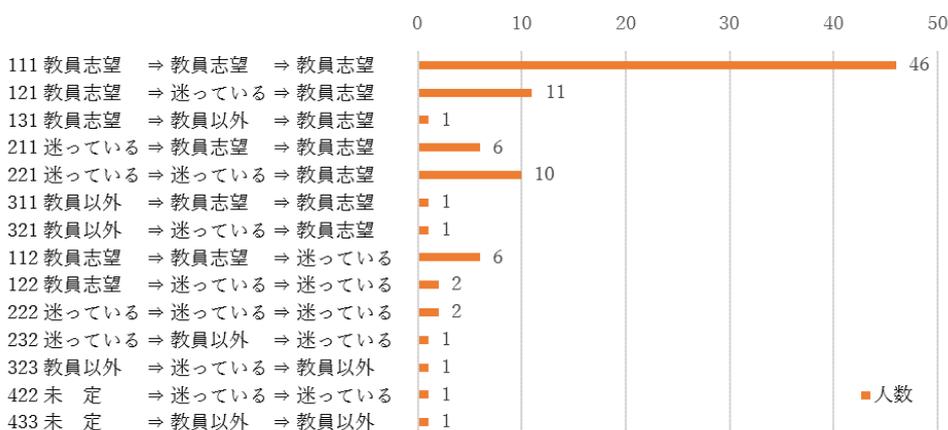
志望調査項目： 1 教員志望 2 教員になるか迷っている 3 教員以外をめざす 4 未定

調査時期： 1 年入学時調査 ⇒ 1 年コース決定時 ⇒ 3 年教育実習後

2018 年度入学生

【Aのグループ（教員）に属す学生（回答者 90 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】

Aグループ・教員合格者(回答者90人)の教員志望変遷



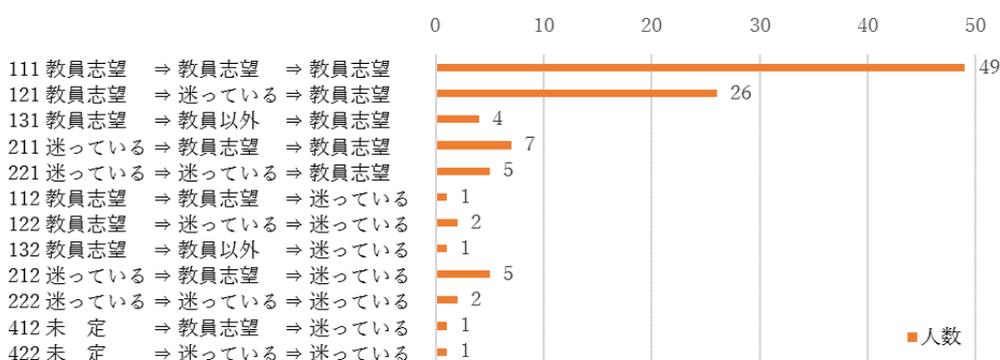
* 入学後から卒業時までの教員志望の変化がなく、一貫しているものが圧倒的に多い。

迷ったことはあってもいずれかの時点で教員志望の者が多い。

〈 2017 年度入学生との比較 〉

【Aのグループ（教員）に属す学生（回答者 104人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】

Aグループ・教員合格者(回答者104人)の教員志望変遷



*入学後から、卒業時まで教員志望の変化がなく一貫しているものが圧倒的に多いことがわかる。
教員以外を考えたことはあっても再度教員志望になっているものもいる。

2018 年度入学生

【Bグループ（講師）に属す学生（回答数24人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】

Bグループ・講師採用の者(回答者24名)の教員志望変遷



*教員志望の気持ちをいずれかの時期に持っている者が多い。

〈 2017 年度入学生との比較 〉

【Bグループ（講師）に属す学生（回答数40人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】

Bグループ・講師採用の者(回答者40名)の教員志望変遷



*教員志望者で一貫している者も多いが、いずれかの時期に迷いが生じている者が目立つ。

2018 年度入学生

【Cグループ（公務員）に属す学生（回答数 21人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*ほとんどのものがいずれかの時期に教員以外と考えている。

教育を学び行政的視点で公務員をめざした者もいる。

〈 2017 年度入学生との比較 〉

【Cグループ（公務員）に属す学生（回答数 10人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*入学時点では教員志望が多いが、教育実習後では、教員以外を目指す意思の者が多い。

公務員を目指すには、その対策の勉強が必要になるので意思が決まっている者が多くなる。

2018 年度入学生

【Dグループ（公立・幼稚園・保育士）に属す学生（回答数11人）の教員志望変遷は、以下のとおり】



*公立幼保の採用試験は市町の公務員試験から受験することになるが、幼稚園教諭も保育士も教員志望である。採用試験は幼稚園教諭と保育士を分けて実施される場合と一緒に募集される場合がある。

〈 2017 年度入学生との比較 〉

【Dグループ（公立・幼稚園・保育士）に属す学生（回答数9人）の教員志望変遷は、以下のとおり】



* 教員志望の意思がいずれかの時期にある。多少の迷いはある。公立の幼稚園教諭・保育士は市町の公務員試験で実施されるが、学生の意思は教員志望である。

2018 年度入学生

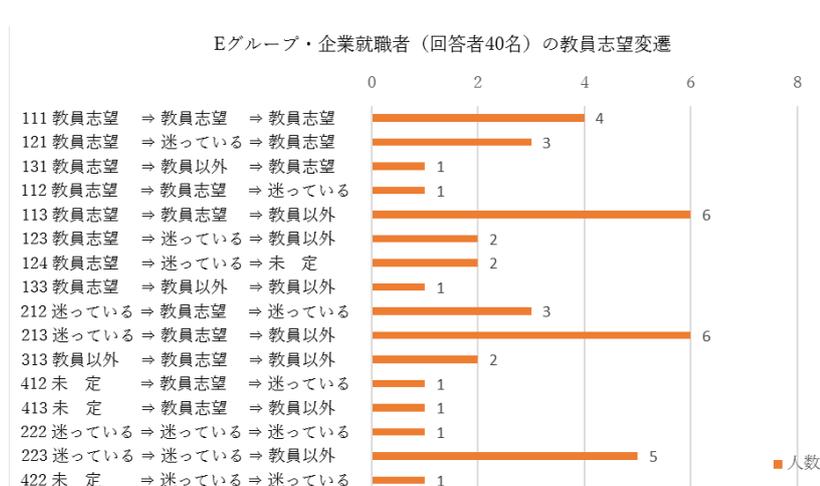
【Eグループ（一般企業）に属す学生（回答数 43人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



* いずれかの時期に迷いがあり，教育実習後は，教員以外や迷っていると回答する者が多い。

〈 2017 年度入学生との比較 〉

【Eグループ（一般企業）に属す学生（回答数 40人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



* 入学時点から「迷っている」「教員以外」と回答している者が目立つ。教育実習後で、ほとんどが教員以外，迷っていると答えている。教育実習後も教員志望と回答している者は，私立の幼稚園や保育園などに就職している者である。

2018 年度入学生

【Fグループ（院進学・留学）に属す学生（回答数12人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*教員志望で大学院に進学する者が増えた。

〈 2017 年度入学生との比較 〉

【Fグループ（院進学・留学）に属す学生（回答数15人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*教員志望でありながら迷いをいずれかの時期に抱いている者は多い。

2018 年度入学生

【Gグループ（自営業・その他）に属す学生（回答数12人）の教員志望変遷は以下のとおりである。】



*教員志望はいずれの時期も少ない。

〈 2017 年度入学生との比較 〉

【Gグループ（自営業・その他）に属す学生（回答数5人）の教員志望変遷は以下のとおりである。】



【考察】

2020年度卒業生，2021年度卒業生，2022年度卒業生の教員志望の変遷を辿ってみた。この年度は，大学在学時にコロナ禍の影響を受けている。自分自身の大学生活や授業の形態が大きく変わり，オンラインのシステムが可能なかぎり取り入れられ，学生達も対応してきた。そして，教員養成学部の学生にとっては，教員免許取得にむけた教育実習におけるコロナ禍の影響を大きく受けた。受入先の小学校や中学校も休業措置が取られ実習時期が変更されたり，小学生や中学生の健康指導や学習機会の確保に通常以上の取り組みがなされたりしていた。教育実習を困難な状況のなかに受け入れていただきながら，実習後の学生たちの教員志望数は，減少している。一部の学生からの話を聞くと，「教育現場の先生がたの教育活動の多様さに自信をなくした，自分にはできそうにない。」ということだった。たしかに，教育現場の取り組みは多様である。

しかしながら，コロナ禍の状況のなかで，学校教育を振り返ってみると，日本型学校教育においては，学習指導とともに生徒指導等の面でも，学校が大きな役割を果たしてきたことが再認識されたのではないか。

教員養成学部の学生には，「知・徳・体」を一体で育む学校教育の重要性をこそ深く受け止め，教育の仕事に携わる価値の大きさ，未来の形成者となる子どもたちの成長を育む教員の仕事のやりがいをしっかり受け止めてもらいたいと願っている。

(キャリア支援 杉野 澄子)

11 業務報告（春学期）

	キャリア支援	教育実習支援	石山プロジェクト
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・新入生対象キャリアガイダンス諸準備・実施方法協議・オンライン実施 ・キャリア支援室管理/備品・書類・図書整理及び貸出（以後年間常時） ・就職関係掲示物整理（以後年間常時） ・就職求人票分類・整理（以後年間常時） ・就職相談面談・面接指導 ・就職エントリーシート添削 ・教員採用試験小論文添削 ・教員採用大学推薦面接 ・教員採用集団面接・討論練習会 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・地域実習連絡協議会（栗東、守山、草津） ・教育実習委員会 ・地域実習校挨拶訪問（大津） ・地域実習市教委挨拶訪問（栗東、守山、大津、草津） ・基本実習オリエンテーション ・基本実習開始式（地域実習） ・附属教育実践総合センター会議 ・教員採用試験対策支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・春学期実施の打合せ 石山幼・小 ・退職女性校長会、退職園長への協力依頼 ・春学期参加募集受付（SUCCESS掲載）
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・教員採用集団面接・討論練習会 ・教員採用個人面接練習 ・インターンシップ面接指導 ・進路面談 ・教員採用試験小論文添削 ・2018入学生教員志望変遷資料作成 ・新入生キャリア支援案内・アンケート実施（オンライン） ・就職相談・面接練習指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・地域実習校挨拶訪問（栗東、守山、草津） ・基本実習訪問指導 ・個別支援チーム会議 ・教員採用試験対策支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・春学期募集締切5/6 ・打合せ会 石山幼・小5/13
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・進路相談 ・就職面接練習 ・教員採用試験集団面接・討論練習会 ・教員採用試験小論文添削 ・教員採用直前対策面接練習会資料作成 ・教員採用直前対策面接練習会 ・新入生キャリア支援アンケート回収、 ・新入生キャリア支援アンケート結果報告 ・新入生キャリア支援相談個票作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・基本実習訪問指導 ・京都府教師力養成講座説明会 ・教員採用試験対策支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・石山小学校省察会6/17
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・教員採用二次対策面接練習 ・インターンシップ事前指導 ・就職面談・面接指導 ・公務員小論文添削・面接練習 ・教採小論文添削 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・基本実習中間指導 ・中間指導アンケート実施（SUCCESS） ・交流実習オリエンテーション ・教育実習委員会 ・教員採用試験対策支援 ・体育実技練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・石山幼稚園省察会7/1, 7/22 ・石山小学校省察会7/15
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・教員採用試験面接練習 ・就職相談・面接指導 ・フォローアップ面談 ・教員志望変遷資料作成・整理 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・実習基礎 ・観察実習オリエンテーション ・教員採用試験対策支援 ・体育実技練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・石山幼小への秋学期実施意向確認 ・退職女性校長会、退職園長へ協力依頼 ・秋学期参加募集受付（SUCCESS掲載）
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・就職相談・面接練習指導 ・就職ES面接カード添削 ・就職・教採ガイダンス資料・pp作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・基本実習訪問指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・春学期石山小学校報告会9/16 ・秋学期募集締切9/22(10/3まで延長)

11 業務報告（秋学期）

	キャリア支援	教育実習支援	石山プロジェクト
10月	<ul style="list-style-type: none"> 就職・教授ガイダンス（説明講義） 教員採用試験・公務員試験結果等報告書整理確認 教員養成研修資料・pp作成 就職相談面談 面接練習指導 	<ul style="list-style-type: none"> 学生面談 基本実習訪問指導 1回生教育参加ガイダンス 1回生教育参加プランニング 教職実践演習 	<ul style="list-style-type: none"> 打合せ会 石山幼・小10/7
11月	<ul style="list-style-type: none"> 教員養成研修（説明講義） 就職相談面談 教員採用試験・就職関係図書選定 滋賀県教員採用試験問題開示・コピー 滋賀県議会常任委員会来訪・対応 	<ul style="list-style-type: none"> 学生面談 基本実習訪問指導 教育実習委員会 基本実習事後指導担当者打合せ会 基本実習事後指導Ⅰ・Ⅱ 事後指導アンケート実施（SUCCESS） 附属教育実践総合センター担当者会議 地域実習校謝意訪問（栗東・守山・草津） 	<ul style="list-style-type: none"> 石山幼稚園省察会11/18 石山小学校省察会11/25
12月	<ul style="list-style-type: none"> 就職相談面談 就職関係図書整理 就職用エントリーシート添削 企業就職説明会連絡（経済学部へ） 	<ul style="list-style-type: none"> 学生面談 教育参加ハンドブックの確認 地域実習連絡協議会（栗東、守山、草津） 地域実習校謝意訪問（大津） 基本実習事後指導（補講） 学級担任実践研修 	<ul style="list-style-type: none"> 石山幼稚園省察会12/20 石山小学校省察会12/23
1月	<ul style="list-style-type: none"> 春季教職スタートアップ集団面接対策・資料pp作成 就職相談面談 企業就職説明会（大津サテライト） 教採小論文添削 教員採用試験問題研究（滋賀県および近隣県市） 	<ul style="list-style-type: none"> 学生面談 実習基礎指導（補講） 令和4年度実習のまとめ 実習マニュアルの確認及び改訂 学級担任実践研修 体育実技練習 	<ul style="list-style-type: none"> 石山幼・小 省察会1/20 退職女性校長会（梅の実会）学部長へ挨拶、石山PJ継続依頼1/23
2月	<ul style="list-style-type: none"> 就職相談・進路相談 就職ES添削 教員採用試験小論文添削 教育実践センター報告書等原稿作成 春季スタートアップ教職面接練習会（説明） 2019入学生教員志望変遷データ集計 	<ul style="list-style-type: none"> 学生面談 教育実習委員会 実習マニュアルの確認及び改訂 教育実践総合センター報告書原稿作成 学級担任実践研修 	<ul style="list-style-type: none"> 石山幼・小 報告会2/17
3月	<ul style="list-style-type: none"> 春季集団面接・討論練習会 次年度新入生対象ガイダンスの実施方法検討・準備 就職相談・面談 就職エントリーシート添削 教員採用試験小論文添削 公務員採用試験小論文添削 	<ul style="list-style-type: none"> 学生面談 副免実習基礎①②③④ 副免実習基礎（補講） 令和5年度実習計画立案 学級担任実践研修 	

11 業務報告（春学期）

	共同研究・年報	教職実践講習 教職探究講座	出前講義	滋賀県総合教育 センターとの共同研究
4月		・教職探究講座の日程調整（連携高校及び担当講師）		・トータルアドバイザーとして連携窓口を担当（通年）
5月			・HP更新 「2022年度 出前講義一覧」	
6月	・共同研究の募集			
7月	・共同研究審査 ・共同研究採択通知			
8月				
9月		・講座開催について高校に確認		

11 業務報告（秋学期）

	共同研究・年報	教職実践講習 教職探究講座	出前講義	滋賀県総合教育 センターとの共同研究
10月		<ul style="list-style-type: none"> ・教職実践演習10/13(今井先生) ・教職探究講座OB参加学生募集 		
11月				
12月		<ul style="list-style-type: none"> ・教職探究講座12/21・12/22 		
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・年報の原稿依頼 (共同研究事業、センター業務) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職探究講座開催について 実践センターHPに掲載 		<ul style="list-style-type: none"> ・2/10の総合教育センター研究発表大会に向け、トータルアドバイザーとして連携窓口を担当
2月				
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・年報（第6号 令和4年度版） HP掲載 			

教育実践総合センター一年報 第6号

2023年3月発行

滋賀大学教育学部 教育実践総合センター

〒520-0862 大津市平津二丁目5番1号

TEL 077-537-7993(直通)

FAX 077-537-7909

<https://www.edu.shiga-u.ac.jp/cerp/>
